
ガルディアスの料理人（旧）

ひまじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガルディアスの料理人（旧）

【Nコード】

N6820T

【作者名】

ひまじん

【あらすじ】

2011.07.31更新停止 2011.08.01 新・

ガルディアスの料理人 連載開始（改訂版）

今作品の季節は夏ですが、新作品は諸事情により一つ前の季節に戻り、春から始めさせて頂きます。多数の方にご支持を頂きありがとうございます。新連載の季節が春から夏に移り、今作品に追い付いた時点でこちらは下げさせて頂こうと思っています。誠に勝手ながらご理解のほど、よろしくお願い致します。

あらすじ 一流との呼び声高き傭兵隊『暁』の隊長は、自他共に

認める料理人っ！？ 屈強な傭兵どもを率いて今日もデインは狩りに出る。恋愛？ ハーレム？ なにそれ美味しいの？ 料理『人』の話で『料理』の話じゃありません。

第00話 序章（前書き）

御連絡 6 / 19 構成を変更いたしました。

第00話 序章

2011・07・31 今作品は未完のまま停止致します。
2011・08・01 改訂版として『新・ガルディアスの料理人』を立ち上げました。

新連載は旧連載より季節を一つ戻した時点から始めておりますので、章が進めばこの旧連載に追いつく予定であります。

まだこの作品をお読みで無い方、ご興味をお持ち頂けた方は是非、新連載の方へお願いいたします。

繰り返します。この連載は未完のままで停止致しております。

それは常識的にみてあり得ないはずの光景だった。

空中に炎が舞い男の持つフライパンを絶妙の火加減で炙る。何も無いはずの空間から水がほとばしり焚火の上に用意したいくつかの鍋の中にたまって行く。

すでにそんな光景には慣れているのかテキパキとフライパンを振る男の指示の元、周りにいた男たちが数種類の実や野菜を和え男が鍋に出した水でスープを作る。

「隊長、スープの味見してもらえますか？」

フライパンを振る男の元へ、スープを作っていた男がお玉にとったスープを持ってくる。

「うーん、隠し味にクカの実をすり潰して入れてくれ、確か積んであったはずだから。量は鍋一つにつき半個ずつでいいぞ」

「クカの実ですか？」

どこか釈然としなさそうな男に簡単に説明してやる。

「クカの実はそれだけで食べるとただ渋いだけだが、水に溶くと渋みが消えて仄かな辛みが出てくるんだ。それに今日のスープはクラーガの肉を使ってるからな。クラーガの肉は独特の臭味くさいみがあるが、クカの実はそれを抑える働きもある」

「へー、わかりましたっ。すぐに用意します」

疑問が解けたら腹が減っているのだろう、パタパタと実を探しに駆けて行く。その背に向かって、多分他の小さな実と一緒に入っていると思うぞおー、と声をかけながらこちらも味を整えていく。

「よっしゃー、出来たぞ野郎ども。狩りたてホヤホヤ、鮮度抜群のクラーガのスープにポルクとザルクのサラダ。そしてメインは俺様特製麺で作った『ペペロンチーノもどき』だーっ、心して味わえ！」

「……………おー！！……………」

空は日も落ち薄明りも間もなく完全に途絶えるだろう刻限。思い思いの武器に防具を纏う、70人ほどの集団が奇声を発していた。

この無駄に賑やかな集団は傭兵隊『暁』の隊員たちであり、最初に大声で呼びかけていたのがその隊長であるディーン。

左右の腰には二本のサーベル。身軽さを第一に考えているのだろう、身体 of 重要な部分のみを必要最低限覆い隠す金属のプレートと他の部分を覆うよくなめした丈夫な革の防具。伸びっぱなしの髭と額にまかれた布で顔のほとんどの部分は判別不能。

自らが作ったパスタを列をなして並ぶ隊員たちに取り分けながら、洗いざらしの髪に隠れて平均よりもやや高い位置にある深い藍の瞳が楽しげに細められた。

今いる場所は遠くに山と森が見える以外は見渡す限りの赤茶けた地面。たまに枯れた木々が視界を横切る他は、ほとんど変わり映えのしないどこか荒れ果てた印象の景色が続いていた。

荒れ果てているのも道理のはず。この夏は酷い猛暑で連日続く日照りの影響か、どこもかしこもカラカラに乾燥しこの辺りでは田畑の実りもほとんど期待できないという。

今はやつと夏も終わりかけの季節になり暑さも和らいできたが、この隊が向かっている地方は特にその影響が強かったと言われている。

この暁の傭兵隊はルクセリア国にある地方都市ダランスから、更に三日間ほどかけて南端の町ファースラまで向かっていた。恐らくは明日には町に着くだろう。

日も落ちた今隊員達はいくつか作ってある焚火の火を囲み、明日

には町に着くという安心感とともに今日も隊長が腕を奮って作った料理をつつく。

ここ最近になってやっと魔獣よけの炎が苦にならない気温になってきた。魔獣の接近を知らせる魔術もあるが、夜の戦闘を避けるにはやはり炎は絶やさない方が無難だ。

「うーん、最高っス。まさか野宿生活でこんなにうまい飯にありつけるなんて。俺、暁に入ってよかった」

半分涙目で恍惚としながらパスタを啜っているのは切り込み隊長を自任するジャン。

頭から生えたややとがり気味の耳と、お尻の細く長い尻尾が感情をうつしてパタパタとせわしなく動く。豹属のジャンは決して大柄では無いにもかかわらず、この傭兵隊一の食いしん坊の称号を獲得している。

そのジャンを横目にどこか虚ろな目で料理を見ながら

「はあ、隊長の料理風景は何度見ても詐欺ですよ。まさか、これほどの量の水や火を魔力で作り出すなんて。そんな無駄な魔力の使い方をする魔術師は隊長ぐらいのもんです」

ディーンの魔力で作った水で出来たスープを手の中に、どこか疲れた表情でこぼす魔術師のカイト。

このカイトの言葉にディーン目がきらりと光る。

「馬鹿ものーっ！」

すかさず飛ぶお玉、ゴツつとお玉ではありえないような音が響いたがきつと気のせいだろう。

ちょうど跳ね返ったお玉の着地点にいるのは狼のジーク。取り分けてあつた狩ったばかりのクラーガの肉に齧り付きながら、尻尾でお玉を器用にディーンへと跳ね返す。

興味が無いのか、いつものことと取り合わないのか。一度も顔を上げることなく我関せずと、鮮度抜群の肉を堪能するジーク。

一人と一匹の絶妙なるコンビネーションを涙目で見るカイト。その魔術のもつとも正統なる使い道を理解していない可哀想な魔術師に、ディーンは崇高にして至高の教義を教授すべく滔々と捲し立てる。

「いいか、こんな便利で素晴らしい能力を、料理に使わずしていったい何に使えと言った？ 水量良し。火力良し。合わせ技で圧力なべも、電子レンジも真つ青なこの完璧調理器具。……これこそがっ！ もつとも正統なる魔力の使い道だっ！」

いまだにお玉の強襲の影響から立ち直れず、額を押さえて蹲っているカイト。

そのカイトを見下ろし足を踏みしめ仁王立ちながら、進行情熱のままにディーンは心の聖典バイブルからの一節、どこぞでお昼のテレホンショッピングにでも流れてきそうな、ディーンにとっては何よりも重要な教義をカイトに施してやった。

なぜか周りから酷く生ぬるい視線をそそがれている気がするが、

きつと気のせいだ。

「いや、『デンシレンジ』ってのがわかりませんけどあつ。あの、隊長。隊長も魔術師なら魔術師らしくですね……………」

なおもディーンに魔術師とは何かを説こうと試みるカイト。

「あー？ お前、今さら何言ってるんだ？ 俺は魔術師でもなけりや剣士でもねえ」

何度言っても覚ええないカイトに仕方がないなあとも言うように、静かに首を振りつつ溜息をつく。

ああ、聞きたくない。やめてくれ、と目で縋るカイト。

そんなカイトを慈愛のこもった眼差しまなみで見やり、おもむろにお玉を握りこむ。そしてディーンの口からは、これこそが究極の真理だつ！ とでも言うように重く、自信に溢れた言葉が紡がれる。

「俺は…………、俺はつ…………、俺はつ…………、料理人だあーっ！！」

お玉を突き上げ堂々と宣言する、魂の雄叫びっ！ 焚火の炎に照らされ神々しく光る聖なるお玉っ！

「……………なんであんたが隊長やってんだーっ！！！！」

ここに、ディーン率いる傭兵隊員たちの心は一つになった。

そして今日も暁の傭兵隊は平和であった。

それは何の変わり映えもしないある日の夕暮れが近づく時刻。喧騒にまみれた大通りを離れ、入り組んだ路地裏を奥へ奥へ迷いのない足取りで一人の男と漆黒の狼が進む。

男の腰には装飾のほとんどない二本のサーベル。使い込みくたびれ元の色もあやしくなった外套を纏い、額にはおそらく元は鮮やかな青であつただろう布が巻かれている。

布の下には少し日が陰つただけで黒と見まがうほどに濃い赤の、乱雑に切られた髪のが男の肩甲骨の上あたりに揺れている。そんな男の顔半分は無精ひげが覆い隠す。

男の醸し出す雰囲気からは40代ぐらいかと思えるが、その顔の中で唯一はつきりと存在を主張する、切れ長の深い藍を宿した瞳は何やら楽しげにまたたき、それが男の印象をどこか掴みどころのない、年齢不詳のそれへと書き換えていた。

いつしか喧騒は途絶え、どこからかすえた匂いの漂う廃退的な町の一角に、埋もれるようにして立つ一軒の酒場。そこにあると知らなければ、間違いなく通り過ぎてしまっただろう小さな店。その店に

男と一匹は迷いなく足を踏み入れた。

中はカウンターが5席、テーブル席が申し訳程度に2つ並ぶだけの小さな店。外見の印象を裏切らず営業中なのかも怪しくなるような薄暗い店内を進み、男は躊躇うことなく、指定席とばかりにカウンターの一番奥に腰を下ろした。

「——よう、ディー、まだ悪運が尽きねえみたいだな」

カウンターの内側からグラスを磨いていた男が静かに声をかけてくる。浅黒い腕は竜人族の特徴である鱗に覆われ、深く年輪のように男の顔に刻まれた皺が男の老いを感じさせる。

しかしその眼光は鋭さを失わず男の若かりし頃を彷彿とさせ、場末の酒場に不似合いな重厚感をも醸し出していた。

だがそんな瞳もディーンをチラリと一瞥したその一瞬だけは柔らかく和み、すでになじみと言っていいだろう男の無事な姿を喜んでいることをうかがわせた。

たった今磨き上げたばかりのグラスに琥珀色の液体を注ぎカウンターへと滑らせる。

「それはこっちのセリフだろゲイル。相変わらず暇そうな店だ」

にやつと髭に埋もれた唇を歪めながら、ぐるっと大げさに店内を見渡すが小さな店に客はディーただ一人。カウンターの酒を一口含みながらそう揶揄するも逆に

「うちはどっぴり日が暮れてからが営業さ。こんな日のあるうちに

来るような怠けものは貴様ぐらいのもんだ」

とかわされる。しばし慣れたやり取りを交わすゲイルへ向けて、デイーは肩をすくめながら銀貨を一枚スツと滑らせ最近面白い話は何かないか、とささやく。

ゲイルはカウンターを一瞥し、

「この国の南側の噂が一つ、アダルディアの東側と真ん中あたりの噂が一つずつ。ザガリアのものは入ってきてから一月ほど経ってるな」

「この国とアダルディアのものを」

ゲイルはチラッと一瞬デイーを見、おもむろに銀貨を一枚とるとその銀貨でカウンターを コツコツ と二度叩いて見せる。

チツと舌打ちしつつもさらに革袋から銀貨を二枚取り出しカウンターを滑らせるデーン。

「——で？」

その後しばらく薄暗い店内を二人の男のささやきが満たし、日の光が途絶え、一人、二人と客が入ってくるころ、一人と一匹は店を後に闇の中へと身を沈めた。

とある場所で、とある男の魂の雄叫びがあがる、随分と前の事。

この大陸の名はガルディアス。

多くの半島や島を持ち、広大な大地にはけわしくも豊潤な恵みを齎す山々が連なり、川が流れ、いくつもの豊かな水量を誇る湖を内包する恵み多き大地。

その広大な大地の恩恵を受けるのは、人ばかりではない。

この大地で魔獣と呼ばれるものと人と呼ばれるものたちの争いはいつから始まったのか。それは歴史さえも残らない、古のころより続く大地の覇権と種としての生存をかけた争い。

互いに捕食し、捕食されるものたちが争わずに生きることとは不可能であったのだろう。そして、今なおこの大陸の覇権は定まらず、魔獣と人は互いの生存本能のままに争い、また人と呼ばれるものたちはその括りの中でさえも、争う。

ガルディアス大陸の豊潤なる美しさに反比例するかのように、その大地は血塗られた歴史を今もなお、刻み続けていた。

どれほどの年月を争い続けたのか、いつしか魔獣と人は互いに集まり、纏まり、人は村を、町を、そして国を形作って行った。

主に地を走る強靱な四本の足、獲物を切り裂く牙や爪を持つ魔獣たちは険しい山や深い森の中に。二本の足で歩きあらゆるものを生み出す二本の手を持った人はなだらかな平野に生きる場所を求めたのは、必然であつたのかもしれない。

人は魔獣の脅威に怯え、抗いながらもいつしか多くの国を興していった。だが、魔獣に対しては人という括りで語られたとしても、人は決して纏まつた一つの種族ではありえなかった。

二本の足で歩き、互いに言葉を介して意思を伝えあい、魔獣に対しても同じように敵対する者たち。

だが、彼らは決して『同じ』では無かった。

二本の器用に動く手を持ち、二本の足で歩き魔術を使う『人族』

その人族によく似た姿に獣と同じ耳や尻尾を持ち、俊敏で高い身体能力を有する『獣人族』

手足に鱗を持ち、頑丈で強靱な肉体を持つ『竜人族』

頭の上に硬い角を生やし強力を誇る『鬼人族』

背に翼を持ち自由に空を駆ける『翼人族』

彼らは皆、似て非なる種として、魔獣に対し、時に共闘し、時には互いに争い、『人』としての歴史を刻んできた。

そして、『魔獣』や『人』の他にも、伝説とされるいくつかの種族がある。絶えて久しいのか、それとも、人も魔獣も立ち入らぬ、奥深い秘境の地に隠れ住むものなのか。人の間ではお伽噺や伝承として語り継がれる存在。人はかれらを畏敬を込めて『幻獣』そして『精霊』と呼んだ。

第01話 ファーサラの町

—— ザッザッザッザッ ヅザッザッ ザッ

大勢の足音が風の音と砂のこすれる音しかない、開けた空間に吸い込まれていく。

太陽が中天を過ぎさらに数時間が経った頃、薄らと残る街道を歩く汗と埃で薄汚れた集団、暁。

すでに変わり映えのしない景色にも飽き、叩く無駄口さえも出無くなった頃。 やっと小さく枯れ木と渴いた土以外のものが目の前に現われた。

現われたものはどっしりとした存在感のある石の壁。

暁の目的地、ファーサラの町を囲むように作られた城壁だった。

ファーサラの町は、人口約三千人ほどの小さな町である。ルクセリア国の中でも最南端に位置し、その先には深い森と魔獣の住む高く峻しいラドラス山脈が横たわり人の侵入を拒んでいた。

ラドラス山脈に続く森の中、人が足を踏み入れて無事に帰ってくることが出来るのは、精々森を一日二日進んだ辺りのごく浅い所だけ。

それ以上奥に進むにはそれなりの腕をもつ少なくとも一個小隊以上の人数と、入念な準備が必要と言われている。それでもなお辿り着けるのは森の奥、山裾に差しかったあたりまで。

山を越えた先にはネルランダ国の領土が広がり、栄えた町があると言われている。だがここファーサラはルクセリア国の主要な街道からも遠く離れ、特別な特産物があるわけでも無くあるのは人を拒む深い森ばかり。

それでもここに住む者達は日々土地を耕し農産物を育て、その日を当たり前に暮らしていた。この地に住む領民たちのほとんどは農業に従事するか、それに関係した職に就いている。

だからこそ、この干ばつの影響をもつとも受けている場所の一つと思われていたのだが……。

「へー、小さい街って聞いてましたけど石垣で囲まれてるってことはそうでもないんですかね」

「いや、この町は男爵領だがラドラス山脈との境界にあたる町だか

らな。何かあった時にはここで魔獣共を食い止めてもらわねえとヤバいつて分かつてる連中や、国なんかから援助があつたんだろう。そうでなければ、この程度の小領主じゃこんな規模の城壁は築けねえしな」

どこかのんびりと町の印象を語るのは入って間もないハーディー。あまり裏を読む事の無い素直な性格は、いまだ傭兵になって日が浅いからだろうか。

「さすが隊長。よくそんな事までわかりますねー。男爵つて言ったら貴族様でしょう？　僕なんか、それだけでお金持ってると思うんですけどねー」

城壁を見上げながら呟くハーディー。もしこの時彼がディーンの方を見ながら話していれば、ディーンがどこかばつの悪そうな顔をしている事に気付いただろう。

「全員並べ中に入るぞ」

場を誤魔化すように大声で、バラバラに散らばっている隊員に声をかける。数人ずつ、門の左右に並ぶ兵士に傭兵ギルドの証である胸から下げたプレートを示して町の中へと入る。

「じゃあ、お前らいつも通り。寝床の確保と情報収集に……………」

「——はいっはいはいっ！　隊長。俺、情報集めてくるっス」

まだ話途中のディーンを待ちきれないとばかりに遮り、前にいるものを押しのけ思いつきり手を振るジャン。期待に満ちた目を見返すディーンの目は、反対に何かを諦めたかのような諦観が宿る。

「……わかった、行つて来い。ただし何か美味しいもんがあつたら報告しろよ」

「行つてきまーすっ」

ため息混じりの『行つて』が耳に入つた時点ですでに駆けだしているジャン。その姿になんて仕事熱心で感心な奴だ、など思うものはこの傭兵隊には、いない。すでに小さな後ろ姿になったジャンに皆、呆れた目を注ぎながら、

——「こんだけ小さな町じゃ、食いもん屋の数も大してないだろー」

——「いや、それでも何か特産ぐらひはあるんじゃないか？」

——「屋台はどうか、なんかいい匂いしないか？」

——「よし、あいつが食つてくるのが屋台か店か、賭けるか」

——「いいぞ、俺は屋台だ」

——「なら、俺は両方に賭けるね」

口々に、好き放題話す隊員たち。そう、ジャンが喜び勇んでいったのは、『情報収集』という名を借りた食べ歩き。ジャンはこと、『食事にかける情熱』という一点ではディーンにさえも負けてはいなかった。

ただこの二人、注ぐ情熱の量は同じでもその方向性は全く違う。

ディーンが、持てる情熱の全てを注いでいるのは『美食』

これは決して、ディーンが高価な料理や珍味を要求するという意味ではない。ディーンが何よりも拘るもの、それは『味』

食材はその季節に置いて最も美味しいとされる旬のもの。そしてその旬の食材をディーン自らの手で繊細にして大胆に、素材にあった最高の調理をほどこし余すことなく活かしかる。

それを美味しく食べることこそが、ディーンの追求する『究極の食』

決して大量に食べるわけではなく、言うなれば『量より質』！

対してジャン、彼はひたすら食べる。さほど舌が驕っているわけでもなく程々に美味しければ幸せだという彼は、ズバリ『質より量』！

目の前に大量に料理がある事こそが、至福の喜びだと言うジャン。食事に対する情熱は互いに引けを取らないくらいに、大きく熱いっ！

しかし、彼らがわかりあうにはその道のりは遙か遠く、そしてけわしい事だろう。

ディーンが自分の作った料理を毎回美味しくうにガツガツと貪り食べるジャンに対して、料理人としての喜びを感じると同時に、一抹の侘^{わび}しさを感じるのは如何^{いかん}ともしがたいものである。

毎回の事なのに思わず遠い目で見送ってしまったディーンは、気を取り直すように賭けまで始めてしまった隊員たちに呼び掛ける。

「あー、あれはほつといて、聞けー」

結構酷い扱いであるが気にしない。隣では馬鹿らしいとばかりにジークが欠伸を一つ。

「予定していた時刻よりも遅くなっちゃったから、俺とガストンは先に雇い主のところに顔を出してくる。後はいつも通り、五人は宿の確保。残りは情報収集。もし宿が足りないようなら、どうか納屋でも借りられるように交渉して来い。何か質問は」

ぐるっと隊員たちを見回し反応を確かめ、

「よし、一旦解散」

思い思いに散っていく隊員たちを尻目に副隊長のガストンと二人、ジークを伴って入口を背に町中に向かって歩いて行く。

この町は魔獣の襲撃に備え、もつとも森に近い南側に砦を配置し、領主の館は町の中央部に位置していた。

第01話 ファーサラの町（後書き）

御挨拶

まずはお読み頂きありがとうございます。

こちらの後節には本文と関係ある事も無い事も、気ままに書き散らされておりますのでお嫌な方は『スルー』なさって下さいね。

恐怖体験 その一

暇人です。

新規で投稿したら『執筆中小説』からは削除されるんですね。

知らずにフリーメモに残された、続編一万文字。

見事に『削除』されました。

……。ふふっ、人生ってこんなもんですよね。

朝日が目にしみるっていいですけど、身体にも刺さりますよね……。……。

第02話 交渉 前編（前書き）

御連絡

7/21 改稿しました。

大筋はそのままですが、色々削ったり並べ替えた部分があります。
御了承下さい。

第02話 交渉 前編

ディーン達はすでにダランスの町でギルドから仕事を受けているため、この町のギルドには寄らずに真直ぐ領主の屋敷を目指した。

領主の屋敷が町の中心に位置している為、必然的に町の様子を眺めながら大通りを歩く事になる。

その途中で見かけたファースラの町並みはこの土地でとれる石と南に広がる森の木材を上手く合せたもの。

東洋風とも西洋風とも言い難い独特な家々が並んでいた。

色も都市の華やかさとは打って変って石や木材の地色を活かした地味なもの、よく言えば落ち着いた雰囲気醸し出している。

小さな町とは云っても、三千人ほどの人が生活する町である。大通りには食料や日用雑貨を売る商店や露店がそれなりに軒を連ね、通り過ぎるディーン達へ威勢のよい呼び込みの聲がかけられた。

そう、活気に満ちた威勢のいい声が。

何故こんなにも活気を保っているのか。

店じまい前の時間帯だと言う事を考慮に入れたとしても、本来であれば干ばつの影響で豊富な食料が並ぶとは思えない。ましてやこ

こはこの国の南の端の町。

小領主ごときの蓄えや輸送手段を考えると、他から運び入れるにも限度がある。

なにせここから一番近い町、ダランスまでも傭兵の足で歩いて三日。馬車を使うにしても一杯に荷を積んだ馬車がそうそう速く走れるはずもない。

第一地方都市ダランスとてここからそれほど離れているわけではない。同じく干ばつの影響を受けている。デーン達がここに来る前にいたその町は、少し通りを外れただけで暗い目をした者が蹲り、暗がりからは薄らと闇の気配が漂っていた。

それが更に奥地のこの町で、呼び込んで売るほどの食料があるのは不自然だ。

歩きながらデーンが目の端に捉えた食材たちは、ここ数日に採れたような種類は殆ど無い。量だけはあるが日持ちのする物が中心に並んでいる。

葉物は殆ど無く、肉も生肉よりも燻製や加工された物が多いの場所を占めていた。

生肉が少ないという事は、森へ入る事もある程度制限されているという事か……。

生憎値段は無駄話をする時間もなく確かめる事は出来なかったが、それでもそれを買っている者の遣り取りを歩きつつも窺^{うかが}うと、多少顔を顰^{しか}めるくらいで済む程度。

この町で採れたというよりは、どこから運び込まれたと考える方が自然なのだが……。

ディーンは本来であれば隊員たちに情報収集をさせた後で交渉にのぞむ。

だが今回はダランスの町で少々時間を取り過ぎた。

到着がギリギリで町の情報を得るよりも先に交渉の場へ行く事になったのが悔やまれる。

ディーンは領主の屋敷へ至る道をガストンやジークと共に歩きながら、ここに来るまでに隊を使って集めた情報と自ら転がり込んできた情報を一つ一つ吟味する。

そうやって歩いているとそれ程大きな町では無い為か、目当ての屋敷はほどなく見つかった。

門前には警備の為の兵士が二人。こちらを油断なく睥睨している。

その兵士の後ろに建つ屋敷は周りの家々に比べればそれなりに大きくどっしりとはしているが、他の都市や王都に建つそれを見慣れた目にはいささかこじんまりとして見える。

建物自体はかなり年季の入った物のようだが手入れは丁寧にされているようで、透かし見える庭もやや地味な印象ではあるが過不足無く整えられていた。

ディーンは庭や屋敷の様子をざっと見てとると、もしこれが当主

の人柄を反映しているのならあまりおかしい相手ではなさそうだと内心でまだ見ぬ雇い主を思い描く。

よく訓練されているのか直立不動でこちらを見ている兵士の一人に、ギルドの依頼書を見せ取り次ぎを頼む。

訓練されているとは云っても恐怖心はそれとはまた別なのか、デインの隣に大人しく佇むジークから視線がそれないのは御愛嬌といったところか。

案内の者を先頭に実用的に整えられた長い廊下を歩きながら、デインはゆっくり一つ目を瞑り、纏う気配を一変させる。

歩き方、表情、気配が一瞬にして別人のそのように変化する。

大きくザカザカと歩く足運びを、一步一步悠然と。普段はにやにや笑っているような表情が、スッと消えさりその後に浮ぶのは冷然と微笑む氷の微笑。口元は緩やかに弧を描き、普段楽しげに瞬く瞳は今は怜悧な光を宿す。

毎日楽しくて仕方がないともいうような気安い気配が刃向う者は容赦なく擦じ伏せる、強者のそれへと変化した。

長い廊下を歩き幾つか折れた先にある奥まった一室、重厚に作られた扉の前。

左右に警護の為だろう二人の兵の姿。

コンコン

兵士たちを一瞥し、扉が叩かれる。

——傭兵隊暁の者が参りました。

——入れ

案内の者が扉を開け、自らは入るつもりが無いのか横にずれる。

デインは腰の剣を兵士に預けゆつくりと扉から七歩、部屋の中
ほどまで入る。その後を追うように静かに続くのはガストン。

扉の中にいたのは二人の男。

部屋の中の様子は今までの印象を裏切らず、装飾を抑えた実用的
なもの。

人を中心に招き入れる事も想定してか応対用のものはあるが、ど
ちらかと云えば必要最低限置いてあるという印象を受ける。

一人は奥まった場所で腰を下ろし、積み上げられた書類の一部を
手にしている。もう一人の男はその横に立ってこちらを見ていた。
席に着いている男が男爵、恐らくもう一人の男はその補佐だろう。

貴族同士で交わされる何種類もある礼のうち、貴族が傭兵から貴
族に対する礼として相応しいと求める物。足を揃え右手を胸に、腰
を30度ほど折りゆつくりと頭を下げるもの。

貴族社会で長い時間をかけて複雑に形成された拳句に形骸化した礼儀作法は、腰の角度や頭の位置どころか指の位置まで決められた細かなもの。

貴族の生れでは無いものがそれを身に付けることはひどく難しい。だが多くを持つ者は得てして、持たざる者の都合など齒牙にもかけぬもの。隊長として当然のようにそれを要求されることにも、もう慣れた。

傭兵として求められるものは『強さ』

その筈なのに傭兵隊として名が売れば売れるほど、求められるものは傭兵としての腕では無く礼儀作法に金や身分を持つもの達の上手なあしらい方とは…………。

思わず失笑が漏れそうになるが、そんな失態はおかせない。

ディーンはその細かな礼を相手が気分を害さぬ程度に、わざと少しずつ崩して行った。半歩後ろではガストンが、ディーンのそれよりも更に若干不器用に頭を下げている。

「ダランスにおける傭兵ギルドより卿の御依頼を受注致しました傭兵隊、暁の隊長を勤めておりますディーンと申します。後ろの者は私の副官でガストン。以後お見知りおきを」

「顔をあげよ、そう畏まらずともよい。まずは依頼を受けてくれた礼を言う。よく来てくれた」

そろそろ初老に差し掛かるかと思われるくらいの、穏やかな顔を

した男が立ち上がりながらディーンに声をかける。

その声を聞きながらディーンは内心、どうやら今回は屋敷の印象通りまずまずの相手のようだと考える。

貴族の傭兵に対する対応はそれこそピンからキリまで幅広い。

今回のようにまともに話をする姿勢を持つ者もいれば、傭兵など命じるままに動けばそれでいいと替えの利く道具と同じ程度にしか考えていない者もいる。

部下を寄越さず自ら相手をしようというのも高印象だ。

ディーンは浮かべる表情はそのままに、男爵の評価を少しだけ上方に引き上げる。

ディーンによるこの採点、当然ながら相手によってはマイナスに突き進んで行く場合も山ほどある。むしろ貴族相手ではプラスの方が少ないくらいだ。

補佐の男がディーンたちを部屋に申し訳程度に設^{しつ}えてある応接用の長椅子へと誘導する。

男爵が腰を下ろすのを待ってから、ディーンはゆっくりと対面に腰を下ろした。ガストンと補佐の男はそれぞれ男爵とディーンの斜め後ろに静かに立つ。

「では早速ですが御依頼内容の確認を。若輩ながらこれでも隊を預かる身です。契約の条件について不備なく契約をかわすのも、私の仕事でございますので」

男爵は鷹揚に一つ頷く。

「ではまず、契約を受注する際にギルドより既に前金として三割を頂いております。残りは成功報酬として契約終了時に頂くと言う事で間違いは御座いませんか」

ギルドを通して別の町にいるものを引っ張ってくる場合、移動等に費用がかかる。傭兵隊の人数が多ければ多いほど、移動費用は馬鹿にならない。

それを雇い主が負担することは無いがその代わりに報酬のいくらかをギルドを通して前払いにて支払い、もし傭兵隊がその依頼に失敗したとしてもその分の金に返済の義務は生じない。

後は依頼の内容や支払われる総額をみて、その仕事が移動にかか^{おの}る費用を差し引いても受けるに値するかどうかを傭兵隊が決めるだけだ。

絶対に前金が出るというものでなく、個人の傭兵の場合はまず考慮されない。これはある程度実績のある纏まった戦力を必要とする雇い手側と、雇われる傭兵側の事情を考えて生み出された制度だからだ。

個人や少人数の傭兵隊でこの制度が適用される事は滅多になかった。そしてこの前金が確保出来るかどうか、各傭兵隊の隊長の腕

の見せ所でもある。

「では次に契約内容のご確認を。こちらがギルドより受け取った契約書になりますが、こちらによりますと、我々の仕事は魔獣の討伐ですが契約書には達成義務は明記されておりませんので、実際の討伐の有無は契約には影響しないものと考えます。

確定した契約期間は明日からの十日間。その後は状況に応じた契約の更新で十日ごと、最大一ヶ月間まで。延長分の金額は最初の十日間と同じ。という事で間違いございませんか」

淡々と話してはいるがよく聞くとその契約日数は手許にいるが、まるで仕事をする気は無いと言っているようにも聞こえる。

男爵は啞然としながらも慌てて、

「いや、達成義務とは……。確かにギルドを通して出した依頼には、魔獣をどれだけ狩るかは書いていないが……。」

行き成りな上に想定もしていなかった事を言われて、目をウロウロと彷徨わせながら手元の契約書を再度確認しようとする男爵。

——達成義務というのは……。

慌てて言いかける男爵の声に被せるようにしてディーンは続きを話す。本来は不敬であるが今は男爵もそれ所ではないようだ。

ただ男爵の後ろにそつと控える男の視線が、何やらディーンに突き刺さる。その視線を綺麗に無視してディーンがにこやかに話を進める。

「誤解なさないで頂きたい。もちろん我々が手を抜くなどと申し
ているわけではありませんよ。そんな事をしては暁の評判は地に落
ちます。」

我々は自慢では御座いませんが、これでも世間ではそれなりに名
の通った傭兵隊です。その評判をこのような事で落とすつもりなど
ありません」

契約事項にかかわらず手を抜くつもりはない。そうはつきりと明
言するディーンに、

「では、何故そのような事をわざわざ確認してくるのだ」

ほつと安心しつつもますます話が見えない、といったように怪訝
にディーンを見返す男爵。ディーンはワザと少しだけ困ったような
表情を作り、

「ただその辺りはしっかりと確認しておきませんと……。何せ我々の
仕事は相手あつての事。何事もなく終わってしまうという事も滅多
にないとはいえ、全く無いとは言い切れません。もし仮にそうなっ
た場合は、最初にはつきりしておきませんとね」

——後は、言わずともお分かりでしょう？

魔獣退治に雇ったのに、一匹も狩らずに終わっては金を払う意味
などない。そうなった場合は初めに確認しておかなければ、下手を
したら支払いをゴネられる。前金だけでも何割か確保できていれば
御の字だ。

「それと今回の契約内容である魔獣の討伐に關してですが、一つご確認をよろしいでしょうか」

わざわざ確認を取ってから話を進めようとするディーンに、何か引つかかるものを感じるも男爵は頷く以外に他は、ない。

「まず我々が卿に負う義務は、『魔獣の討伐』のみで間違いありませんね」

確かに契約書には今回の募集は魔獣の討伐の為のものであると記されている。

「では我々が倒した魔獣は我々が引き取らせて頂きますが、それで構いませんね」

その一言で一氣に現状を把握できたのか、俄かに男爵が慌てだす。

「いや、待ちたまえ。それは困る。倒した魔獣に關してはこちらで引き取らせてもらう」

魔獣は基本的に毒を持ったもの以外は食肉として加工され、また毛皮や爪、甲殻、牙なども様々なものに流用されている。

つまり魔獣は人にとって脅威であると同時に、人の生活に無くてはならないもの。倒した魔獣たちは男爵領の立派な収入源となる。

「おや、今さらそんな事をおっしゃられても困りますね。卿に負う義務は魔獣の討伐のみと、先ほどはつきりと確認させて頂きました。そうであれば、こちらで狩った魔獣の引き渡しの義務は御座いませんか？」

——さて、困りましたね。

慌てる男爵を前に、全く困ってなさそうな顔で白々しく呟く。意表を突く言葉を並べ立てて動揺を誘いながら、男爵の様子をじつくりと観察しディーンは本題に入る時機をこっそりと窺う。

「そう言えばこちらの契約書には、討伐する予定のいくつかの魔獣の種類が随分丁寧に書かれておりますね」

何でも無い風を装いながら、にこやかにディーンは男爵に問いかける。

「そして最後にこうありますね。記載のない魔獣に関しても、期限内に出没した場合は討伐の義務がある。わざわざこの様にお書きになったのは、何故なんでしょうね。確かこの辺りで出没する魔獣はここに書かれている物だけと聞いておりますが。何か気になる事でも御座いましたか？」

先程から契約の不備を思いもよらない方向から細かく突かれ、頭がそちらにばかり行っている時に不意に出された何の事かと思うような話題。普通に考えればただ、念を入れただけと答えれば済む話。

だが男爵は行き成り問われたその言葉に思わず息を飲み、その目が僅かに泳ぐ。どんな小さな表情の変化も見逃すまいと男爵を観察していたディーンの目に、その変化はあまりにもあからさまだった。

……これは、どうやらアタリか。

ディーンの瞳が獲物を追い詰める野獣のそれへと変化する。ディ

ーンは交渉のテーブルに着く前に、こつそりと押さえていた気配をゆつくりと解放する。

魔力という目に見えない力が魔術によって具現化するこの世界に置いて、人は目には見えない力の波動に敏感だ。

戦いの中の生と死の狭間において磨かれ鍛えられた、戦いに生き残った戦士だけがその身に纏う気配もまた、人に無視出来ない何かを感じさせる。

最後の手札^{カード}を手に入れた今、それを押さえてやる必要など感じない。一気に冷気を纏って場を支配する。

「…………魔獣、ルーサ」

囁くようにその名を呟くと男爵の顔色が目に見えて青くなり、後ろの男が大きく息をのむ。

…………もう一押しという所か。

さあ、こちらを虚仮^{こけ}にしてくれたんだ、遊びは終わりだ。借りは返そう。逃げたければ逃げればいい。こちらはそれを肴に、じつくりと追い込もうか。

まるで肉食獣が遠くから獲物を見定め舌なめずりするかの様な気配を纏い、デーンはゆつくりと細く瞳を細める。笑っているかの様に、見えるように。

「卿、私は面白い書物を見つけましてね…………。」

第02話 交渉 前編（後書き）

デイー君は『あほの子』から、『危険なお・と・こ』へ華麗にジョブチェンジしたっ！

恐怖体験 その二

暇人は後節に本文に関係ある事も無い事も気の向くままに書いておりますので、それがお厭な方は華麗なる『スルースキル』を御發揮下さいますようお願い申し上げます。

暇人です。

そう、あれは今から数日前、。。。

暇人は記念すべき初投稿を、予約投稿にしてみました！ 今か今かと待ちます。

ドキドキドキ、グーグーグー。予約時間、華麗にオーバー。エ、キノセイダヨ。

気を取り直して、お初ですからね、文字の大きさやら誤字やら、確認しなければっ！

暇人はとってもチキンです。

本文チエツク、おお、振り仮名が一部反映してません。直さなければっ！

その前に、小説情報であらすじも確認しましょう。

んなっ、さっそくお気に入りが 『1件っ！』

素晴らしいっ 友よっ

これは、失礼のないように速やかに文章を直さねばっ、カチャカチャカチャ

よし、では今一度小説情報を、、ポチっとな

お気に入り 0件 ……………。

その間わずか、1分。……………疲れているんですね。眼精疲労かも知れません。もみもみもみでは、もう一度、ポチっとな

お気に入り 『0件』

決定的瞬間っ、 みーたーぞーおおおっ！！

ちなみに、その日、プロローグのみで、内容、文章、共に五ポイントもくれた猛者がおられました。

勇者よっ 世界は救われたっ！ 君のおかげでこの世界は存続を許されたのだーっ！

君の成し遂げた偉業を誰も知らない（当たり前）だが暇人は知っている！（ストーリーカー？）

君を讃え、デイー君の魔獣料理を進呈しようっ！（いやがらせ！？）堪能してくれたまへ

第03話 交渉 後編（前書き）

御連絡

7/21 改稿しました。

大筋はそのままですが、色々削ったり並べ替えた部分があります。
御了承下さい。

第03話 交渉 後編

男爵の目の前に広げられた一枚の巻物。ディーンが懷から取り出したそれは、今使われている一般的な紙とは違い小型の魔獣の皮で出来ていた。一目で古い時代を感じさせるもの。

擦り切れてあちこちがボロボロになり文字も掠れて所々判読出来なくなっているそれを、男爵は食い入るように見つめている。

「何せ古いものですから、見辛くて申し訳ございません。でも如何ですか。面白いでしょう？」

卿にお見せしようと、重要かと思われる一部だけお持ちしました。ここに書かれている内容とここ最近のこの町の状況、非常に似通ってますよね」

男爵は蒼白な顔で黙って文字を追っている。だが、あまり成功してなさそうだ。

この巻物に描かれているのは、遙か昔にこの地を襲った大いなる災厄。

ある魔獣の記録。

「ああ、出所は御尋ねにならないで下さいね。口の軽い男は嫌われますから。特にこの商売柄、ね」

もちろん、わかっておられるでしょう？　とでも言うようにゆったりと口元だけで微笑んで見せ、――それに、と続ける。

「ここをご覧ください。町の名前も日付も書いた者の名も、もうボロボロで判読できませんよね」

町の名も日付も書いた者の名もわからないような書では、なんの効力も発することは無いだろう。それを困ったものですよねと笑いながら、あえてそうしたのだと、口では微笑みながらも笑わない目で指し示す。

――私は秘密を漏らすつもりなど、ないのですよ。だから、御安心下さい。

そう態度で示す。

傭兵とは騎士のように清廉さを求められる種類の生き物では無い。逆に泥を被るような仕事に雇われる事はそう珍しくもない。そんな傭兵が第一に求められるのは口の堅さ。

そうでなければ、汚れ仕事をした者を貴族がのうのと生かしておくはずもない。

ディーンが男爵に見せたのは、いくつか手に入れた情報の内の一つ。こちらがくれてやる情報は最小限で構わない。

男爵に見せた物の他にディーンがいくつか手に入れた中には、俄かには信じられない眉唾もの話も混ざっている。

だがディーンはそれをただの与太話と切って捨てる事は出来なかった。

それならば辻褄が合う事が多すぎる。この町の異常な活気もそれなら説明がつく。

信じられないのはその悪辣さゆえ。

だがそれを悪辣だと思うのは、ディーンの間が未だこの世界に染まりきらない為か。

この世界の命は軽い。

それを考慮に入れるとすれば、褒められた行いではないが決してあり得ない話でもない。

ディーンは震える手で巻物を抱え深く沈み込む男爵を、感情をつさない醒めた瞳で見つめながら声に出さずに呟いた。

——悪いなあ、俺も悪い癖だとはわかってんだよ。好奇心は身を滅ぼす。それでも確かめたくて仕方ないんだよ。彼らの話が真実なのかどうなのか……。

「なにが、いいたい」

随分と長い時間微動だにせず巻物を見ていた男爵の口から、しわ

がれた声が漏れ聞こえる。

もはやこんなものが出てきては言い逃れても無駄だと悟ったか。

「いいえ別に。ただここに来るまでに色々と目につく物もありましてね。干ばつの影響か地面が乾いて酷いものでした。確かこの辺りも干ばつの被害が酷くて、その復興にもいろいろと物入りだとか。そんな時に更に魔獣の被害まで出たのでは、やってられないでしょうね。心中お察し申し上げますよ」

ディーンは言葉を切り、一呼吸置く。ここからだ。

「ですが多少は色が付いていたとはいえ、この契約書にあるような魔獣達を相手にするのとこれはわけが違いますよね」

ディーンはそれとなく巻物を指でトントントンと叩いて示す。

「ギルドでは仕事の内容を謀って依頼することは、重大な契約違反となるのですよ。当然御存知ですよね」

——あなたが、知らないはずはありませんよねえ。

「あくまでも仮定の話ではありますがね。魔獣のランクを偽ったとなると、それはすぐ我々の死に直結します。流石に、守銭奴と名高い傭兵ギルドとはいえ、もし仮にそのような行いが成されたとなれば……それは明確なギルドへの背徳行為と受け取られるでしょうね」

ディーンは決して、男爵がギルドを謀ったなどとは明言しない。男爵が格の違う魔獣の存在を知っていたとも明言しない。何の言質も取らせはしない。あくまでこれは仮の事。

体面にこだわる貴族ほどそれが剥がれた瞬間に、思いもよらない
壊れ方をするものだ。壊しはしないが生かしもしない、ギリギリの
所を綱渡り。

ディーンはついつと目線を男爵のそれに合わせる。伶俐な瞳が男
爵を射た。

「私はっ……」

思わずつと言ったように口を開く男爵を遮り、ディーンは話を続
ける。

「よろしいですか卿。あなたがあなたの御家来たちの命に責任があ
るように、私にだって私の部下を無駄死にさせない義務と責任があ
るのですよ」

今回ディーンを怒らせた第一の理由はこれだ。

この男は危険をはつきりと認識しておりながら、死神の鎌の前に
暁の首を差し出した。この男が何も知らずに暁を呼び寄せたのなら、
まだいい。許そう。

だがこの男が何もかも承知の上でそれを成したことは、先ほどの
魔獣の名を出した時の反応で確信を得た。

もしこれがディーンでは無かったら、何の準備もなく死神の前に
首を差し出すことになっていたかもしれない。

生贄として。

ならば遠慮してやる義理は無い。

この町に来るまでに暁が集めた噂話。それを信じるならば、この男は決して愚かな男ではない。そしてこの町や屋敷の様子。この屋敷に勤めるものと実際に相対した印象からも、それは間違っていないと確信が持てた。

だからこそ、こうしてゆつくりと真綿を絞めるかのような脅しが効果を発揮する。こんな小さな規模の町で、しかもすぐ近くに魔獣の森を抱える身では傭兵ギルドを敵に回しては即死活問題ともなりうる。

それが分からない男では無い。

これが愚かなだけの男なら下手に踏み込めば逆にこちらの首を絞めかねない。ディーンには心中してやる気など更々ない。

だからゆつくりと、次の手札^{カード}を切る。

——恐くないよ、大丈夫。私は敵^{ライバル}じゃない。さあ、……オチ
デオイデ

「卿、先ほど申し上げましたよね。この町の状況は理解^{理解}していると卿の、そうせざるを得なかった御事情も、それなりに察^察しているつもりですよ。もちろん傭兵風情がわかるものなど、大したものではありませんがね」

少し俯き加減に、目を伏せながら静かにディーンが語りかける。
貴族の体面を傷つけない程度の少しの同情と謙遜。僅かに滲む本音。

「私がお話したいのはもう終わってしまった事ではなく、これからの事ですよ」

ゆっくりと目線をあげながら、蒼白なまま時間が止まったかのような男爵に語りかける。

「……これから……とは……。」

絞り出すように、男爵が答える。

「卿、あなたが我々暁を態々指名したのは何故なのでしょうね」

そう、この依頼は指名されたもの。しかも我々に指名された事を気付かせないよう、こっそりとギルド員を抱き込んで。

不自然な動きをするものは、よく目端を利かせればそれなりに見えてくるものだ。はつきりとした裏は取っていないが恐らくは当たりだろう。裏を取らなかったのは、取る必要がなかったから。

……今回の魔獣討伐、本当に罠にかかったのは……。

「それは……。」

ビクツと男爵の肩が揺れる。

可哀想に、もうかなり追い詰められているのだろう。だが、逃がしはしない。

この期に及んで、まだ気付かれていないなどと思っていたのか。

まさか偶々町にいた中で一番の有名どころだったから、とでも言うつもりか？　こちらはすでに何故我々なのか、大凡の見当はついている。そしてそれこそが、この魔獣『ルーサ』に対する鍵だと思われる事もある。

だがディーンは自分が手に入れた情報が全てだとは思わない。こゝは情報の本拠地だ。ならばディーンが手に入れない情報が、いまだ隠されている可能性がある。

ならば、根こそぎ手に入れる。

自らの身を守る為の努力を怠れば、この世界ではあつという間に人は死ぬ。それが嫌なら自らの頭を使い。手足（傭兵達）を使い。利用できるものは骨の髄まで利用しろ。それが出来なければ何一つ守れはしない。

このガルディアスでは、『人』は狩られて死んで行く。

「卿、勘違いをなさつてはいけませんよ。もしも我々がアレに手も足も出ず敗れたら、次に危険にさらされるのはこの町の平和に暮らす者たちではありませんか？」

もしも何か一つでも打てる手があるのなら、最善の方法が存在するのなら……、そう思っているだけなのです。もし魔獣に関して何か分かっている情報があるのなら……。」

——もう、いいだろう？　あんたは十分によくやった。ほら、落ちやすい理由をくれてやるよ。さあ、もう楽になん。

しばらく、微動だにしない男爵。ディーンは急かすことなく追いつめることなく、ひっそりとした気配でそれを待つ。

脅された、などという逃げはやらない。

お前は俺達を罠にかけた。

例え本当に罠にかかったのがお前だとしても。

ならばお前は代々受け継がれてきた秘密を漏らす罪を、自らの意志で漏らしたという罪の意識とともに持ち続けるがいい。

どれほどの時間が経ったのか。短かった気もすれば長かった気もする時間の後に、ふうっと大きく息をつき男爵がゆっくりと立ち上がる。

「少々待っていてくれ。そなたに見せたいものがある。だがこれから見せる物の存在は他言無用と心得よ」

沈痛な面持ちで告げる男爵

「畏まりました。決して男爵の意に沿わぬ行いは致しませんよ」

表面上、何の感情も浮かべずに了承の意を示す。

——やっと落ちたか。後はこの男がどこまで吐くか、だな。

ディーンは心中の考えなど露ほども感じさせる事無く、ガストンと共に立ち部屋を出る男爵を礼をとりながら見送った。

男爵はどこかにある秘密の小部屋にでも向かうのだろう。貴族の屋敷では常識だ。

男爵とは入れ違いに監視役だろう兵士が二名、部屋に入り扉を守る。……御苦労さま。

「さてと、では卿。今回の契約に関してですが、当初の契約書の通りとさせて頂きますがよろしいですね」

にこやかに笑うディーンとは対照的に、真つ青な顔をした男爵が重々しく頷く。

こんな状況でも何とか貴族としての体面を保とうというのだろうか。天晴れではあるが逆にいえばそれが出来ると見込まれたからこそ、ここまで遠慮なくディーンに追い詰められた。

ディーンに『認められた』ことこそが男爵にとっては不幸の始まり。能力があるのも良し悪しということか。

恐らく男爵がそれに気付く事は永遠に無いだろう。ディーンはそ

の様子を密やかに観察しながら、今回の仕掛けの最後に取り掛かる。作った表情の陰では男爵のどんな小さな表情の変化も見逃すまいと。

決して、これこそが目的だとは悟らせないように……。

「では先ほど申し上げた通り、例の魔獣に関してはもしもの際はこちらで綺麗に跡形も無く事後処理は済ませますので。その際には安心してお任せ下さい。」

一瞬だけ男爵の肩が揺れるが、それだけだった。もの問いたげにディーンを見るが、男爵の口から言葉が発せられる事は無かった。

もう、もてる気力の全てをディーンに吸い取られたのだろうか。ディーンが最初に見たときはすっかり面変わりしてしまった男爵が、がつくり肩を落としている姿が目に入る。

だが、そんな事はディーンにはどうでもいいことだ。

——安心しな、どうせ俺もあんたも所詮は使われる側の人間さ。まあ、金か名誉かの違いはあるがね。

ディーンは見えない所で皮肉気な笑みを浮かべて一人ごちた。

ディーン達が男爵との話を終え、屋敷を出る頃にはすっかり日が落ちていた。結構時間がかかったものだ。二人は館の扉前で大人しく待っていたジークを拾い、のんびりと宿の集まっている地区へと歩き出す。

ゆっくりと歩きながらディーンは自らの指を両の頬にあて、徐にグイーっと引っ張った。おもむろ

「ああ、俺様の顔がこんなに固まって。ったく、長々と……。元に戻らなかったらどうしてくれるっ！」

先程の真面目な顔は何処へやら、即座に緊張感を脱ぎ捨てたディーン。頼むから一生固まっている。とこの時ガストンが思ったとか、思わなかったとか…………。

今まで殆ど何も言葉を発することのなかったガストン。元に戻ってしまったディーンを横目で見やり屋敷を後に随分と歩いてから、やっと一言ポツリつと漏らす。

「…………あの巻物は、本物が」

名も、日付も、重要なものは全て欠けたボロボロの巻物。

書かれた内容だけが、事実を示す。

逆にいえば、事實は書かれた内容のみ。誰が書いたものかもわからない。……当然巻物は回収済みだ。

ガストンのその問いに、ディーンは薄らと笑って見せただけだった。

第03話 交渉 後編（後書き）

うわー、黒い！ 黒いよデイー君っ！ この黒さがタマリマセンヨ！
この男は、内側に入れた者と、外側の者をキツパリと分けるタイプだね。
いや、暇人はこんなに クロクナイヨ、ホワイトダヨ…… ホントダヨ。

本文とはうって変わって、恐怖体験 その三 お嫌な方は『スルー』

暇人です。

暇人は学習しました。もうフリーメモ全削、なんて失態はおかしません。

今日も緑をバックにカチャカチャカチャ
関係ありませんが、携帯で小説の書ける方を尊敬しています。
カチャカチャカチャ、今日は筆がノルゼ〜タリラリラ〜ん♪
さて、上書き保存っ

「エラーです、フリーメモには一万文字を超えて入力できません」

今日も赤が冴えてるねっ！ その冷たさがイカスぜっ！
サムズアップで現実からの逃避

手を合わせて心から大いなる存在に祈りますっ！

おおっ 悪魔よっ！ （……暇人は代償の無い奇跡を信じておりません）

震える手でブラウザの『戻る』をぽちっ

この与えられた奇跡の代償がなんなのか、とっても気になる暇人です。

恐怖体験は一先^{ひと}ずその三で終わります。……ハズデスヨ。

誰ですか、今、もっと続けろ、なんて暇人の不幸を願った、心根の黒く正しく正直で真直ぐな人は。

是非お友達になりましょうっ！

ちなみに、暇人はこんな後節にまで真面目にふりがなを振ってしまっ自分が、結構嫌いじゃありません。

第04話 過去への扉

今はもうすっかりと日が落ち食事時。

暁では特に個別に指示をしていない限り、こういった大きく行動が変わりそうな場合や全体の報告の際には、各部隊長は自然に集まってディーンたち二人を待っている。

今日もどこかの店で一つのテーブルを囲み、勝手にやりながらディーンたち二人を待っているだろう。他の隊員も店に入りきらなければ幾つかの店に分かれるが、こういう場合はやはり各部隊ごとに固まって食事を取っている。

ディーンは普段の言動やその性格から、かなりずばらに見られがちだ。

だが隊員たちの教育と金銭面に関しては、他の傭兵隊が驚くほどに細かく力を注いでいた。ただしその主観があくまでもディーン基準、というのが少々の問題かもしれないが。

因みに、ディーンの料理に関する細かさはまた別の話だ。

ディーンあの情熱は既に一般人には理解の及ばない所を一直線に爆走している。当然ながら現在進行形。一応、目的地があるらしいので暴走ではなく爆走。皆が皆、自らの精神衛生の為に見て見ぬふりを決め込むのが暗黙の了解となっている。

そのディーンが何よりも重要だと思っものが『情報』。そしてディーンは隊員間での情報や指示の漏れがある事をひどく嫌う。

ディーンは正直な話、出来る事なら人死には見たくない。だから選ぶ仕事も『人』相手の物では無く、出来る限り『魔獣』相手の物を選んでいた。

だがこんな世界の傭兵という職業では、それが完全に叶う事などないのは当然の事。

それでも教育次第で隊員達が生き残れる可能性が少しでも上がるのなら、ディーンは出来るだけの事はしようと思っていた。……の・だ・が・つ、それが隊員たちに伝わりディーンが報われる事はあまり、ない。

なにせ、人という生き物は普段の行いこそが、物をいう。

—— おー、あれは何だっ！

ディーンの目にはこちらに駆け寄ってくるハーディーのお尻に、パタパタとはち切れんばかりに振られる尻尾が見えたっ！

不思議だ。ハーディーは人族のはず……はっ、幻影かつ！ ハーディー、いつの間にこんな器用な魔術をっ！

勝手に道のど真ん中で百面相を始めたディーン。

単にハーディーが一軒の宿屋の前で二人を待ち、二人を見た途端にそばかすの浮かんだ顔にぱつと笑顔を浮かべて、思いつきり駆け寄って来ただけの事。

その姿はまさに忠犬ハチ公っ！…………。いや、人族なんですけど…………。

おもしろおかし気な様子のディーンを、片やいつもの事。片やもはや処置なし。とばかりに放ってハーディーとガストンは会話を交わす。

どちらがどちらかは推して知るべし。しかもたいして違いも無い。

「お帰りなさいっ。その宿に二人部屋を取っております。他の皆はもう食事に行ってますから、ご案内します」

少し、窺うように聞いて来る。ハーディーは妙な所で要領が悪い。今回のお迎えもそうだが、ジャンの要領の良さを少し見習うべきではなからうか。

「ちゃんとジークの事は言っているだろうな」

いつの間にか現実に戻ってきたディーンが問いかける。小さな魔獣ならまだしも、完全に大型犬並みのジークは大抵の場所では危険物認定間違いなしだ。

「僕、ちゃんと言いましたよー」

——成人した男が頬を膨らませるなっ！　それが許されるのは美人と美少女だけだっ！　美女の場合は何かがちよっと違うんだな！。

「んじゃ、飯の前に顔見せだけしとくから待っててくれー」

大抵の宿ではお座り、お手、お代わり。その後に頭を撫でて無害だとアピールしないと、なかなか部屋に連れて行かせてもらえない。まあ、ジークなら外に放そうと何かあるはずがないんだが。

その後ハーディーに連れられて行った酒場でディーンはふと、眩暈にも似た感覚に襲われる。何やら以前にも見たような既視感。デジャブ

古ぼけた木で出来た看板。開け閉めするとキィキィ音をたてるような建て付けの悪い扉。扉を開くと漂ってくる来る安酒と料理の匂い。店内はやや薄暗く、男達のざわめきが店内を満たす。一番奥まったあたりに陣取る仲間達。

傭兵の集まるような酒場であれば、たいして珍しくも無い普通の光景、その何が……。

常になんか感覚に、無意識に違和感の元を探そうとするディーンに声がかかる。

「隊長、あの奥の所に部隊長達がいますので」

指で指し示し、ハーディーはそれだけ言っただけで人集の集まる魔術剣士部隊のテーブルへと去って行った。何の気なしに見送りながら、そのハーディーの向かう先に掛る絵を見るとはなしに見ていると、ディーン頭の頭の中でカチリとピースがはまる音がした。

この店の様子、全体の雰囲気、奥のテーブル。それに、壁に掛けられた一枚の絵が非常に似ていたのだ。あの時、時間つぶしにボートと眺めていたあの絵に。

そして何より重要な、彼ら。今もこの店の奥ディーンの視線の先、テーブルに揃っている面子。グレイグ、キース、ウェインそして今ディーンの後ろを歩くガストン。

ディーンを含めたこの五人が傭兵隊を結成した時の顔触れ。あの結成当時から誰一人欠ける事無く、今は大所帯となった傭兵隊で苦勞を共にしてきた。

たった五人で始めた暁。その始まりの日。

今いる彼らをどうやって口説き落とすか、ディーンが必死で考えた店。

この店の雰囲気は、思い出してしまえばその始まりの店にあまりにも似すぎている。大切に仕舞い込み、固く閉じたディーンの思い

出のふたをこじ開けるほどに。

奥のテーブルに陣取った仲間達の元に足を進めながら、ディーン
の意識は急激に、懐かしい始まりの時へと引き摺り込まれて行った。

第04話 過去への扉（後書き）

暇人です。

後節には暇人の勝手な囁きが充満しております。お厭な方はどうかそのままスルーなさって下さい。

お昼の奥様相談室。さあ、今日の御相談はどのような？

「聞いて下さい、暇人に対して、ディーンはちつとも優しくありませんですっ！」

暇人はハンカチを キイツ と噛み締め倦怠期の妻のように訴えかけた。

「ディーンはお金には結構シビアなんです。でもシビアだけで守銭奴じゃないんです。

そして、貧乏人から筆とりるよりは、金は取れる所からもぎ取れえーっ、がモットウの人です。」

そんな彼が基本、シリアスにガンガン行くのは大金のかかった交渉の時だけ。そしてそんな時は、暇人がディーンの足に縋って、

『いやー、シリアスいやー、暇人死んじゃうっ、暇人、笑いがないと死んじゃうううーっ！』

と、いくら泣いて縋ってもヤメテくれませんっ！

酷い人なんですううっ！

第05話 傭兵隊結成の時 前編（前書き）

6 / 19 表現を弄るついでに前後編に分けました。内容自体には大きな変更はありません。

ディーン視点 一人称

第05話

傭兵隊結成の時

前編

××年前

傭兵になってどれくらいの時間が流れただろう。無造作に伸ばした髭もどうにか身に馴染んだように思える。傭兵稼業にも随分慣れた。今度の依頼は大所帯だったがそれもやっと今日で解散だ。

仕事が終わる際に俺は目をつけていた傭兵達、一人一人にこつそりと声をかけた。

——酒場『ジュールの泉』で待つ

その店は上品では無いがそれほど場末でも無い。いつも粗っぱい男達が集まり陽気に飲んで食べている様な賑やかな店だ。深刻な話には向かないが、このぐらいの店の方が警戒されなくて丁度いい。

その店には少し早い時間に出向き、店が人で溢れる前に一番奥まったテーブルを確保した。上に食事の出来る個室もあるが聞かれて不味い話でもない判断する。

やや日が落ちかけの時刻、それでも既に店内は薄暗い。軽い酒を一杯注文し手持無沙汰に壁に掛った薄汚れた絵を眺める。

このあたりの風景を描いた物が、長閑な景色がのびのびと描かれている。そうして落ち着かなさを誤魔化していると一人、また一人と待ち人が現れる。

先に来てくれた者には今回呼び出した四人が揃ってから話がしたい、と言うと一瞬怪訝な表情を浮かべたが、何も言わずにそれぞれに酒を注文してくれた。

その様子を見ながらどうやら俺の人を見る目はそれほど鈍って無かったらしい、と少しだけ安心した。用件も言わずに呼び出した揚句、見知らぬ者とのいきなりの同席。

聞きたい事は山ほどあるだろうに、こちらの一言と態度で場が読める。

ゆったりと構えているように見えるが、それぞれに油断なく気を配りこちらの出方を窺っているようだ。

その表情や様子を見ていと呼び出しに応じてくれたのは好奇心か、それとも別に何か理由があるんだろうか。そう待つことなく、最後の一人も顔を揃えた。

その頃には店も丁度かき入れ時で、店内がいつも通りの喧騒に包まれる。あちこちで男達の賑やかな笑い声が起り、給仕の女性が忙しげに店中を歩き回る。

そんなごくありふれた日常の風景を尻目に、俺は四人全員が呼び出しに応じてくれた事に内心では少し驚いていた。

思わず顔が緩みそうになったが、これから勝負だ。どうにか表

情を変えることなく平静を保ち、集まった四人に声をかける。

「突然呼び出して悪かったな。皆今回の仕事で同じ子爵に雇われていたはずだが、面識はあるか？」

ゆつくりとそれぞれの顔を見回しながらそう聞くと、各々が一人二人だけは見知っているぐらいだと教えてくれる。やはり全員と接点があったのは自分だけだったらしい。まあ、そうだろうな。

「じゃあ、話を始める前に簡単に紹介するけどいいか？」

ぐるっと見渡し了解をとると、全員特に隠す事もないようでも何言わずに頷いた。

「じゃあ、俺から見て右回りに竜人族グレイグ、人族ガストン、獣人族キース、鬼人族ウェイン」

取り合えず、名前だけ。愛想もなくそもない紹介だけど、これにもちゃんと理由がある。傭兵をやる以上、いつ誰がどこで敵にまわらないとも限らない。

手持ちの情報は傭兵にとっては大事なものだ。言わずに済む事を態々教えることもない。種族は一目見れば一目瞭然。口に出すのはお約束みたいなものだ。

「じゃあ、早速だが本題に入ろうか」

のんびり御挨拶もないだろうしな。さっそく気を引き締めて交渉に入る。

「……単刀直入に言うけど、俺と組む気はないか」

ゆっくりと一人一人の目を見ながら静かに問いかける。店の喧騒が一気に遠のいて行くような錯覚。

知らず知らずのうちに握り込んだ手のひらにはジワリと汗が滲む。賑やかな店の中でこの一角だけが奇妙な静けさに覆われていた。

彼らが驚いているのは俺の性急な物言いか、それとも言われた内容だろうか。

集まった種族もバラバラなこの顔ぶれを見て、まさか人族の俺がそんな事を言い出すとは思わなかったんだろう。

種族がバラバラなのは別に全種族制覇っ！なんてものを狙っているわけでは無く、たまたま背中を預けられそうな奴を見繕うところになった。ただそれだけだ。

「……俺は獣人族だぞ、わかって誘っているのか？」

食いついてきた。声をかけた中では一番俺と年の近そうな男それでも20歳は超えているか、獣人族のキースが酷く苛立っているような不審そうな眼を俺に向けてくる。

表情自体は無表情だが、こういう奴は目で語る。胡散臭い得体のしれない物を見る、そんな視線が突き刺さる。

灰色がかった黒髪に黒い瞳、頭には丸い耳、お尻から出ているのは細くて長い尻尾が一本。

鼠っぱいな？ 聞いたら怒られるのか？

他種族の事はまだまだわからない事が沢山ある。取り合えず席を立たないってことは脈があるってことだよな。

ここでは獣人族であるというだけで結構風当たりがきついらしい。
まあ、最初から諸手もろてを挙げてやりましようっ！ なんて展開になる
とは思ってないさ。

獣人族のキースがこんな風に言うのはこの世界の過去の歴史が全てを語る。獣人の歴史を語る事、それはこの大陸の差別の歴史を紐解く事にも等しい行為。

この世界の『人』は、人族以外は成人すると目に見えて姿かたちが変化する。

鬼人族は生れた時は小さな白い角が、成人すると大きく色も薄い赤に生え換わる。そして種族特性である『強力』と呼ばれる馬鹿力を発揮している時は、それが更に真っ赤に染まる。

竜人族は子供のころは薄らと腕や足にある鱗が、成人を過ぎるとはつきりと硬い鱗に生えかわる。ひとたび種族特性である『硬化』を成せば、体中が鈍らな剣ぐらいは跳ね返す固い鱗におおわれる。

翼人族は子供のころはまだ飛べず翼もひ弱で柔かい羽しか持たないが、成人前後にゆつくりと大きな羽に生え変わりその後は風を纏って空を飛ぶ。

そして獣人族は子供のころは特徴的な耳や尻尾を持つだけが、成人すると『獣化』を成し完全な獣姿に変化出来る。

さながら人でありながらも、人とは呼べないその姿。

それが悲劇を生んだのか。

この世界は『人』と『魔獣』が、互いに相争い合い食物連鎖の頂点を未だ競い合っている世界。まだその覇者となるのが人か、魔獣か、定まらぬ移ろいの中にいる世界。

人にとっての魔獣とは殺戮者であり食料でもあり、狩らねばならない敵対者。

そんな世界の中に在る『人』とも『魔獣』とも定まらぬ存在。

彼らは自らを『人』であるという。『人』と共に暮らし、同じように歩き、同じように話す。だがその姿は魔獣のそれに变化する。

人は自らと『違う』ものを忌み嫌う。周りが嫌えば自らも嫌う。そういう生きもの。

いつからかはわからない。獣人族は己が種族としての特徴から他の種族からは差別される対象となった。そしてその排斥感情が最も激しい種族が『人族』

この世界で成人に達しても『変化』しない『人』は人族のみ。

己もまた変化を経験する他の種族は、人族に比べればまだ肉体の『変化』に対して寛容だ。人族にとって成人前と成人後に肉体に及ぼされる変化は『魔力』の安定。外見的には他種族とは違い何の変化も及ぼさない。

それゆえか、人族は獣人族の魔獣への『変化』をもっとも受け入れられない種族だった。

そして獣人族にとっては最も悲劇的な現実を生んだのが、このガルド dias における『人』の覇権争いの実質的な勝者と言えるのがその『人族』であつたことかもしれない。

それは長く長く続いた争いだったと言われている。今ではもう、ずっとずっと昔の話。まだこの地に国が起こる以前の出来事。人は当時魔獣とも争いながらも、更に人としての覇権をめぐり全ての種族が互いに争い合う日々が続いていた。

その中で、まず脱落したのが翼人族。

翼人族は翼持つ一族。空を飛ばたく為はその身体の作りは軽く、翼を支える為の身体は強靱な筋肉で出来てはいるがそれは飛ぶ為の物。空から攻撃を仕掛けるならば向かう所敵なしである翼人族も、一旦地に足を付けてしまえば分が悪かった。

人の形を持つ者が空だけを飛んで生きられるはずもなく、またその美しい大きな翼は他種族からの乱獲の対象ともなった。そしていつしか翼人族は五つの種族の中でも、もっとも数少ない種族となる。

翼人族は一瞬で空へと逃げる事の出来る翼を活かし、森の傍を生きる場所に定め草木とともに生き薬草に精通する。他種族からは『森の隠者』または『薬師の一族』と呼ばれる種族となった。

次に竜人族。彼らは自らが攻められた際にはそれを後悔させるほどの猛攻を見せる。種族特性である硬化を使い、その強靱にして頑丈な鱗で向かい来る剣も弓矢も弾き飛ばし、一気に攻め込み敵を打つ。

だが、彼ら種族の本来の性^{さが}は守り。

彼らは定住の地を定めて以来自らが仕掛ける事は無く、長きにわたる歴史の中で竜人族に置いて戦争とは常にしかけられるもの。そして、薙ぎ払うものだった。

彼らは竜人族の国を築いた後はその地を守り、時がたった今もおそれは続いている。

そして、鬼人族。彼らは実に不思議な種族だった。

その強力は当たれば数人を薙ぎ払い、一人一人が一騎当千の働きを見せ戦場を駆け巡る。だが、だからといってこの種族は攻撃的な種族では無かった。むしろ温厚と言えるだろう。

彼らは他の人種を排斥し覇権を狙うかといえそうではない。竜人族と同様に一つの落ち着き先を定めるとその地に留まり攻撃され

た際にのみ激烈なる報復を行うが、他は至って穏健な種族だった。

彼らには世の中の覇権などより遥かに大切なものがあり、日々それに向かつて邁進している。言うなれば戦争にて身体を動かすことさえ、目的は覇権では無くその為。よって覇権の行方にも興味は無い。

そう結局のところ、最後まで争い続けたのは人族と獣人族。そして運命の女神は人族に微笑んだ。敗者となった獣人族は長く続いた争いの中、住処を追われ流浪の民へとなり果てた。

それから長い時が流れても、一旦出来てしまった種族による壁は厚く高い。人族の獣人族への忌避感情は今もなお深く根付いているようだ。

今現在多数ある人族同士の国による小競り合いはあっても、表向き種族間による国家規模の争いはなく、『人』は『魔獣』との危ういバランスのもと平和を享受しているかのように見えた。

その危うさを知る者はごく一握りの者たちだけ。

第06話

傭兵隊結成の時

後編（前書き）

6 / 19 表現を弄るついでに前後編に分けました。内容自体には大きな変更はありません。

「なあ、キース。お前の言いたい事は多少はわかるつもりだけど俺は気にならないし、ここにいる他の連中も俺が見ていた範囲では特にどうこう言っていた奴や、していた奴はいなかったぞ。まあ、心の中でどう思ってるかは俺には分からないけどな」

見るもの聞くものおかしな世界。そもそも獣人だろうと竜人だろうと姿が変わること自体が驚きだ。

体中びっしり鱗におおわれるってなんだよそりや、どこのビックリシヨーだよ。変わり方の違いなど些細なものでしかない。

寧ろ、等身大モフモフっ！ 涎が出そうだ。俺は断然爬虫類よりモフモフ派だっ！

キースも含めて皆が驚いた顔で俺を見る。その驚きは人族の俺があっさり気にならないと言った事が、それともずっとこっそりと観察していたことだろうか。

「そんなものいつ見ていたんだい？」

こちらの驚きは観察されていた事の方か。

別に見られていた事を怒るでもなく、本当にただ興味があるだけといった風情で尋ねてくるのは竜人族のグレイグ。思えばこいつは、

お前本当に傭兵か？　って思うくらいにいつも穏やかでのほほんと
していたな。

こういう奴が一番怒らせると厄介なんだよな。　気をつけよう。

「そうだな、グレイグの場合は調理場でだな。基本的に俺は、いつ
でもどこでも自主的常任調理担当（調理場は俺の城っ！）だからな」

確か俺が見かけたときには眉を下げて困ったね、といいながらも
全然困ってなさそうなのほんとした雰囲気で、獣人族の青年が誤
ってぶちまけたスープの後始末と一緒にしていた。

思えばいつも何かしら面倒事のある処にこいつはいた気がするん
だが。まあ、今は関係ないしな。

「あー、恥ずかしいとこ見られたなー」

思い当たったのか、照れたように頭をかく。

いい年なんだから赤くなって俯くのはよせ。上目遣いで見るな。
はにかむな。妙にかわいいじゃねえかつ。

俺をおかしな世界に誘うのはよせーっ！
いぢな

見かけは二十代後半にしか見えないが、確かお前もう四十過ぎて
るはずだろうっ！

「……ガストンに関しては……。」

未だに照れているグレイグは放っておき、斜め前にいるガストン

を見やる。変わらない表情と眉間に刻まれた三本の皺。

「よくわからん。取り合えず相手が獣人だろうが何だろうが、常に必要最小限しか話さないし。」

でも言う事はすげー常識的っていうか、模範的っていうか面白みがないっていうか杓子定規っていうか急所狙いっていうか。

もしアタリが悪かったとしてもそれって、いつでもどこでも誰にでもそうだから。お前にだけじゃないし気にするな」

テンポがいいからサラツと聞き流せそうだが、何やら、ん？ と思うものが大量に混じっている。

キースはそれでいいのか、とガストンをそつと窺うも相変わらずの無表情と眉間の皺。

これは話の前から刻まれていたから、標準装備品？ 嫌な装備だな。何も言わないという事は特に問題がない、という事か。それはそれで問題なんじゃないか？ そう思うキースも心の中はともかく、表情は完全な無表情。

むしろ……お似合いっ！？

「最後は、ウェインだな」

何も発言が無いのを無言の了承と見なしてサクサク話を続けていく。

「俺は別に何とも思っていないぞー」

俺が何か言うまでもなくウェインはキースの方を見てあっさりと言いつつ。

ウェインはこの中では一番社交的というか……軽かった。いや、この中で比べるのはそもそも間違っているかもしれない。

このメンバーの社交性はのほほんとした笑顔で女も男も金も仕事も、人生のあらゆる難事を全て乗り切り煙に巻く、勇者グレイグの間に挟みキースとガストン、その対極にディーンとウェインを置いたようなものだ。

しかも同極の磁石のようにその距離は遙か遠い。

……大丈夫か、このメンバー！

鬼人族というのは他の種族とは少し違って、力の神ダラカーチを最上のものとして信仰している。もちろん他の種族にもそれぞれに信仰している神がいるんだが、鬼人族はその信仰具合が群を抜いている。

鬼人族の種族特性である『強力^{じつりき}』はダラカーチ神から与えられた神聖な力で、その力を伸ばすことを至上の命題としている種族だ。

強力をより伸ばすためには、それを最大限に活かせる身体を作る事。鬼人族は己の身体を鍛え磨き上げることを神から与えられた崇高な試練として、種族を挙げて敢行している。

つまり鬼人族には独特な肉体美の世界がある。はつきり言ってしまうえば男も女もムキムキッムキムキッ。いたる所でサイドチェスト

ーっ、ダブルバイセーッブスっ。はいっ、あなたも一緒にボージン
グーっ！

最大の関心事が己の肉体強化であり、その他の些細な雑事（日常生活）は気にしなーい、わからなーい、かんけいなーい、きょうみなーい。

老若男女、男も女も、老いも若いも、みんな揃ってボージングっ、
いつでもどこでもボージングーっ！

マッスルマッスルっ、ハッスルハッスルっ！

ん？　なんか一文字違うな。まあ、気にしな〜いつ。――はっ、
恐るべし鬼人ウイルスっ、ウイルスの繁殖は料理人の恥だーっ！

…… ああ、何の話だったか、ああ、チームの勧誘だったな。

「取り合えずキースの件は問題なさそうだが、他に何か問題がある
なら何でも言ってくれ。もちろん返事は今すぐでなくていい」

皆を見渡して、他に何も言いたい事は無いのか言葉を促す。

「俺は別に組んでもかまわないぞー」

特に何を考える風でも無く、のんびりとした口調でウェインが答
える。

ウェイン。了承が取れたのは嬉しいんだが、……軽いな。どこか
で微妙に選択を間違えた気がしてならないのは気のせいだろうか。

「うん。私も別に構わないかな」

ウェインの返事を聞いて、のほほんとした笑顔付きでグレイグも応じる。

……………こいつ……………底が知れねえ。

いい返事が聞けた事の嬉しさとは別に一緒にいればいるほど、何か得体の知れない感覚が俺の背をヒヤリと撫でる。何となくだが、自分の人を見る目が当てにならない気分になってきた。

「……………」

その後を受けるように無言で一つ頷くのはガストン。その眉間の皺三本はトレードマーク？ まあ、一番難色を示しそうな人族の男から了解が取れたのは僥倖か？

問題は何考えてんのかわからないってことだな。的確に敵を屠る剣の腕は相当なものだったがな。

「———わかった。……………やってもいい」

最後に皆を見渡して、じつくりと考えてからやつと頷いたのはキース。うん。無表情だけどね。完璧に無表情だけどね。ガストンの後に見るとまだ可愛げがあるよね。少なくとも、無駄な威圧感はないしね。

「っそうか、ありがとう。じゃあ、これからよろしく。早速なんだが、先にいろいろ話し合っておきたい事があるんだけど構わねえかな」

気が変わらないうちに話を進めてしまおう。面倒事はさっさと済ませるに限るしな。

一人一人の顔を見て行くも、特に問題は無いように思い思いの表情で俺を見返してくる。約一名、睨んでいるようにしか見えないのは気のせいかな？

「んじゃチームの名前と、チームの隊長を決めちまおうと思うんだがどうだ」

そう、これから活動していくのにこれがなくちゃ始まらない。

「隊長はお前がやるんじゃないのか？」

キースっ！ お前他の表情あつたんだなーっ。無表情以外、実装されてないんじゃないかと思ってたぞ。

思いもよらない事だったのかいつもの表情が崩れてほんの少し目を見開き、見ようによってはキョトンとした顔に見えなくもない。わずかな変化だが、キースがするのは激レアだ。

「へっ、何で？」

それこそ本当に何で？ だ。隊長なんてそんな面倒なものなってたまるか。あんなものは隊長という名の称号と引き換えに面倒事や雑事をせつせと押しつけられる、ていの良い奴隷のようなものだ。成りたがる奴の気がしれねえ。

俺は栄誉ある称号（人身御供）を全力で回避すべく用意していた

カード
手札を切る。

「やっぱりここは、人生経験の豊富そうなガストンがいいんじゃないかな」

全員を知っているのは俺一人。その俺が押すんだ。しかも理由は無難に纏めてある。

確か今は30代半ばのはず。グレイグ以外の二人にとっては年上で人族の男。隊長に据えても特に異論はないだろう。余程の難人物以外なら大抵の奴はそういうものかと納得するはずだ。

…………ふっ勝った。

そう思った瞬間だった。——大魔王、降臨ーっ！！

「…………この俺に、愛想を言えと？」

一言。

「「「「……………」」」」

皆、無言で目をそらす。多分、思いは一つだ。

…………くっなんて的確に急所を突きやがる。

そう、個人ならともかくチームの規模が大きくなればなるほど、必然的に仕事相手はお金持ち。

思い浮かぶのは、…………商人。…………貴族。

そしてギルドで受けようが直接受けようが、交渉の矢面に立つのは隊長。

金持ちが横柄で気難しいと思うのは、僻みだろうか。

そしてそいつらは困ったことに、こちらにも相応の態度を無言で要求してくる。

……ちょっと待て、不味いぞ。よし、次だ。

「ああ、うん。そうかじゃあ、グレイグはどうか。」

ああ、こいつには何故かわからんがやらせたくない。でも、年齢的に見て声かけなきゃ角が立つしな。……ああ、親父、俺、まだ日本人の心（处世術）は健在だったよつ。

こんな所で認識したいわけではなかったが、グレイグのあの陽だまりのような純真な笑顔。その笑顔が暖かく純真に見えれば見えるほど、俺の本能は激しく警告を発するつ。

ディーン上等兵つ、迅速かつ慎重に、全力で待避せよっ！

見るなつ。覗くなつ。近づくなつ。

——そこは覗いちゃいけない深い深い穴の中、魔窟がぽっかり口を開けて待っている。獲物がかかるのを今か今かと待ってるよ……。

何だ、今一瞬ものすごく恐ろしいものを見た気がするんだが……。

本能で生きる男、ディーン。その本能が最大音量で発する警告つ、ディーンは本能に従ったっ！

撤退撤退撤退っ！

「うーん、押してくれるのは嬉しいんだけど、………剣の腕や護衛ならともかく私はどうも交渉事が苦手だね。何でかいつも変な事引き受けちゃうんだよねー？」

眉を八の字に下げ人の良さが滲み出る顔で、困ったものだよねと呟くグレイグ。

「………」

全員その表情や雰囲気思わずその情景を想像してしまい、………あまりにも納得してしまって反論の余地なし。

ディーンは敵の罠を回避したっ！しかし後ろは崖つぶちっ！

「じゃあ、ウェインは………」

右隣にいるグレイグから左隣にいるウェインへ視線を移す。

そこには全開の笑顔。っにはーっ

「………ちょっと一発殴っところか？ 何故か知らんがイラっとくる。」

「力技なら得意なんだけど、俺文字の読み書き出来ないしー。あん

まし人の話も聞いてないからー、金貰う段階でしょっちゅう揉めるんだよねー」

あはははーっ

いや、それって、あははっで済む問題じゃないよな。

「「「「.....」」」」

全員、無言の一致を見せた。チームワークは抜群だ。

「じゃあ、キースは.....」

ディーンに残された希望、その名はキースっ。

最後の皆が相変わらざる無表情で視線を返す。その動じなさどっが頼もしいぜっ。

「俺、獣人だしな。他の所（傭兵隊）との競合とか逆に共闘とか、まず一番の貧乏くじ押しつけられるぞ」

相変わらずの無表情で淡々と当然の事実を述べているだけ、という風情で語るキース。

「「「「.....」」」」

これにも全員が納得できるだけの身に覚えがあるのか、無言の了承。

えっ、残るのは.....。

ディーン以外の4人が仲良く額を集めて

「「「「決まりだな（ね）」」」」

お前ら、……気が合うじゃねえか。

第07話 傭兵隊暁 部隊編成

ディーンの脳裏を一瞬で駆け巡った懐かしい思い出。どうやらほんの少し立ち止まっていたようだ。

後ろから促されディーンは一つ頭を振り昔の記憶を振り払うと、ガストンと共に店の奥へ。客達で埋まったテーブルをぬうようにして奥の席へと歩いていった。

そこにいるのはあの暁結成の時から見慣れた顔と、今回臨時で組み込んだ隊の代表がズラリと顔を揃えて待っていた。

五人だった傭兵隊も数が増え、ガストンは今は副隊長として側にいる。他の面々、キース、ウェイン、グレイグも離れることなく今もこうして共にいる。

彼らにディーンとガストンを加えてこの席には計10名。一つのテーブルを囲むのにギリギリの人数だ。

「待たせたな。まずはそっちの報告を聞こうか」

ディーンは二つ空いた席の片方に腰を下ろし、町で聞きこんだであろう男爵とこの町の様子をまず訊ねた。そのディーンの足の下にはスルリとジークが定位置とばかりに潜り込む。

店内が薄暗いと云うのはこういう時には便利でいい。ジークの漆

黒の毛皮はいい具合に保護色になる。店員にだけこっそりと言付けておけば、大きな割にはほとんど気配の無いジークは滅多に周りには気付かれない。

あれっと思った時にはすでに通り過ぎた後。大抵周りは皆酔っ払いだ。ちよつと大きな毛皮だが、偶にぎよつとされるくらいで問題無い。……多分、ない。

暁の各代表は、人族による魔術剣士部隊カイト、竜人族による護衛部隊グレイグ、鬼人族による輜重部隊ウェイン、獣人族による突撃部隊キース、翼人族による衛生部隊ダーヴィットの計5人が顔を揃える。

傭兵隊暁において種族ごとに所属がパツキリと分かれているのは、決して仲が悪いからではない。個人の性格や技能よりも遥かに種族特性によって得手不得手が分かれてしまうからだ。

それにその部隊名自体も実はディーンが一番特徴的なものを付けただけで、それだけをしているという事でもない。

傭兵を趣味でやるような物好きで無い以上、自らの特性を活かした役割分担を選ぶのは当然の事。隊の中でも自然と特性に合った仕事割り振られることとなる。そして暁の中では部隊ごとの優劣は無い。

いや、その中でもごく一部。人族による魔術剣士部隊だけは、他の人族中心の傭兵隊に比べると少々不遇で雑な扱いをされているかもしれない。

元々この世界に置いて魔力を魔術として具現させられるのは人族

と一握りの翼人族のみであり、より高度な魔術を扱えるものの特権意識はかなり強い。

人族以外の種族もみな魔力は持っているが、それは各々が持つ種族特性として現われる。竜人族や鬼人族、獣人族はそれぞれに硬化、変化という肉体の内向きに魔力が作用する為、人族のようにその魔力を外へ放出することは出来ない。

では、一部の翼人族が魔術を使えるのは何故なのか？ 翼人族が使う魔術が人族と同じものと言っていていいかはわからない。

翼人族は成人すると空を飛ぶ為の風を身に纏う事が出来るようになる。もちろん背にある翼で羽ばたくのだが、その翼だけでは人型の身体を支える事は出来ないらしい。

その足りない分を魔力で補い空を舞う。それ故か翼人族が使える魔術は風のみ。大抵の翼人族はそれを飛ぶ力として己の身体にのみ使う事が出来る。

その中で、ごくまれに自分だけでは無く外に向かって魔力を放出できる者が現われる。それが翼人族の使える魔術で、人族のように全ての属性が操れるわけではない。

さて、暁におけるやや不遇なる魔術剣士部隊。何が不遇かというとその魔術師たる隊員の扱われ方だ。人族は魔術を使えるとはいっても、その使い方には人それぞれに偏りがある。

完全な後方支援型の放出系魔術が得意なものもいれば、魔術よりも剣士として剣に魔力を纏わせて戦う近接型の使い方を好む者もいる。

暁でも初めは、というか今でも人族の部隊は一応魔術部隊と剣士部隊が存在する。では何故纏めて代表を魔術師のカイトがやっているのか？

本来であれば剣士部隊を暁の副隊長であり剣士型であるガストンが、魔術部隊を魔術特化型のカイトが取り仕切っているはずだった。

だが悲しいかなガストンは、心の底から自由人のディーンの手綱さばきで忙殺されている。それに人族で近接剣士型はガストンを入れて三人だけ。（ディーンは卒にハマらない自由人なので除外）

人数的な問題とディーンによるしわ寄せが常識人のカイトに押し掛かり、必然的に剣士部隊への連絡事項も同じ人族という括りで、いつの間にかカイトに一任されてしまっていた。

剣士という括りなら突撃部隊と一纏めでもいいはずなのだが……恐らく非常に押し付けられやすい性格なのだろう。

他の傭兵隊では魔術師というだけでも結構丁重に扱われるものなのだが……。

カイトがよく胃を押さえて呻いている所を目撃されている原因の九割までが、遡ればディーンに行きつくとも隊員の間では囁かれている。隊長が『ああ』だからだろうか。何故かこの暁には当たり前感性を持つ者が非常に少ない。

逆にいえば、胃を押さえているカイトがもつとも常識的で普通の感性の持ち主といえるだろう。つまり、常識人は暁にくると胃を押さえる羽目になる。………大丈夫か、暁。

「町の様子ですが特に変わった様子はありませんでした。特別何かを騒いでいるような者はいませんでしたし。食料やなんかを扱った人の集まる通りでも普段よりは値上がりしているようですが、手が出ないほどではない様です。」

いろいろ文句を言う者もいるようですがそれも愚痴をこぼす意味合いの方が強そうですね。ただ、兵士の巡回の頻度が少し上がった気がする、というような事を言っていた者がいたとか」

席の埋まった店内で周囲から聞こえる男達のざわめきの中を、男にしてはやや高めの生真面目そうな声が報告を始める。

町の様子を報告するカイトを尻目に、ディーンとガストンは丁度近くを通った給仕の女性に店一番のお勧めと飲み物を注文する。ディーンは足元にいるジークにも、何か新鮮な肉の塊を見繕ってくれるよう頼む事も忘れない。

ディーンはカイトの報告に頷きながら、他はどうかと目で促す。それを受けて今度はグレイグが穏やかな声で先を続ける。

「北門や他の小さな通用門からの出入りは普段通りだけど南の砦の方から外へだけは余程の理由が無いと出られないらしいよ。回り込もうとする人もいるみたいだけど、森へ行く事自体が今は規制されているらしいね。兵士の監視も普段よりは厳重になってるみたいだよ」

そついいながらもグレイグが美味しそうに頬張っているのは、数

種類の魔獣の肉を捏ねて丸めたルクセリア国風ハンバーグもどき。もちろん名前はきちんとあるが、ディーンの認識はハンバーグ『もどき』

グレイグがナイフを入れる度に閉じ込められた肉汁がじわりつと溢れだし、肉とスパイスのほど良くブレンドされた香りが食欲をそそる。

数種類あるソースからグレイグが選んだソースは、甘みのある果物をじっくり煮込んで作った甘辛仕立て。甘みたつぷり、辛みはちよつぷり隠し味。お昼のお子様連れ一番人気メニュー。

グレイグ、結構舌はお子様味覚？

ディーンはグレイグの皿の端にかかったソースを勝手に掬い取りながらもグレイグの報告について考える。そんな事をすれば猟や薬草の採集で生計を立てている者はすぐに生活に困る事にもなりかねない。

その辺はどうなんだ、何か騒ぎは無いのか。とディーンが聞くと今度は

「男爵が丁度今、臨時で土木作業員を雇ってるんだってー。そこに優先的に雇ってもらえるらしいよー」

俺、行ってみて断られたー。と明るく笑うウェイン。

断られてどうするっ、情報を集めるとは言ったが雇われに行けとは言ってない。

ディーンは一つ大きな溜息を吐くと眉間を揉み解す。大丈夫、ガストンの眉間の皺ほどは深くない。

そんなディーンを同情するでもなく無表情で見やりながらキースが、これはジャンが聞き込んだきた事だが、と前置きしてから話します。

「食料品を積んでくる行商が日照りになって以来急激に増えたらしい。そいつらは男爵のお墨付きを持っていたらしくて、今まで買っていた所と並行してそちらからも仕入れているそうだ。そいつらは商品に関してもある程度融通を利かしてくれるらしい」

ジャンは一応仕事も覚えていたらしい。感心感心……、ディーンは思わず心の中でそう呟いたが、良く考えれば仕事が本筋だ。ディーン的思考も段々毒されて行っているらしい。

男爵のお墨付き。

その本当の意味をこの場では恐らくディーンだけが理解する。僅かに皮肉気に顔を歪めながら他には何か、と先を促す。

「ワシは薬草を扱う店に行ってみたんじゃがこの季節に採れる薬草は軒並み高騰しておったぞ。例年この辺りで採れるものは高騰どころか、在庫切れらしい。じゃが、あの様子じゃ、どこかにこっそりと隠しておりそうじゃがのう」

何が楽しいのか言い終わると、イーヒツヒツと笑っているのは翼人族のダーヴィット。

彼はこの傭兵隊暁における最年長組、栄えある二大巨頭のうちの

一人。二大巨頭とは呼ばれているもののその実態は”最年長組”という名で包み隠した、人の話を全く聞かない変人じーさん二人組、という意味がある。

50代後半で身長はヒョロリと高いが、痩せた猫背にモノクルをかけた奥では神経質そうな目が光る。いつ櫛を通したのかわからない髪には既に白髪が繁殖し、灰色の羽は艶が無くボサボサ。羽の先端は髪同様に白っぽく変色している。

暁では唯一の非戦闘員。……だからと言って戦えないわけではない。

彼が戦闘に参加するとわけのわからない調合薬やらなんやらを敵味方無差別に投下するため、デインによって勇気ある戦闘禁止令が発令されている。

常に彼の腰にある怪しげな皮袋からは、隊員みんなが必死に目をそらす。

何故非戦闘員が傭兵部隊に所属しているのかというと、彼の治療技術と薬剤調合の腕は一流だからだ。腕と性格は必ずしも一致しない。悲しい現実がここにある。

ダーヴィットに目をつけられたものは怪しげな実験もとい治療を施されるとの噂もあり、暁の中でもかかわりたく無い人物NO.1の座を長く独占している。

それにもかかわらず傭兵という仕事柄、誰もが絶対に避けては通れない関門として堂々と暁の中に君臨していた。恐るべしダーヴィット。

ここで今までは黙って話を聞いていた男が手を挙げる。男の横には何枚もの皿が積まれ、その中身はすっかり空だ。人の話をじっくり聞いてたっていうよりは………食べてたな。

「俺からもいいか」

満足げにお腹を擦りながらそう言うのは人族の男で名はマルクス。筋肉質な大柄な体に似合いの大剣。体に似合わずどこか人懐っこそうに見えるのは優しい茶色の瞳のせいだろうか。青い髪は短く刈り込み太い声で話しかける。

「俺達もあんたに何か引つかかるからって言われてあちこち聞いて回ってみたんだが、別におかしな事はないんじゃないか。」

森から魔獣が出て来てるみたいだがそれは時期的な事を考えればたいして珍しい事じゃないし、森への警戒具合も別に悪いこっちゃないだろう。むしろこの領主はいい判断だと思っぜ。

今回の日照りで作物が駄目になった農家へも近々保障があるらしいし、この町の領主は領民の事を良く考えてくれてるって何処行っても評判よかったぞ。兵士の質もなかなかのもんだ」

それを受けてちらほらと頷きあう隊員達。

朗らかに言うマルクスに、そうだなとディーンも曖昧に頷きながら、

——そうだな、その通りだよ。ここの御領主様はこの地の領民の事は、良く考えてくれてるよ。

穏やかに話を聞くディーンの瞳が、ほんの一瞬だけ暗く陰った。

第07話 傭兵隊暁 部隊編成（後書き）

暇人です

本編がシリアスなので下にお馬鹿な小話をお一つ。
お嫌いな方は、『スルー』でお願いします。

懺悔ざんげします。

暇人です。

暇人は、自らがこの世界に身を投じるまでは、その行いがそれ程の罪だとは知らなかったのです。

懺悔します。

暇人は、大変に罪深い行いをしておりました。
それは、あまりにも便利すぎて、、暇人は誘惑に耐える事が出来なかったのです。

この世界に来て、それが、悪魔の所業であると気付きました。

それは、この世界を作り上げた神（なろう様）による試練。

より、我々が、淘汰され、過酷な生存競争を生き抜くための力を付けさせるための、神からの愛（いやがらせ）。

そう、その名は 『 閲覧履歴っ！ 』

暇人は、それがこれ程までに執筆^{ひまじん}者の心を叩き折るためのもの^{システム}のだけは、、、知らなかったのです。

懺悔します。さあ、あなたも共に懺悔しましょう。今ならきっと許されます。

さあ、恐がらないで、暇人の手（お気に入り）をお取り（押し）なさい。

こんなお馬鹿な暇人ですが、まあ、今後ともよろしく願います。

第08話 臨時隊員

今ディーンと共に席に着いているマルクスは、このルクセリア国ではそこそこの名が知れた傭兵隊の隊長だ。そのマルクスの隊は人族の剣士と魔術師で構成されている。

”そこそこ”なのは部隊が十三人という小規模の人数なのと、名前が売れるような突出した一人がいないからだろう。

彼らはどちらかというとチームワークで仕事をこなすタイプの傭兵隊だ。もちろんどんな傭兵隊にもチームワークは必要なもの。それでも突出した一人を中心に戦術を組み立てるタイプと、そうでないタイプがある。彼らは後者だった。

その為か一般的には”そこそこ”止まりの認知度に甘んじる。だがこの国を拠点とする同じ傭兵同士の情報網では彼らの知名度は高く、その仕事ぶりは堅実でかなりの物だと評判だ。

今回臨時で曉に組み込んでいるのはそのマルクス率いる人族の部隊十三名、ミヒヤエルの率いる竜人族の部隊四名、タイタスの率いる鬼人族の部隊七名の計二十四名。そして今はその三組の各代表者だけがこの席に集う。

彼らは皆、偶然地方都市ダランスに行商の警護やその他の依頼で同じ時に行きつき、丁度ギルドに張り出されていたこの依頼に興味を持った。

このような国の端の地方都市。そうそう割のいい仕事が転がっているわけもなく、自然と視線の集まる物は限られる。

その依頼にはまだ仕事を受ける為の人数的な空きは十分にある。だがマルクス達三組がそれぞれ自らの部隊だけで受けるとなると、人数的に足元を見られて全額終了後の支払いとなる可能性が高い。そうなると思わず先立つものが心もとない。

依頼の内容には日々の食事は各自で用意とある。そうなると思えば依頼が終了するまでは全てこちらの持ち出しになってしまう。後々支払われる金額的には食事や移動を踏まえても充分なもの。

仕事内容的には特に変わったものでもない。このような場所に出されるにしては、あっさりと棒に振るには惜しい金額だ。

前金の交渉をするか、少々無理をしても受けるか。それとも小さな依頼を受けつつ、余所の町へ移動できそうな依頼を探るか。

三組がそれぞれに悩んでいる丁度その時に声をかけたのがディーン。

傭兵にしても限度があるだろう、というような無精ひげを筆頭に得体の知れなさを助長するだけというその風体。だが正体不明、年齢不詳のその姿に反して口調は明るく、瞳は楽しげでするりと懐に入り込むような人懐っこさ。

いつの間にやら何となく意気投合し、聞けば同じ依頼を受けると言う。

持ちかけたのはディーン。

受けたのは彼ら。

ディーンたち中型規模の人数がいれば交渉も比較的スムーズにいく。それに暁の名は良くも悪くもあちこちで知られている。交渉役には持って来いだ。

ディーンは一時的に暁の部隊に組み込むが、ギルドに張り出してある契約書に書かれた金額の支払いに関しては全て頭数で割った金額をそれぞれに平等に支払うと約束する。

ディーンにとっても人数が増えればその分交渉も強気で行ける、どちらにも利がある事なのだと言ふ。

そうなれば元々気を惹かれていた仕事、特に断る理由も無い。元々商隊の護衛や小さな村の魔獣退治ならともかく、貴族に雇われる場合は大抵どこかに組み込まれて使われる。ならばここで暁に組み込まれたとしても特に問題は何も無い。

寧ろ小分けに騎士や兵士の下に組み込まれて使い捨てにされるよりも、同じ傭兵の一団の方が意志の疎通はずっと楽だ。

お互いの思惑が絡む中、和やかに駆け引きは続く。

……この三組の傭兵隊がダランスなどという地方都市に来る事になった依頼元が、辿って行けば一つ所にたどり着く事を知っているのはディーン、只一人。

早朝、今はまだ暗く薄ぼんやりと朝靄におおわれた時刻。暁の傭兵隊総勢六十七名はファーサラの町の南側、森に面した砦の前に集まっていた。

隊員達の前にあるのは堅牢な石を積み上げて造られた無骨な砦。無駄な装飾は一切無く、完全に戦闘用の物だ。砦を形作る大きな石の一つ一つが長い時間ここにあったのだろう。年季を感じさせ、確かな存在感を放っている。

砦の一部には塔の様に上に突き出た一角があり物見台になっている。

ディーンが首を仰向けて目を凝らすと上部に鐘が取り付けられているのが見えた。有事の際はその鐘が音高く鳴り響く事だろう。今も当番なのだろう二人の兵士の姿がかすかに見えた。

砦の外は遠目に見える森と山のほかは殺風景な大地が広がっているが、砦と町を囲む城壁の内側にも兵士の訓練用にか広い空間が取られていた。ディーンたちは今日の夜はここを利用して野営する事になる。

高くそびえる物見台や今日の野営場所を確認していたディーンの腕が、なにやら後ろからツンツンとつつかれた。

ゆつくりと振り向いたディーンの目にまず飛び込んできたのは、純白の輝くような白い羽。そこから順に下って行くと、光り輝く肩甲骨の下あたりまで伸びた金の髪。春の若葉を思わせる、薄く色づいた緑の瞳。その一對の瞳の中には覗きこんでいるディーが居る。

今はまだ幼げな印象の、綺麗というよりも可愛いといった風情の女の子。確か成人したのは今年だったか、それとも昨年か。勇ましくも弓を持ちやや勝気そうなその瞳が、今は甘えを宿してディーを見る。

少し離れた所からは自らの騎士や兵士を鼓舞する為に、男爵が訓示を与えている声が聞こえていた。

「たいちよー、うちもなんかしましよーよー」

男爵の訓示に何かしら触発されたのか、アドルフィーネがにっこりと笑いながらディーンをつつく。

「んー？　しょうがねーなー」

口調だけは少し困ったように、でも全然困ってなさそうな顔で言

いながら、ディーンは自分の肩の線のやや下の位置にあるフィーの頭を少し乱暴にクシャリと撫でる。

「もー、たいちよー、グシャグシャになるよー」

ヒョイとディーンの伸ばした腕をかくぐり、口を尖らせ拗ねた口調と咎めるような上目遣いでディーを見る。だがその表情はどこか嬉しげで、現に少しすると髪を手で撫でながら、くすくすと笑しげに笑いだす。

結構ディーンはフィーには甘い。その様子を、やれやれ、という表情でアドルフィーネの双子の弟が眺めていた。フィーとよく似た色合いの金の髪と緑の瞳。ただし、フィーよりも頭半分は高いアドルフの背中を覆う翼の色は、白では無くて薄い茶色だ。

——んじゃ要望にお応えして、コホンっ

ディーンはワザとらしく一つ咳払いをしてフィーを焦らすように勿体ぶりながら、

「聞けーっ、野郎ども」

正規兵たちのように、直立することもなければ整列したりもしない。傍からみれば思い思いに座り寛ぎ、今から戦闘に入る事などどこからも感じさせないだらけ切った姿。

投げこまれるのはディーンの言葉一つ。見た目はどこも変わらない。だが一瞬で纏う気配が引き締まり眼だけが鋭くディーンを追う。

ただし今は鋭さを宿すはずのその瞳も請われるがままにフィーの

我儘を聞いてやっているディーンを、面白おかしそくに、にまにまと人の悪さ全開で眺めていた。

よく晴れた明けたばかりの空からは朝日が燦然と差し込み、ディーンの濃い赤の髪に降り注ぐ。普段は暗く沈んだ濃い赤も、今は光を受けて周囲に燃えるような赤い光を投げかける。

ディーンはこちらを見るゴロツキそのもののような隊員たちを、一人一人の顔を確認するかのようにつくりと見回して行った。隊員達の目が全てディーンに注がれていることを確認すると……、

「よし、聞けーっ、野郎ども。俺の身体は、俺のもの。俺の傭兵隊も、俺のもの。お前たちは俺の手足っ！」

片手は腰に、もう片方の手はビシッと親指で自分を指さし、清々しい笑顔で胸を張り堂々と宣言する。

「野郎どもっ、今日も俺への貢物（新鮮な食材＝魔獣）を狩ってこいっ！」

握りこぶしを真上に振り抜き、思いつき言い切ったっ！

どこまでも己が欲望に忠実な男、その名はディーンっ！

……俺達、ついて来るとこ間違えたんじゃない？

全傭兵隊員マイナス一名の心は一つ！ ある意味、……これも演説の効果？

マニア約一名

—— あー、たいちょー、スゴイなー、くふっ、くふっ、くふ
ふふふっ

…… 戻ってこい、フィー！ 今ならまだ間に合うっ、お前が
進もうとしている（かもしれない）その道は、高く険しい行き止ま
り。

傭兵隊 暁 現在の人数と部隊構成（現状名前の出ている隊員
は併記）

人員	隊長1名	正規隊員42名	臨時隊員24名	合
計67名				

隊長（勝手に炊事部隊）	デイン	
副隊長（隊長の手綱係）	ガストン	
人族（魔術剣士部隊）	カイト	以下 8名（ハーデ イ）
竜人族（護衛部隊）	グレイグ	以下 4名
鬼人族（輜重部隊）	ウェイン	以下10名

獣人族（突撃部隊）	キース	以下12名	（ジャン）
翼人族（衛生部隊）	ダーヴィット	以下2名	（アドル
フイーネ・アドルフ）			
臨時隊員			
人 族	マルクス率いる傭兵隊	13人	
竜人族	ミヒヤエル率いる傭兵隊	4人	
鬼人族	タイタス率いる傭兵隊	7人	

第09話 出発

道が日に照らされ移動にも支障が無くなった。そろそろ予定していた出発する刻限になる。すでに今日の行動に関してはディーンと男爵の間では昨日の内に話し合いが済まされていた。

だが、一応相手は貴族。出発前に一言挨拶をしておくべきだろう。

ディーンがそう思い男爵の所へ向かおうと踵を返そうとしたその時、何やらおかしい顔をしたアドルフがやって来た。

ディーンはアドルフに上空から森の方を確認してくるよう指示していた。そのアドルフがこのような表情で来ると言う事は……。

「どうした」

何か森におかしな気配があったのか。それとも森までの行程に魔獣の影でもあったのか。ディーンは出発前からすでに戦闘開始かと、溜息をつきたくなるのを堪えてアドルフに問いかける。

アドルフはディーンに声をかけられ少し逡巡するも、大した事じゃないんだけどと前置きしながら

「町を囲む城壁がちょっと変？」

言っている本人も要領を得ていないようだが、暁ではどんなに些

細なことでも、おかしいと思った事は報告するようにディーンによって徹底的に仕込まれている。そしてそれをより徹底する為か、ディーンはどんな報告であろうとそれを笑うような事は決してしなかった。

ディーンはその報告に少し眉を寄せ考えるようにして

「具体的には何を見ておかしいと思ったんだ？ どこに引っかかった？」

出来るだけ話がしやすい様に誘導する。

真剣に聞いて来るディーンに、自分で報告しておきながらも言う必要があるのか？ と半信半疑だったアドルフは表情を引き締め考え込む。首を傾げて目をつむり、眉間に皺を寄せ必死に感覚をたどるアドルフ。

ディーンはアドルフの真剣な様子を眺めながら、同じ眉間の皺でもガストンと違って何やら大変微笑ましい、とアドルフが知ったら怒りそうな事を考えていた。

初めて見た時よりも身体は多少大きくなったが偶に無意識に出る動作はまだまだ子供だと、首をこきゅつと傾け必死に考え込んでいるアドルフを見てディーンはこっそり笑みを漏らす。

そんなディーンの様子に気付く事無く、アドルフはと言えばいいのかと真剣に考える。

あつと短く声を上げ、

「ほんの少しだけ、微妙に色が違う気がしたんだ」

嬉しそうに顔を上げてディーンを見る。

「上から城壁を見たらこっちの森に近いほう、結構範囲は広いんだけどなんかそれ以外と少し違うんだ」

城壁を指さしながらディーンに示す先にあるのは、どこも同じに見える城壁。

ディーンは何やら難しい顔をしながら

「俺には同じに見えるが、上から見たら違うのか？」

「うん。高い所から全体を見渡すとほんの少しだけど、どこか違和感があった。それに……。」

眉を寄せ言い淀むアドルフにまだ何かあるのかとディーンは先を促す。

アドルフは、自信が無いんだけど、と前置きしたうえで

「なんか、ほんのちょっと薄い気がしたんだけど」

自分で言っていて、首を傾げている。

自信無さげなアドルフへ、それは城壁の話だよなと念を入れて確認するディーン。

うん、と頷くアドルフへもう一度場所を確認する。

それは森に面してはいるが砦からは少々離れた場所。目立つ場所ではないが広範囲にわたってほんの少しだけ違和感があると言う。

その場所を鋭い目つきで一瞥した後、ディーンはふっと顔を緩めて思いつきアドルフの髪をかき混ぜる。

「御苦労さん。この件に関してはわかつているから、もういいぞ」

真面目に考えていたのは何処へやら、一瞬で緊張感の無くなったディーン。真剣に考えていたアドルフはムツとした表情でディーンの手を叩き落そうとする。

そこはディーンも慣れたもの。ヒョイツと避けると羽に気を付けながらも背中をポンッと叩いて、アドルフィーネのいる方へと押しやった。

「御苦労さん。次からもその調子でな」

最後だけは真面目に締めてそのまま騎士たちの集まる中へ、男爵のいる所へとディーンは向かう。

アドルフから背けたディーンの様子は先程の戯れが嘘のように、ひどく疲れたやり場のない鬱屈を抱えた男の顔だった。

砦から森までは間に遮蔽物も大きな起伏も無い為か、森と山がよく見える。だが、実際に歩くとなると森までは成人男性が休憩を挟まず歩き続けて約一時間半ほどの距離がある。

予定では今日一日は様子見として、森の比較的浅い部分の探索のみ。昼過ぎには切り上げて、一旦砦まで戻る予定を立てている。

明日からは森の深部へ潜って行く為、砦には帰らず暫らく森の中の野宿生活が待っている。その準備をするためにも、今日は森の感触をつかみ必要な物を揃えることになる。

ディーン達傭兵にとってはこのような事は既に慣れた物。感触を掴むも何も今さらだろうと思われがちだが、森は生息する魔獣によっても少しずつ違っている。

これは森の違いによって生息する魔獣が違うのか。それとも魔獣によって何らかの変化が齎^{もたら}されるのか。それは分かっていないがともかく予期せぬものが無いとも限らない。

恐ろしいのは何も魔獣ばかりではない。

ディーンは一度、植物に喰^くわれかけた事もある。

ディーンは現地の狩人たちの話を重要視するし、隊員たちにも土地の者の話は出来る限り聞き込ませる。

傭兵にとって慣れた物と過信することはいずれ自らの死を招く。

だからディーンは初日から奥深くに分け入って行くのではなく、

一日は様子見に当てる事を強硬に主張した。男爵の状態を鑑みると脅したような物だが、まあ話し合いでもぎ取った。

「じゃあ、そろそろ行くか」

ディーンから誰に言うともない声が掛けられた。

なんとも緊張感に欠ける掛け声だが、魔獣狩りで一々声を張り上げていたのでは身が持たない。ディーン達にとってはこれは最早日常生活の一部の様なもの。

今回の隊列はまず暁の獣人族、探索にも優れたキースによる突撃部隊を先頭に、鬼人族ウエインの輜重部隊、竜人族グレイグの護衛部隊に人族カイトの魔術剣士部隊と続いて行く。

そしてその後にはミヒヤエル率いる竜人部隊、タイタス率いる鬼人部隊、そして最後にマルクス率いる人族の部隊が続いている。

男爵の率いる部隊は当然の事ながらその後だ。傭兵を雇っておいて貴族の兵士が前面に出る事はまずあり得ない。

隊列の組み方にはいろいろと細かな理由があるが、中でも今回は臨時隊員を組み込んでいる事と男爵達への配慮が大きい。

ディーンにとって臨時隊員達は戦力としては申し分のない力だが、暁の隊員達に要求しているほどの細かい意思の伝達は当たり前だが期待してない。

まず今回の行軍では何かあるとすれば先頭、森の方からだと思われる。

ならば使い捨てる気が無い以上、先頭にやるよりも後続を任せたい。ここで問題になるのが後の男爵とマルクス率いる人族の傭兵隊の存在だ。

基本的に人族の他種族嫌い、特に獣人族嫌いは中々根強い物がある。眉をひそめるほどに露骨な者はそうそういないが、潜在的な物を考えるとあまり近くには置きたくない。

特に貴族階級ともなると、そもそも同じ人族であれ一般庶民を自分と同じ存在と思っているかも怪しい所だ。更にそれが獣人ともなると……、出来るだけ引き離しておく方が無難だろう。

デインがどちらの為に配慮しているかは、云わずとも知れた事。

人族とは云っても傭兵となると少々事情は変わってくる。彼らは好悪の感情は別として、獣人族が『使える』事を知っている。

彼らの能力は多種多様。様々な局面で画一的でない彼らの能力が役に立つ事を経験で知っている。それが傭兵隊として一流に近づけば近づくほど、自らの感情と仕事を分けるすべを身につけている。

この世界において傭兵隊は数多あまたの数が存在するが、恐らく全ての種族が集うのは『暁』ただ一つ。少なくともデインは精々三種族の集まりまでしか見た事が無い。その上、種族による上下関係が全く存在しないのは間違いなく暁だけの事だろう。

そう云った点でも暁は『有名』な隊だった。それが高名か悪名かは話し手によってコロコロと変わる為、判断しがたいものがある。

因みに暁には種族による上下関係は存在しなくても、腕によるものと性格による上下関係はしっかりと存在している。

そう云った事情を踏まえると男爵率いる人族の騎士や魔術師の前には人族の部隊が望ましい。先頭と最後さえ決まっていれば残りは比較的簡単だ。

竜人族は種族全体として見ると穏やかで、自分から喧嘩を吹っ掛けに行くタイプの者がほとんどいない。それに鬼人族は基本的に……何も気にしない。

まあ、緩衝材にはうってつけと言えるだろう。

翼人族に至っては三人しかいないし基本的には空からの警戒をしているか、そうでなければ双子に限ってはデインの側にいた。いつもデインの横に気配を殺してひっそりと従うジークと似たような物だ。デイン自身はその時々で位置を変えて歩いている。

そうして決まった隊列だが後ろに続く男爵たちは前面にまず徒歩の兵士。その後続には馬に乗った魔術師と騎士。そして騎士たちに囲まれる様にして同じく馬に乗った男爵が続いていた。

余談だがこの世界でも移動の定番は馬になる。

その馬は発達した太いゴツゴツとした後ろ脚に地面を鋭く踏みしめる力強い三本の爪を持つ。そしてその踵からもバランスをとる為にあるのか、一本の鋭い爪が地面にのびる。腕は脚に比べて短い。その爪の鋭さは変わらない。

突き出た顔に口からは尖った頑丈そうな牙がこれでもかというほ

どに覗き、その奥には人の腕くらい一瞬ですり潰せそうな石臼の様な歯がびっしりと揃っている。

分厚そうな皮で包まれた太い頑丈そうな上体を低く前に倒し、お尻から長く伸びているのはズンと立派な太い尻尾。走っている時は頭から尻尾までが綺麗に水平に伸び、二本の足で起用に走る。

そう、微妙に違いはあるがその見た目はほとんど……、

ティラノサウルスっ！ 小粒っ！

だが馬だ。

その鋭い爪で岩を砕き、石臼の様な奥歯でガリガリすり潰す。

草食ならぬ岩食だが、馬だ。

馬だったら馬だ。

長さはともかく胴体の高さは馬と大して変わらないくらいの位置なんだからこれは馬なんだっ！

ディーンはそのズドンと太い肉の塊、もとい尻尾が目の前をふりふり揺れる度、捌きたくて捌きたくて腕がムズムズするが必死に堪えて自重している。

そんなディーンは馬に好かれる事があまりない。

まあ、当たり前的事だろう。

第10話 遭遇

ディーン率いる一行は無言で森への道を足並みを揃えて速足で進む。

暁の隊員六十七名と男爵率いる騎士団、男爵も含めて六十名。合わせて百二十七名の規則正しい足音が響く。

—— ザッザッザッがッッザッ ザッザッがッがッザッ ツ
がッザッザッがッザッ

馬の足音も混ざっているが気にしない。

ここに集う騎士団員、約六十名。この人数が少ないと思うだろうか。

だがここは辺境も辺境、国の端。国の端と云っても隣にあるのは隣国との国境ではなく魔獣の森。

男爵と云う爵位はあれど暮らしを支えるのはファーサラの町で暮らす領民から取り立てる税と、周辺の小さな村々からの僅かな税のみ。特に高値がつくような特産物などは無い。

兵士や騎士たちの給金は基本的にその税金で賄われ、当然ながら町の整備にも金がかかる。騎士や兵士として給金さえ出していればいいと云う物では無い。

騎士団での生活の面倒、食費に武具にその他諸々。貴族が抱える騎士である以上ある程度の見栄もある。数え上げたらきりが無いほど兵士と云うのは金がかかる。

兵士たちは今回の魔獣の討伐以外にも、町に最低限の人数は駐屯させなければならない。この地域で続いた日照りで食い詰めた者の中には盗賊に身を持ち崩す者たちもいる。

町の付近の村とてどんなに取れる税が少なかつと男爵の治める領地には違いない。盗賊のたぐいが増えている以上、村々への見回りも欠かせない。

そういつた町の現在の状況と人口を考えれば六十名でも出せた方だろう。

ディーンは部下に任せて実際の戦場には出て来ない雇い主や、傭兵だけにまかせっきりの雇い主を数多く見てきた。そんな雇い主たちの中ではこの男爵は充分に上等な部類に入る。

それにディーンがこの町に来るまでに集めた噂。

この町に来てから自らの目で確認した町の様子。

男爵はこの地を治める領主として、無理な税金を取り立てるような行いはしていない。

それどころか作物の実りの悪い時には逆に税を軽減し、今回は大規模な干ばつで駄目になった農作物の補償さえするという。それに猟師を筆頭とした食べる事もままならない町の住人にも優先的に職

を与えていた。

日照り続きでも領民の食料を確保し、物価の安定に気を配る。

兵士の巡回を増やし、町が荒廃し人心が荒れる事のないように目も配る。

この男爵はこの町に住まう住人にとっては間違いなく『良い御領主さま』だった。

この最果ての地でこれだけの善政を敷く領主。

その領主が選んだ暁に対する非道とも云える行い。

一人の男の持つ対極に位置する顔。

男爵の真の姿は温情を宿した顔か、それとも非情なる顔か。

彼がしようとした行為は為政者として、この地を治める者として下した決断なのか。

ディーンは男爵がひた隠しにしていた魔獣ルーサの情報により彼を揺さぶり追い詰め、この地が何代にもわたり抱え続けた、『隠された真実』を冷酷に彼に突きつけた。

だがそれをしながらもディーンには、男爵が抱えざるを得なかった矛盾が手に取るように分かっていた。

彼の声にならない慟哭を、気も狂わんばかりの葛藤を、恐らくディーンだけが我が事のように感じている。

彼は暁を捧げなければならなかった。同時に暁に全ての命運を委ねていた。

彼は何も語らない。

彼の内に渦巻く怒り、悲しみ、葛藤。

ディーンはそれを知りながらも、それを知る己の胸の内を決して彼に悟らせるような真似はしない。

彼が望むものは同情では無い。

彼が望むものは……。

彼は馬に跨り、自らが騎士を率いて戦場に向かう。

ここにいる誰も知らない魔獣の恐ろしさを知りながら。

この地が連綿と受け継いできた影の歴史。

ディーンはそれを断ち切る為にこの地へとやってきた。

恐らく男爵がディーンの真実に気付く事はないだろう。

それでいい。

全てを見通せる存在はすでにこの世界から絶えている。

彼は知らない。

彼よりも遥かに長い時間をかけて、怒りを、悲しみを抱き続けた者たちがいる事を。

森に向かうディーン達が今回雇われた表向きの仕事は、普段からこの森にいる魔獣の討伐。

依頼書にあつた魔獣の中でも必ず出ると予測されているものが三種。今回のように奥まで踏み込めば出没する可能性が高くなるものが後五種類書かれていた。

必ず出ると予測されている三種の魔獣は一匹一匹はたいして強くも無い魔獣だが、群れで襲ってくるとその危険度が一気に跳ね上がる。

森への距離も残すところ後僅か。

ディーンがその魔獣たちの特徴を思い出しながら眼前に広がる森への道を真直ぐに進んでいると、頭上から黒い影が落ちてきた。

影に気付いて上空を見上げると空から慌てた様子のアドルフが舞い降りて来る。

ディーンはアドルフの表情から戦闘の気配を読みとり気を引き締

める。

ディーンの傍らに降り立ったアドルフから齎もたらされる報告。

「左前方の森からクラーガの群れがやって来ます」

「群れの数と距離は？ クラーガだけか、それとも他に何か混ざって無いか」

降りるや否や慌てて報告するアドルフ。

動じることなく静かに淡々と問いかけるディーンによって、アドルフは冷静さを取り戻す。

ほんの少しの間考え、そして

「数は多分三十頭ほど。種類はクラーガだけで距離は今森から出たばかりです」

「わかった。お前達は引き続き空からの警戒を。戦闘中に森から他の魔獣が出て来ないとも限らない、その場合はすぐに知らせろ。この辺りは空には大型の魔獣はいないらしいが油断するな。必ず弓は準備しておけ」

まだ成人して何年も経っていない様なアドルフとて、すでに隊の一員として戦場には何度も出ている。それでも言わずもがなの事までつい言ってしまうのは、無意識にもまだ子供だと思ってしまうせいだろうか。

アドルフは緊張した面持ちで一つ頷くと一気に空へと舞い上がる。

ディーンは一瞬だけ空を仰いでそれを見送り、顔を戻す時には纏う気配が変わっていた。

臨戦態勢に入ったディーンに普段の甘さは欠片も無い。

敵の戦力を見極め、指揮を取る今だけは『料理人である自分』を封印し、その後に残るのは冷徹な瞳の非情なる指揮官。

傭兵隊の隊長たるディーンは冷静に現在の持てる戦力と対する魔獣のそれを分析する。

アドルフから齎もたらされた魔獣の名はクラーガ。グラীগは俊足で現在位置を考えると遭遇までに残された時間は後三分ほど。

男爵の契約書にも書かれていた魔獣の中の一つで、暁がダランスの町からこの町へ移動してきた際にも丁度出くわした魔獣だ。

このクラーガは比較的どこにでも生息している。

大きさは中型犬ほど。雑食の魔獣としては小柄な方に分類される。外見的にはドーベルマンを連想させる顔を持ち、四本の足で地を駆ける。だが大きく違うのは毛皮の代わりに首筋から胴体を部分的に覆っている、固い甲殻類の様な殻。

この殻が曲者で頭以外の急所を覆い隠している上に、軽い剣ぐらいなら簡単に弾き返すぐらいには強靱だ。

クラーガは小柄な体と目を睥るほどのスピートを活かし人の死角から襲ってくる。鋭い牙と爪を持ち、人の死角から喉笛めがけて飛

びかかる。

地味に嫌なタイプの攻撃を仕掛けてくる魔獣で一匹なら比較的簡単に仕留められるが、大抵の場合は複数で攻撃して来るから危険度は跳ね上がる。

この比較的簡単と云うのは傭兵基準で一般の住民基準では無い。

クラーガは森以外の場所を徘徊している事が多く、移動中にもっとも遭遇する率の高い魔獣の一体である。

第11話 クラーガとの戦闘

ディーンは一瞬で魔獣の数と戦力を分析すると矢継ぎ早に指示を出す。

「全員止まれっ、グラーガとの接触までおよそ三分、数は三十。先陣はキース隊、突入しクラーガを引き付け攪乱、囷となれ。」

その間にウェイン隊、タイタス隊突入。キース隊が引き付けているクラーガを各々背後から殲滅。グレイグ隊並びにミヒヤエル隊は隊の前面に展開し防御しながら殺せるものだけ殺せっ！

それ以外は戦闘態勢を維持したまま後方にて待機」

ディーンは普段は傭兵隊として僅かばかりの形を整え各部隊名称を呼んでいるが、戦闘となると部隊を纏める者の名を呼ぶ方が早い。実際その部隊の所属隊員もそちらの方が早く反応する。

結局一旦戦闘に入れば部隊名など一々呼んではいられない。

ディーンの指示を受けたウェイン並びにタイタス率いる鬼人族部隊、総勢18名が各々の持つ武器を掲げて前にサッと進み出る。

そうしている間にも豆粒ほどだったクラーガが段々はつきりとした輪郭を持ってディーンたち一行に迫って来ていた。

「行けっ」

鋭く一声。

キース率いる獣人族部隊。ウェイン、タイタス率いる鬼人族部隊。

ディーン的一声を受けて走り出したのはほぼ同時。

だがクラーガの群れに飛びかかる頃にはその差は大きく開いている。

決して鬼人族達が鈍重なのではない。獣人族はその種族特性からほとんどの者は俊敏であつと云う間に地を駆ける。クラーガのスピードにも引けを取らないのは彼らだけ。

俊足のクラーガを攪乱し、なお且つ上回る俊敏さで彼らの爪や牙を器用にかわす。そんな真似が出来るのはキース達獣人族だけの技。

クラーガとの先陣を切ったのはジャン。

自称切り込み隊長は伊達じゃない。腰に差した片手剣はそのままに、両手に握った短剣で上手くクラーガの爪を弾き右に左に翻弄する。

持ち前の俊敏さでディーンの計算通りにクラーガの半数以上を引き付けるキース達。その彼らが引き付けるクラーガ目掛けて、鬼人族達の持つ武器が鋭い唸りを上げて襲いかかる。

鋭く風を切り裂く音が辺りに鳴り響き、唸りを上げて鉄球が魔獣に飛びかかる。手に持つ鎖を己が手足のように自在に操り、繰り出

す鎖の先に付いているのはデカくて丸い鉄の球。

その鉄の球を覆い隠すようにびっしりと、隙間なく生えた鋭い角が獲物を容赦なく切り裂き叩き潰す。

真っ先に飛び込んだこのエゲツナイ打撃武器、言わずと知れたモーニングスター！。

使いこなすのは暁所属の鬼人族の中では最年少。

淡い緑の巻き毛は思わず指を絡めなくなるような柔らかさ。少し低めの身長と、常に潤んだ茶色の瞳はお姉さま方の保護欲を鷲掴みっ！

思わず目が行く唇は、赤く色づき誘うかのように緩く弧を描く。その色どりは童顔の幼い美少女のような貌に妖しい魅力を添えている。

はち切れそうな筋肉の塊とでもいう様な鬼人族の中にあつては目立つばかりの細い肉体。だがそれも身に纏う物を脱ぎ去れば、無駄な肉の無い均整のとれた肉体美が現われる。

僕、脱いだら凄いですっ！

そのギャップは年下趣味のお姉さま方に絶大なる支持を得る。

保護欲をかきたてるその可憐なる美少女顔と、思わず赤面するような均整のとれた筋肉質なその肉体の奏でる絶妙なるアンバランスっ！

顔は美少女だろうと中身は男。

美少女然とした面持ちからは欠片も想像できないが、貌も身体も自らの魅力は余す事無く利用する。

その実態は喰える獲物は全て喰うっ！ 男の中の男っ、エリアスっ！

その横で魔獣を景気良く切り飛ばしている男の名はガスパー。

鋭く砥がれた巨大な戦闘用の斧、バトルアックスを力任せに振り回し、飛びかかってくるクラーガを岩をも砕く強力で力任せに切り裂き弾き飛ばす。彼にかかればクラーガの硬い殻とて紙の様なもの。

二匹纏めて吹き飛ばし、飛んだ所に運の無いのがもう一匹。

三匹仲良くもんどりうって、ドッコーンっ！ それを目で追うガスパーは……、

つつっにつぱーっ！ とっても嬉しそうっ！

思いつきりのドヤ顔を周囲に振りまき次の獲物に狙いを付ける。

そうかと思えば長い金属の棒の先端に、人の頭ほどもある鉄球の放つ存在感。

モルゲンステルンを軽々と自由自在に振り回すのはダンカン。

獣人達が引き付け背中を見せるクラーガを、ここぞとばかりに後ろから狙い撃ち。

その強烈な一撃はクラーガの背中を粉碎し、原形を留めぬ肉塊とする。

轟音を立て振り回される棒の先端にある鉄球には、もちろん鬼人族の角もかくやと言うほどの鋭く尖った角がびっしりと生えている。

普段は金属の持つ硬質な光沢を宿すその固まり。それが今は血に濡れて妖しい光を投げかける。びっしりと生えた角の一本一本に至るまで魔獣を切り裂き、血を啜る。

鬼人族が振るう凶器を器用に避けクラーガを攪乱しつつ囷となり、クラーガの爪や牙を紙一重でかわし続けて跳ねまわるキース率いる獣人達。

そんな獣人達を背景にそこかしこで振るわれているのは、巨大なメイス、金砕棒、ウォーハンマー……基本全て打撃武器。

それが振るわれる度に弾け飛ぶ硬い殻。まき散らされる血しぶき。空を舞う原形を留めない肉塊。

自らの持つ鍛え上げられた肉体。

神から与えられたと信じている力、『強力』

それを惜しみなく発揮し原始的なまでに猛々しく、血に狂うその姿。

戦場ではこれ以上ないほどに味方を鼓舞するその勇猛果敢な闘いぶり。

戦闘中はその戦いぶりで味方の勇気を奮い起こし、熱い支持を得る彼ら鬼人族。

ただし戦闘後の彼らには、いつもディーンの小言が待っている。

自らの角に通じる巨大でエゲツナイ打撃武器。

それは鬼人族達が奉る偉大なる神、ダラカーチ神から与えられた聖なる神器だと本気で信じている鬼人族集団。

彼らはディーンの愛する食材を、生ごみに変える天才だ。

ディーンは今日も彼らの勇壮な闘いぶりを、指揮官として後方から冷静に見つめている。

絶対に何があっても鬼人族達による”フルボッコ”だけは回避しよう。

そう固く固く己が心に誓いながら。

この戦闘でディーンは攻撃の全てを獣人族と鬼人族の部隊にまかせ、守りは竜人族に。

それ以上の戦力は一切投入しなかった。

この戦闘に人族の部隊、特に魔術部隊を投入すればもっと早く片付いた事だろう。

それをディーンは知っている。

そしてそれは今までずっと共に闘ってきた同じ暁の隊員達も知っている。

では何故ディーンは人族の部隊を後方で待機させたのか。

それは『人族』だからだろうか。

ディーンの率いる暁の隊員達の中には誰一人そのように考える者はいない。

たとえそれが囷にされた獣人達であろうとも。

魔術とは強力なる武器。

だが、それを生み出す人族の持つ魔力には限りがある。

ディーンの冷徹な瞳は告げている。

魔力とは限りあるもの。

ならば使つべき時は選ばなければならない。

これから行くのは魔獣の森、何が待ち構えているのかわからない

場所。

ならばこのような雑魚相手に使う魔力は、無い。

指揮官としてのディーンは常に冷静に、時に冷徹に指示を出す。

仲間を失う事無く充分に勝てるだけの戦力を。

だが使うのは必要最低限の力。

その大いなる矛盾をはらんだ思考。

常にその境界を追い求め、種族ごとの能力を見極め、個人の技量を把握し、ギリギリの所を見極めようとするディーンの判断に甘えなど入る余地は無い。

出来る、そして必要だ。

ディーンはそう判断すれば仲間とて容赦なく囷に使う。

そしてこの非情なまでに冷静な傭兵隊隊長としての顔。

戦場で暁の指揮を取っているその間だけ現われるこの姿を見知っているからこそ、隊員達は普段のディーンがどんな姿をしているように、己の命を預けてついて行く。

この男に従えば生きられる。

この男ならこの腕を預けて不足は無い。

きつと己の全てを活かしてくれる。

そう思えなければ常に生と死の狭間に身を置き、死を身近に感じ
『生きている』事の幸運を誰よりも知る『傭兵』が、自らを誰はば
かること無く『料理人』と言い切る男につき従う事など、ありえな
い。

第11話 クラーガとの戦闘（後書き）

閑人です。傭兵好きの皆さま、その他諸々の皆さまへ

ジャンル『コメディ』にシリアスな戦闘シーンを期待するのは止めましょう！！

第13話 御説教

森を目前にして戦闘の激しさを物語るように、元は魔獣であった肉塊や殻が至る所に散らばっていた。

そこからほんの少しだけ離れた場所で並んでいるのは、体中あちこち血塗れにした鬼人族達十八名。
ちまみれ

その前で腰に手をあて、無表情で彼らを見るのはディーン。

静かにゆっくりと彼らを眺めまわす。

そんなディーンの様子を前にして、ウェイン達鬼人族集団はやつと昨日の夜に言われた言葉を思い出した。

——「狩り取った魔獣はそのまま食材として使うからな。今回の契約は食費は自腹なんだから、ちゃんと原形を残して片付けろよ」

ディーンは鬼人族集団をぐるりと見回し釘をさす。そんなディーンに向かって、

——「……………わかったーっ」「……………」

はい、みんな揃ってお利口さん。

それは昨日の夜の事。

時間で云えばまだ半日。

無表情のディーンを前に、流石のお気楽集団もやつと不味いと氣付きだす。

この料理命のディーンから、彼の狙いを付けた食材を取り上げたのだ。

その行為は万死に値する。

何を言われるのか。ごくりつと唾を飲み込みディーンを見つめるウェイン達。

ディーンはその様子を見て、ウェイン達が昨日言った事をようやう思い出したようだと言付くと

—— はあああつ

肩を揺らして一つ大きくため息をつき、一言。

「まあ、いい」

鬼人族集団の予想に反してあっさりとしたディーンの言葉。

「俺だつて余裕が無い時までやれとはいわねえよ。それに今回はちよつとヤバそうだ。次も加減する必要はねえからな。思いっきりやっていいぞ。御苦労さん」

頭を一つかき混ぜながら、淡々と話して切り上げる。

いつにないディーンの状態にウェイン達は少し戸惑うも、そんな事は知らないタイタス達臨時隊員たち。ディーンのお許しが出たと安心して、あつという間にいつものゆる〜い雰囲気及早変わり。

そんなタイタス達を見ていたウェイン達もあつと云う間に気が緩む。そもそも彼らはあまり難しい事は考えない。

ディーンの様子に感じた違和感も一瞬で忘れ去り、各々武器の手入れや身体の血糊を拭いだす。

もちろんキュキュつと自慢の角の手入れも忘れない。

ディーンはそんな彼らをほんの少しの間だけ苦笑して見ていたが、すぐに踵を返して男爵の元へと歩み去る。

ディーンにとってウェイン達の行動は予測済みの事。

少し怒って見せたのはまあ、一種の通過儀礼の様なもの。

ディーンにはこうなる事はわかっていた。

そもそも行きがけに魔獣を討伐しても、森の探索に行くのに持つて行けるわけもない。帰り道に拾って行くにも、その頃に残っているのは爪に殻に牙に骨くらいのものだらう。

ここはもうすでに森の側。森にいるのは雑食の魔獣、共食いだつて特に珍しい事じゃない。

爪も殻も牙も、肉以外の部位はすでに男爵に譲ったもの。

ディーンの懐には入らない。

だつたらどうなろうと関係ない。

魔獣が粉々になるうがなるまいが、実は初めからディーンにはどうでもよかったのだ。

男爵の元へ歩きながら二つ頭を振ってウェイン達を追い出すと、ディーンは眉を寄せて今後の事を考える。

正直なところディーンにとっては今回の魔獣討伐、大物が出るか出ないかは半々ぐらいの心積もりでいたのだが……。

ディーンは歩きながら先ほどの魔獣を観察し、どうやら大仕事は確定になりそうだと人知れず一人静かに気を引き締める。

男爵の側まで行くと周りを囲む騎士たちがスツと男爵の前に出ようとする。

よく訓練されている。

ディーンは邪魔されているにも関わらずその様子を満足気に見る。

ディーンはそのまま、騎士たちからも少し離れた所で立ち止まると恭しく礼を取った。

「失礼いたします。こちらから声を御掛けするご無礼をお許し下さ

い。先程の戦闘にて気にかかる事が御座います。申し訳ございませんが卿のお時間を少々頂きたく思っております」

頭を下げたまま一気に話す。相手は御付きの騎士に囲まれた貴族。言葉を聞かせているのは何も男爵に対してだけでは無い。

彼らはほんの少しでも軽んじられていると感じると、非情に始末に負えない行動を取る事がある。慇懃にし過ぎるぐらいが丁度いい。

男爵はディーンの様子に何か思う所があつたのか、騎士たちをその場に残しディーンを連れて少し後方へと下がって行く。

後に残された騎士たちの顔には少々苦々しげな表情が浮かんでいるが、これはディーンにはどうしようもない。

頼むから男爵に云ってくれ。

ディーンは心の中でそう呟くと先導する男爵の後に従い囲みを抜ける。

騎士達からほんの少しだけ離れた後、ディーンは静かに男爵に告げた。

「群れの中に数匹の雌が混じっていました。今回の件、どうやら卿の取り越し苦労では無くなりそうですよ」

しばしの間、ディーンと男爵は静かに互いの瞳を見つめていた。

その互いの瞳の奥にあるものを探るように……。

この世界の森や山は魔獣の生息域。特に深い森や、山々の連なる奥地は人を寄せ付けない未知なる秘境。そんな場所にすむ魔獣に関してはどんな魔獣がいるのかも、その生態も未だほとんどわかってはいない。

遙か昔、どこの国も領土拡張を狙い森に兵士の一群を差し向けた時代があったが、その時の兵士たちはほとんどが帰らぬ者となった。

それ以来、森の奥は不可侵の領域として今も人と魔獣の棲み分けがなされていた。

ただし人が奥地に踏み込まないのは、我が身かわいさの人の都合。魔獣には魔獣の生態があるのは当たり前的事。

魔獣の繁殖の時期。それは大きく分けて一年に二回あると言われている。ただしこれは人が踏み入れる事の出来る範囲にいる、生態の分かっている魔獣に関してだけの事。

あくまで分かっている範囲だが、草食系の魔獣の中には一年に四回繁殖の時期を迎える物もいれば、一回に三十から五十匹以上を産み落とす多産系の物もいる。

こういった魔獣の中には家畜として飼うのに適したものもいて、人によって養殖されていたりもする。

このガルディアスの一年は七百日。十四か月あり一カ月は五十日。十日を一週間と区切り、五週間で一カ月となる。 （参考資料

『設定集』の方に設定一覧あり）

四季があり春と秋がそれぞれ四か月、夏と冬が三か月。そして冬の半ばに一年の終わりの日がやってくる。

この一年の終わりの日には普段は満ち欠けを繰り返しながらも、消える事なく夜空に浮かんでいる三つの月が全て隠れて、海の波が鎮まり湖の様に凜々という不思議な現象が起こる。

そしてその一日が明けるとまた海には波が戻り、夜空には月が現われる。

この不思議な現象を人は神々の訪れとして捉え、その日を一年の終焉と再生の日と定めた。

夜空に月が無くなる日が一年の最後の日、朝日の出と共に戻ってくる波を再生の象徴ととらえて一年の始まりと見なした。

そして人には人の営みがあるように魔獣にも魔獣の営みがある。人と同じように魔獣とて、水を飲み食事を取りそして繁殖する。

普段は魔獣は森や山、人はそれ以外の場所と棲み分けがなされているかに見えるが、当然ながら魔獣と人の間で協定がなされてそうになったというものではない。人が魔獣を避けて住処を築いて行っただけの事。

魔獣にとってはそんな物は何の意味もない。

そして、そんな魔獣が年に何度か群れで押し寄せてくる時期がある。

繁殖。

それは体力をつけて挑まねばならない事なのは人も魔獣も大差ない。彼らはまず、繁殖期に差し掛かると雄雌問わず獲物を求めて人里にやってくる。それが春の初めと秋の初めの年二回。

次に繁殖が終わり子供がある程度育てば、群れに雄は一匹でいい。

育った雄が群れから放逐されるのが夏の終わりに冬の終わり。この時人里にはまたしても、放逐された若い雄たちが大挙して押し寄せる。

そして最後に秋の終わり。冬の訪れを前にして、魔獣たちは冬籠りの為の餌を求めてやってくる。

一年を通じて合計五回、大規模な魔獣と人の攻防が繰り広げられている。

傭兵の中でも魔獣相手を専売にする者にとっては、この時期が大事な大事な稼ぎ時。

この世界の一年は長い。一年に五回と云えば多い気もするが一つの季節に大よそ一度。その一回一回の間には大体短くても一カ月、長い時には四か月程の期間が空く事もある。

そして今は夏の暑い盛りも過ぎ、夏が終わろうかと云う季節。普

段なら群れを放逐された若い雄が村々を襲いに来る季節。傭兵にとつての大切な稼ぎ時の一つ。

魔獣がこのファースラの町の周辺に出没する事は何も不思議な事では無い。だからこそ男爵がギルドへ出した魔獣の討伐依頼も当たり前の事として受け取られた。

だが、これに雌がいるともなると話は少し違ってくる。

次の魔獣の子作りの時期までにはまだ十分に日数があり、雌がこの時期に群れをなして森を出てくる事など本来であればあり得ない季節なのだ。

魔獣とは本能で生きるもの。その魔獣が常と違う行動を取る。それはつまり、いつもと違う何かが森に起こっていると云う事。

雌たちが森から出て来なければならぬ何かがある……。

第13話 御説教（後書き）

閑人です。

業務連絡、業務連絡

以前感想欄に『設定があるなら少しずつでも設定集とか欲しいですね』というご要望がございましたので作って見ました。そちらは本編に出した設定を順次更新という形になります。

今回の魔獣の出現時期なども見やすく（……多分）纏めてありますので、ご興味のあるマニアな方だけどうぞ。

閑人はそう云ったものは斜め読みでスルーするタイプです。本編を読み込むのが好きさっ♪

だからもし要望がなかったら作らなかった、というより思いつきもしなかったでしょうねえ。

ご指摘感謝いたします。

そちらは本編よりも後節のノリでゆるく作ってますんでよろしく。後節がお嫌いな方は訪問なさらないのがよろしいですよ。色々な物がダダ漏れですからね。

どうやら目次のページから行けるみたいですよ。（他人事かよっ）

それと、念の為ちょっと本編の補足を。

四か月も休んで何しとんじゃー、と突っ込む皆さまへ。

大掛りな魔獣討伐の時期、いわゆる魔獣大戦がこの五回だけで、他の時期が全く魔獣が出ないわけじゃないですよ。国が、というか森との国境線の領主が必死こいて守らなければならぬのがこの時期なだけです。

今の魔獣と人の力関係は、人が必死に防御って感じですかね。今あるものを死守するのに手一杯で、ちよつと攻めには移れなさそうですねー。くわばらくわばら。

商隊にはどの時期であろうと護衛は必須です。

後、傭兵を雇う側の事情に関してはまた別のお話ですので。……特に金銭面の。

第14話 森を目前にして

魔獣たちの住む森は、遠目にはその青々とした瑞々しさが際立って見えていた。しかしこの夏の連日続いた日照りの最中にあるのでその姿は異常とも云えるだろう。

だが今現在ディーン達一行が目の前になっている森の入口に関して言えば、草木は疎らで木の葉も落ちてしまっている。

この夏の暑さを物語っているように木々は立ち枯れ、土もカサカサと渴いている。

その入り口から視線を森の奥深くに転じると、そこには一転して鬱蒼と生い茂る木々が逞しく葉を茂らせている。その姿はまるで奥に立ち入ろうとする者を拒んでいるかのようだ。

こうして森から少し離れて観察しているからこそわかる違和感。まるで森の中に見えない境界線でもあるかのように、森はその差異を静かにディーン達の目に晒さらしていた。

ディーンが今までに経験した事のない種類の異質さを秘めた森。

その様子を目の端に留めながらディーンは問う。

「卿、今回の魔獣討伐に関してなんですが、御付きの方達にはなにとご説明を？ 特に魔術師の方達には」

この不可思議な森の様子や肌に纏わりつくような独特の気配。首の後ろを何かが這いまわるような、ぞっとする感覚。

ディーンは今までの傭兵経験の中でも、ここまではつきりと嫌な予感に襲われた事はほとんど無い。

どうやらこれはディーンが考えていたよりも、もう一段事態は深刻そうだ。

一応ディーンは勝算があると思ったからこそ、この仕事を本来の依頼主から受けた。そしてその為に揃えられるものは、全て揃えて準備を整えてきた。

それでも物事に絶対というものはない。

傭兵などと云う命のやり取りが日常茶飯事の仕事をしていると、運不運が如何に理不尽に運命を定めるものか嫌と云うほど身にしみていた。

ならばせめて人の手が届く所は足掻けるだけ足掻く。一度仕事を受けてしまった以上見込みよりも危険そうだから、などと云うあやふやな理由で引き下がる様な真似は出来ない。

ならばその分使えるものは洗いざらい使ってみせる。貴族の御付きだろうがなんだろうが関係ない。容赦なくこき使って生きて戻る。

死神の鎌から逃れられるものならば、例えそれが紙一重の差であらうと構わない。

ディーンは緩やかな思考の海に沈みながらも静かに男爵を見つめ返答を促す。

そのディーンに対して男爵は僅かに首を振り、

「なにも。そなたがどう考えているかは知らんが、……この地にいるものは易々と口に出していい存在では無い」

瞳には暗い諦めの影を宿し、沈痛な面持ちで男爵がディーンに告げる。

その言葉を表面上は静かに、重々しく受けとめているかのように振る舞うディーン。

だが実際の所は男爵がどう思っているかと、何を決意しようとしてディーンには関係が無い。

もうここまで来てしまった以上、当初の予定通り進むだけ。障害が思い描いたものより大きければ、それに見合う戦力をかき集めてくればいい。お誂え向きに男爵の手許には魔術師たちも控えている。

男爵がどう考えようと、最後に暁を招き入れたのは男爵だ。仕向けられた事を知らないとはいえ、最後のピースを自らの手で嵌めてしまった以上は最後まで付き合う責任があるだろう。

そもそもディーンには男爵が今しているだろう勝手な思い込みもその鬱陶しいばかりの胸の内も、斟酌してやる気など更々なかった。

ディーンは男爵の立場も、選ばざるを得なかった行動も理解している。理解はしているが肯定しているかと云えばそうではない。男

爵が勝手に思い描く真つ暗な未来に、お付き合いしてやる気はディーンには全くない。

今同じ場所に立ち互いの目を見交わし合っている二人の男。

だがその瞳の奥底にあるものはある意味正反対のもの。

一方の瞳の奥にあるものは諦観。そして自らを苛む運命からの後ろ向きな解放を望む病んだ心の叫び。だが、もう一方。ディーンの瞳の奥底にあるものはただ生への渴望のみ。

ディーンは泥の中を這いずってでも生きて戻る。ディーンの中には諦めだの、潔くだの、そんな御託は一切並ぶ余地は無い。

ならば雇い主にもそんなにあつさと潔くなられては困るのだ。しっかりと後金を取り立てる為にも精々一緒に這いずってもらおうか。

ディーンは男爵に合わせて沈痛な表情を浮かべながらも、この鬱陶しいばかりの男爵にどう話を持って行ったものかと考えていた。

「まず昨日卿から御見せ頂いた情報が確かであれば、魔術師の方々にはどうあってもご協力を頂かねばなりません。

正直この森に近づくまでは暁が抱える魔術師を筆頭とした隊員たちでどうか、とも思っておりました。ですが実際にこの森から滲み出て来る異質な気配を考えますと、それだけでは少々心もとないかと。

なに、別にはっきりと何かを断言する必要などないのです。肝心

な部分は曖昧に誤魔化して話せばいいだけの事。どうかそのあたりはこの私にお任せ下さい」

ディーンは慎重に男爵の表情を窺いながら、男爵に倣って悲壮な覚悟を決めているかのような真剣な表情を浮かべて話を進める。

まあようするにディーンはゴチャゴチャ言わずにそっちの戦力も根こそぎ寄越せ、と言いたいのだがまさかそうはつきりと云うわけにもいかない。お上品な貴族に合わせていると話が進まないのが困ったものだ。

思い悩む男爵にディーンはもう一押し。

「これから我々は卿共々この森の探索に赴きます。恐らくはその過程で他の方々も森の様子が普段と違う事はお気づきになられるはずです。」

何一つ情報を明かさないよりも、嘘と真実を取り混ぜて話しておいた方が逆に誤魔化しやすいのではありませんか？ 折を見て他の方々にも御紹介頂きたいのです」

この森の不可思議な様子。初めて訪れたディーン達でさえおかしいと感じるのだ。普段から森に接している騎士や兵士達が気付かないはずがない。

ディーンは隊員たちを使って普段の森の様子を、獵師を筆頭とした森で生計を立てるものに聞き込ませている。この森は普段からこの様なおかしいな雰囲気を感じた森ではない。

男爵はディーンの言葉にしばらく考えた後、重々しく頷くと、

「いいだろう。決して秘密を明かす事のないようくれぐれも慎重に頼むぞ。後ほど魔術師たちと騎士団長に引き合わせよう」

真剣な、何かの決意を秘めた目でディーンを見る男爵。それを受けてディーンは

「はっ、ありがとうございます」

頭をゆつくりと深く下げながら、

——やれやれ、次はお供のご機嫌取りか。せめて取った機嫌の分ぐらいは働いてもらえるといいんだがな。

とまだ引き合わされてもない内から、その魔術師や騎士達の働きぶりを値踏みしていた。

第14話 森を目前にして（後書き）

閑人です

先日とても熱い励ましのお便りメールを頂きました。嬉しかったです。その中で思いもよらない事を聞かれました。

恋愛もハーレムもないなら……結婚は？

えっ？ やつは完全デインに、どこからどう見ても独身貴族でしょう。だって結婚なんかしたら、不幸ですよ！？
どう云う事かって？

では久しぶりに恒例の（？）閑人のたわ言、行ってみましょう。
最近シリアス展開ですからね、ちゃんと自重していたんですよ。
でも展開が今、鬱陶しいですからね！。ではいつも通りお嫌な方は『スルー』

『女の本音』

結婚前

「いつも子供みたいな目をして、夢を追いかけているあなたが好き。その夢を私にも手伝わせて」

結婚後

「いつまでも夢ばかり追いかけて、経済観念の無いあなたが嫌い。もう、いい加減にしてよねっ！」

……女って、こえええっ！ ガクブルガクブル

さて、結婚して不幸になるのは男と女デインあいて、どちらでしょうね？

第15話 森の探索 前編

—— ガザッ ガザガザ ザザッ ザッ

鬱蒼と生い茂る森の中をディーンたち一行はゆつくりと慎重に進む。木々が密集していて先の見通しが立たず、自然歩みは遅くなる。

今の隊列はやはり先程までと変わらず獣人族からなる突撃部隊を先頭にして、最後尾に男爵たちが続いている。ただし、男爵たちの乗っていた馬は森の入口で置いてきた。

このような何が出るかわからない魔獣の森で、もしも馬が暴れ出したらすぐにバラバラになってしまう。よく訓練された馬とはいえ、予期出来る不測の事態は初めから避けておくに限る。

ゴネられたら面倒だと思っていたが、ディーンによるこの提案を男爵は思いのほかあっさりと受け入れた。森の入口で数人の兵士を残し、他の者たちは男爵と共に徒歩で森の奥へと踏みこんでいく。

翼人族の双子は空の上。上空高くから森の様子を窺っている。

木々が密集した森の中では空からでも見通しがいいとは言えないが、なにも地面が見えないから意味が無いなどと考えるのは浅はかだ。

まず単体の魔獣ならそれほど警戒する必要はない。彼らが空から

警戒するのは魔獣の群れ。森の中で魔獣の群れが動くという事は、それに伴い森もまた動くという事。

魔獣たちが一匹二匹では無く群れで移動すれば、それに合わせて木々はざわめき鳥達は一斉に羽ばたく。

森の一部と化しているディーン達にはその様子は窺うことが出来なくても、空からならば一部始終が見てとれる。

地を行く者にとって空からの目を使えるという事は、戦略的な意味では非常に重要な意味を持つ。

ついでながら空を行くのは白と茶色の翼のみ。

もう一羽、くたびれた翼は……馬達の所で昼寝中。

ディーンは隊の歩みを止める事なく、獣人達を数人ずつ何組かに分けて斥候に出す。

歩みを止めないのは今回の斥候の目的が遠くを探るものではなく、すぐ近くを側に何も潜んでいないか探索させる為のものだから。それが必要なほどに森の中には鬱蒼と草木が茂っている。

そうして慎重に森に行くディーン達が目安にしているのは簡略化された地図。その地図に地元の猟師達から聞き込んだ情報を細かく書き込んである。

だがどう見ても猟師たちに聞き込んだ話よりも、色々な物が遙かに鬱蒼と生い茂っているように思える。

今一先ず隊が向かっているのは、二時間ほど分け入った所にあるはずの小さな泉。予定では一旦全員でそこまで辿り着いてから、隊を小分けにして探索を行う。

本当ならもう少し奥まで行っておきたかったのだが、森の外の戦鬨で少々時間が取られた。予定時間を無視して奥まで探索するよりも、今日は無理をする事なく予定通りの時間で切り上げる事は男爵とも話し合って決めてある。

ディーンは手許の地図を見ながら先頭に行くキースに指示を出し方向を示す。

ディーンは突撃部隊のすぐ後ろを歩いているウェイン達と共に歩きながら、森の様子をじつくりと観察していく。

猟師達の話ではこの森には食虫植物の類は^{たぐい}いないらしい。あのグロテスクな物がいないのは大変にありがたい。

だが今森に行くディーンの目には、この森はその類の物^{たぐい}がいても何も違和感がないぐらい陰鬱^{さま}として見えた。

そしてディーンが森を深く分け入って行けば行くほど、草木の密集^{さま}具合が増している様が見てとれる。それに加えてディーンの身体に重く纏わりつくようなこの気配。

——これは何だ？

ディーンは人知れず自問する。

——何故ここに、こんなものが漂っている？

空中に漂い人の身体に纏わりつくもの。

それは湿気。

干ばつの影響が心配なほどの日照りが続き空気が乾燥すれば、空中に体感出来るほどの湿気など漂っているはずがない。ディーンにとってはごく当たり前の常識。

だが今自らの身体で体験している以上、これは疑いようのない事実。森に分け入ってまだほんの数時間。森を逆に抜けてしまえば、そこにはいまだ渴いた大地と乾燥した空気が漂っている事だろう。

一人この奇妙な現象に頭を悩ませながらも、ディーンはその現象がどこから齎もたらされているのか、おぼろげながらも察していた。

ただ、信じたくはなかったただけだ。

男爵の恐れる魔獣、その名をルーサ。過去の文献により語られるその魔獣の姿、宿す力。

それは『水』。

この世界には数えきれないほどの魔獣が生息し、人が把握しているものはそのごく一部だといわれている。

そして人が知る魔獣の中の、更にごく一部には魔力を使う魔獣がいる。

それが魔術であるかはわからないが、一般に知られている中では

火を吐くものを筆頭に風、水、土を使うものが知られている。有名ではないが、一部の報告では雷を自在に身に纏うものもいたという。

だが普通に知られている魔獣と、今回のもの。ディーンの憶測が正しければ規模が違いすぎる。今ディーンが感じているこの湿気、これは森をほんの二時間ほど分け入っただけではつきりと感じられるぐらい濃密に漂っている。

あくまで予想だがこれは森を広範囲に覆い尽くしているのかもしれない。

もしそうなら、それ程広範囲に影響を与えるだけの力を持つ魔獣という事になる。

この予測がもしも当たっているのなら、この国が過去に選んだ道も肯定は出来ないが理解は出来る。

ディーンは暗い影を宿した瞳でそう独り言ちた。

理解出来てしまう自分を、心底厭わしく思いながら。

この森に起こっている現象を自分なりに考察しながらも、ディーンの足が留まる事はない。そうして歩くディーン率いる暁一行には、そろそろ泉に到着してもいいぐらいの時間が充分に経っていた。

ディーンの前にはまだ斥候に出した隊員からの泉発見の報告は届かない。

森を彷徨うディーンの手許にあるのは、大体の感覚で書かれた地図が一枚。

この世界では精巧な地図というのは、まず一般人の手には回ってこない。

まさか人工衛星が浮かんでいるわけでは無いから、精巧な地図と行ってもそこまでの精度ではない。

それでも測量技術を駆使して描かれたものとなると、それは戦争時の重要な情報となる。どこの国でもそんなものをあちこちにばらまかれていいはずがない。

だから普通に手に入る地図となると、主要な街道だけがしつかりと描かれた雑なものになる。他は大体の感覚がつかめる程度の物が多い。街道を中心に描かれたものは町から町へ旅する商人達が主に使っている。

後は一つの町の中だけを描いたものだ、ぐつと細かくわかりやすくなる。当然のことながら王宮を筆頭とした国の要、軍事施設のある所は地図には薄ぼんやりとしか描かれないが。

測量技術で描く他に翼人族が空中から見たままを描く方法もある。しかしこれもごく狭い範囲地図なら細かくとも見逃されるが、それを何枚も合わせて範囲を広げた物を持っているのが見つかったりすると、結構大変な事になる。

そうはいっても国にとって地図が重要であるのと同様に、傭兵にとっても地形を把握することは大変に重要な事だ。ないがし蔑ろになど出来ようはずがない。デインたちがこっそりと何人もに分散させて、詳細な広域地図を持っているのは内緒の事。

地図の重要性をよく把握しているディーンには、正直今手許にある大まかな地図では少々どころでは無く心許ない。

ディーンがそう思っている所に丁度斥候に出していた獣人族数人が帰って来た。

歩きにくい森の中をそれでも軽快に速足で戻ってくる彼ら。

「どうだった」

ディーンの問いかけに先頭を来た者が答える。

「ここから後五分ほど行つた所、やや右寄りに泉がある」

かなりぶつきら棒に答えるのはサス。

髪も瞳も黒くてディーンにとっては懐かしい色合いだが、何故かディーンはいつも睨まれている様な気がする。誰にでもこんな感じに話すから多分ディーンの気のせいだろう。サスは犬属の青年で主に伝令として重宝していた。

そのサスからの泉発見の一報にディーンたち一行はほっと胸を撫で下ろす。森がおかしくなっているも元からの地形に変わりはないらしい。流石にそれまで変わっているなどと言われては笑うに笑えない。

彼らを先頭に今度こそ迷いのない足取りでディーン達は歩いて行く。すると程なくして少しだけ森が開けている場所があり、そこに泉が見つかった。

なるほど獵師たちがわざわざ小さなと言う筈である。泉と言うにもおこがましい、こじんまりとした小さな湧き場がディーン達を出迎えてくれた。

それに一つ苦笑を落とすと、ディーンは周辺の様子を隊員たちを使って確認する。一先ずここで小休止を取り斥候に出している隊員が全員戻るのを待つつもりだ。

ディーンは何人かを周辺の見張りに立たせ、男爵の元へ今後の行動の確認と気付いた事態の報告に行く。

ディーンの目の端には嬉しそうに身体や武器の血糊を流すウェイン達の様子が目に入る。拭うだけではやはり気持ちが悪かったのだろう。

男爵率いる一隊は泉の側へ、ウェイン達がいる所とは泉を挟んで反対側へ優先して誘導する。小さな水場では反対といってもあまり意味は無いのだが、やらないよりはマシだろう。

今までに接してきて読みとれた男爵の性格から、血糊を落とすウェイン達を見苦しいと剣を抜くような危険な人物ではないとわかっている。

ウェイン達は相手の地位をはじめとしたその他諸々を気にして自分達の行動を決めるとか、そう云った事はあまり考えない。その分ディーンがせつせと気を使うはめになる。

こう云う時にディーンの頭に必ず浮かぶ呪いの文句が、何でこの俺が隊長何ぞやらねばならん。

諦めの悪い男だな、ディーン。

第16話 森の探索 後編

「卿、お寛ぎの所失礼致します」

正直こんな小さな水場に碌に座れもしない状態で、お寛ぎも何もあつたものではない。しかし社交辞令とはそんな事を一々考えていては、やってイケないものなのだ。

そしてディーンも細かい事は無視して男爵に声をかける。今男爵の側にいるのは騎士達の一部と魔術師たち。兵士たちは水場には入りきらないのであちこちに散らばっている。

当然ディーン達曉の面々も同じような物だ。ウェイン達が水場に
いるのは、氣を使った他の面々がさり気なく場を譲ったから。

鬼人族は本人達は気付いていないが、傭兵などという殺伐とした仕事の中にありながらも、あの何も気にしないお氣樂さが他の隊員たちの支えとなっている部分がある。あれで結構好かれてもいるのだ。

それはさておき、ディーンは男爵に一礼すると周りにも聞かせるようにして話します。

「これから二時間ほどかけて、今いる地点を中心として森の奥側の探索を致します。人員を七、八人ぐらいに小分けにして散らしますが、もしもに備えてここに鬼人族部隊を残します。」

それと伝令役にうちの者を分隊に一名づつ同行させたいのですが、卿に従っておられる兵士の方々にも御了解を頂けますか。卿には念の為、数人の部下の方と共にこちらの水場にお残り頂きたいのですが」

まずマルクス達人族の傭兵隊は魔術師を除くと八名。ミヒヤエル達は足りない人数を能力的な均衡を考えて暁から補充する。

暁側四組、男爵側は六組の合計十組の分隊が出来上がった。男爵にも断った通りそれぞれの隊にはキース率いる獣人部隊の面々を、一人づつもしもの時の伝令役として同行させる。

水場に残るのは男爵とその護衛の騎士二名に魔術師七名。暁側はマルクス率いる隊に所属する魔術師が五名にディーンとガストン。先程激しく動いた鬼人族達は何かあった際に駆けつける人員として十八名をそのままこの場に残す。

獣人族の一団には気の毒だが、実は持久力が一番すぐれているのは彼らだ。必要であればほとんどの獣人族は丸一日でも駆け続けることが可能だった。こういった場所で伝令として使うのに彼ら以上の者はいない為、このままがんばってもらう事にする。

そして暁の隊の魔術部隊からはカイトだけがその場に残った。

どうしてカイトや魔術師たちが残っているのかと言うと、そもそも魔術師たちはあまり突発的なアレコレには向いていない。

彼らの使う魔術にはどうしてもタメとなる時間がある。一瞬で魔術を思い通りになせる者は、かなり高位の腕を持つ一握りの者達だ

けだった。それに肉弾戦を主とする者たちよりは、やはり体力的にも劣っている。

ならばここで無理をさせて探索に同行させるよりも、何かあった際の後方支援部隊として活用した方が有意義だ。だから男爵も魔術師を探索には出さなかったのだろう。

ではどうしてカイト以外の暁の魔術師たちは、関係なく探索に赴いているのか。

実は暁の魔術師たちに限っていえば暁に所属する前までは、魔術では無く他の武器を持っていたものがほとんどだった。なのでこういった場合にはそちらの武器にあっさり切り替える。何の躊躇ためらいもなく至極当然に。

そういった思想は余所よそこの魔術師たちには全く無い。魔術師を名乗れるだけの魔術使いは、基本的には特権意識の塊だ。

そもそも魔術を学べるといった、恵まれた土壌にあるのはほんの一握りの人族。その彼らに誰もが使えるような武器を持って戦うといった考えはない。逆に、下手をしたら侮蔑の対象にまでなりかねない。

実利を重んじる傭兵であればそれ程でもないが、これが宮廷魔術師クラスにまでなるとやたらと格式だのなんだのを重んじる為、それが非常に顕著に現われる。

カイトは暁に所属する唯一の生粋の魔術師であった為、そういう意識に配慮してこういった場合は残される事が多かった。（ディーンは生粋の料理人の為、除外）

というのは実は表向きの理由で、カイトは壊滅的に運動神経が鈍かった。それはもう何もない所で一人でコケルという、ある種の離れ技をやったのけるぐらいに鈍かった。

そのあまりの鈍さを不憫に思ったディーンにより、こういった配慮がなされている。それをカイトは気付いているのか、いないのか。それは神のみぞが知っている。

ついでながら周りのほとんどの者は知っていて、深い憐憫の情をたたえた眼差しで生温かく見守るだけの優しさを持っていた。

……それを優しさと言うならば。

今男爵の側に残っているのは、その男爵お抱えの魔術師たちと側近だろう騎士が二人。この状況はディーンにはとても都合がよかった。

戻った後に皆で時間を貰おうかと思っていたが、この場に護衛として残すのならば彼らが男爵にとっては重要な者たちと言う事だろう。

それに話の内容的にも場を改めて落ち着いて話すより、こういった落ち着かない環境でサラッと流してしまった方がこちらとしては色々と誤魔化せて都合がいい。

ディーンは頭の中で一人画策してほくそ笑む。丁度いいから今のうちに丸め込んでしまおう、と。

頭の中で考えている事など^{おくび}にも出さず、ディーンは静かに男爵

に歩み寄った。

「失礼致します。卿、先程お願いした件ですが……。」

それから何事もなく二時間ばかりがたち、アチコチに散っていた兵たちの分隊が三々五々水場に戻って来る。

全員が無事に戻った事を確認すると報告の為に分隊の代表者を泉の側に集める。

歩き詰めだった兵たちを座らせて休ませながら、その場で報告を聞くのはこちらでも双方の代表者数名。

男爵の側は男爵と騎士団長サイモン・グラント、副官のジェームズ・ニール、そして魔術師長のハーマン・ギャビン。暁からはディーンにガストンが並び立っていた。

「ではまず報告を聞こうか」

男爵が重々しく告げると真っ先に反応したのがお揃いの甲冑を纏

う騎士達だった。

「申し上げます。私達はここより南西の方角に進みました。私は以前にも少しだけ奥地ぬかるみに來た事がございますが、以前來た時とは打って変って地面が泥濘ぬかるみ、泥の様になっておりました」

「私達は南の方角に真直ぐに進みました。これ程に草木が生い茂っているなどと聞いてはおりませんでした、進めば進むほどその影が濃くなつていくようでした」

矢継ぎ早に嫌な報告ばかりが続く。

「ご報告申し上げます。私達はやや南東寄りに進みましたが、進めば進むほど植物の形態が見知っているものよりも少し大きくなっているのではと……。」

そう告げる騎士は自分でも自信が無いのか、やや語尾が掠れがちだが言っている内容は無視できるような物では無い。

「私からも気になったんだけどね。私は南東に向かって行つたんだけど一度も魔獣と遭遇しなかったよ」

こんな時でもいつも通りの口調で話すのはグレイグ。

「……俺も会わなかった。俺が行つたのは南西、やや西寄りの方角だった」

グレイグの言葉に賛同するのはキース。

「そついや俺も見なかったが、木の上を何かが飛んで行くのは見た

ぞ。俺が行ったのは南の方向、真南よりも少し東にずれて歩いて行った」

マルクスまでが見たものは鳥らしいものだけ、魔獣には合わなかったという。ディーンは他の者たち全員に魔獣との遭遇はしなかったのかと問うが、全員がそれに否を告げる。

ディーン達の間に静かな沈黙が落ちる。皆その不自然さに気付いたのだ。全員の報告を合わせるまでは自分達が運が良かったと思っ
ていられたが、それが全ての隊となると受け取り方も変わってくる。

泉には二十人近くの男達が集まっているにも関わらず、チヨロチヨロというほんの僅かに流れる小さな水音が響いていた。

ディーン達のいる水場で片道二時間。兵士たちはそれより更に片道一時間奥へ進んでいる。しかも十分隊もの数を奥へ向けて半月状に散らしている。それで魔獣に会わないなどと普通に考えればあり得ない事だろう。

この先に関して分かっているのは、酷くざつくりとした地図だが成人男性が約一日歩きづめで進める辺りまでは描かれている。

猟師たちに詳しく話を聞いたのが、その半分当たりまで。それより向こうの話になると爺さんに聞いたとか、昔こう言われたとかの伝聞になってしまった。

つまり猟師たちが普段魔獣を狩る為に分け入っているのは、その程度の範囲だという事だ。

それでも充分生計を立てる事が出来ている。となるとますますこ

の状況は腑に落ちない。

昨日ディーンが男爵に確認させてもらったこの土地に代々伝わる地図でさえ、恐らくは丸二日かもう少しという範囲しかわからない。皆の脳裏に言い知れぬ不安が過ぎるが、いつまでもこうしていても仕方がない。他に報告が無いのか話を進め、粗方聞き終えた後は兵たちを休ませる。水と軽い食事を済ませたら、今日の所は一先ず引き上げる事にする。

この軽い食事というのは大抵の場合、乾燥させた果物や薄く切った干し肉を代表とする簡単な携帯食料を指す。

大概の傭兵は食事は一日二回。今回の様に早くに食べて間食に干し果実等の軽い携帯食で誤魔化す場合と、起き抜けは特にこれといった物は食べずに八時から十時くらいに休憩を取って朝昼兼用の食事を取る場合がある。

八時から十時に朝昼兼用というのは早く感じるかもしれないが、彼らは基本的に日の出日の入りを行動基準に動いている。その為時間^間は全体的に前倒しされているのだらう。

ここで三度三度しつかりと食事を取れる者は、余程恵まれた環境にいる者だけだ。

でも暁の隊員に限って言えば、こういった仕事^{仕事}中以外ではちよくちよく何か摘まんだり食べたりしている事が多い。なぜかという仕事をしていない時は、調理場の主^{ディーン}がせっせと料理研究の名の元に何かしら製造しているからである。

ディーンは休憩している兵士や隊員たちを視界で追いながら、その頭の中では少々狂ってしまった予定を修正すべく今後の算段を整えていた。

—— 砦に戻ったらずやる事はあいつらを連れて……………。

ゆっくりとジークの毛並みを撫でながら、ディーンは視界にウエイン達鬼人族集団をおさめていた。

第16話 森の探索 後編（後書き）

本文 補足として

暁67名 居残り組 計29名

デイン、ガストン、カイト、鬼人族18名、マルクス隊魔術師5名、空に2名、昼寝1名

探索組 計38名 4分隊

マルクス隊 8名 + 獣人1名 計9名

ミヒヤエル隊4名 + 暁3名 計7名

暁 8人編成 2分隊 計16名

残り男爵の分隊に伝令として 計6名

男爵60名 居残り組 計17名

男爵、騎士2名、魔術師7名 入口 馬に数名（5名）

探索 計45名 6分隊（+各分隊1名暁伝令）

8人編成3分隊 7人編成3分隊

ざっくり大まかな時間の推移 日の出時刻 4：30 として

行き 砦出発5：00 徒歩1.5時間 到着6：30 戦闘

0.5 - 1時間

森の入口 7：30 徒歩2時間 泉9：30 探索2時間 泉1

1：30 徒歩2時間 森の入口13：30

帰り 森の入口13：30 徒歩1.5時間 砦15：00

第17話 ムツキー隊 敬虔なる祈り（前書き）

ディーン視点 一人称になります

第17話 ムツキー隊 敬虔なる祈り

俺たちは行きと同様にして皆まで戻ってきた。皆まで戻ってもまだ十分に日は高い。

今回森に出向いてみて、どうやら思っていたようには狩りが出来そうにない懸念が強まった。

俺は基本的には毎日狩った獲物を料理する気でいたんだが、獲物がいないのではしょうがない。それに森の様子が思っていたよりも変化している。

今回は何が出るかわからない。ちょっと俺も自粛した方が良さそうだ。

最低限の糧食はもう用意していたが、あの森の中では全く料理出来なくなる可能性もある。だったら考えていた糧食も、何もしなくても食える物を中心にしなければマズそうだ。

どうやら今日を含めて七日間。非常に味気ない生活になりそうだ。

そう思い憂鬱になりながら俺はとある一団を求めて砦の周辺を彷徨っている。皆まで戻った後は一旦解散しそれぞれに明日に備えて準備をしている。俺が少し用事を済ませているうちに、どうやら見失ってしまった様だ。

「おいカイト、あいつらどこ行っただーっ？」

丁度目の前に見えた人影に大声で呼びかける。

「隊長ー、あいつらって誰の事です？」

「んっ？ あの無駄に暑苦しい連中。ちょっと買い物の荷物持ちさせたいんだけど、集団で姿が見えないな。どこ行っただかお前知らないか？」

俺がそういうと、カイトの目が一気に泳ぎ出す。……怪しさ全開だな。

「ん？ どうしたんだ」

出来るだけ追い詰める事のないように、ゆっくりと訊ねた。

「あー、隊長、彼らは例の”アレ”ですよ、”アレ”。神への祈りの時間です」

「あー、”アレ”か」

俺はその言葉を聞いた途端、カイトが目を合わせない理由が良く分かった。

分かりたくなかったが分かり過ぎるぐらいに、分かる。

「……なんでこんな時に？」

聞きたくもないが聞かないわけにもいかない。

「あー、明日つから忙しくなりそうでしょう。祈りの時間がとれないかもしれないから、纏めて祈っておくと言っていましたよ」

なんだかその一言を聞くだけでひどく疲れた気がする。カイトを見ると同じくカイトの顔も一氣にうんざりした表情に変わり、何やら一瞬でゲッソリとやつれたようだ。

俺はカイトと目を見交わす。

そこには自分と全く同様の思いが見てとれた。

—— ぴこーんっ 俺の心は今、カイトと深く深く結びついたっ！

「ふうふうっ」

馬鹿な事を考えていても事態は一向に進まない。

俺とカイトはお互いに、心の底から深い深い溜息を吐く。

致し方ない、行かなければ。

鬼人族の神というのは何故、俺たちにこんな試練をおまけしてくれるんだろう。

はた迷惑な神だ。

鬼人族の神への祈りは、熱い。それは他の種族から見ると狂信的なほどに、熱い。

彼らは祈る。

毎日、自らが信じる神の為に祈る。

彼らは祈る。

雨にも負けず、風にも負けず、雪にも負けないその姿はまさしく敬虔なる信徒の鏡。

目の前にどんな苦難が立ちあがろうとそれは全て崇高なる神、ドラカーチ神によって与えられた試練。

だがその祈りは激しすぎて、他種族の者は近寄ることはおろか直視することも憚られる。

いや、一部にいた。他種族の中にも熱狂的な彼らの”祈りの”信奉者がっ！

祈り自体に信奉者が付くのかって？

俺に聞くな。

何故か一部のマニアと独特な性癖を持つ奴らの間じゃ、熱狂的に支持されている。

そいつらは彼らの祈りが始まると齧^{かぶ}り付きでその彼らの祈りを熱心に見詰める。

だが、そんなコアな趣味の無いものに、”あの祈り”を直視するのは…………キツイ。

もちろん俺には、そんなコアでディープな趣味の持ち合わせはない。

ああ、全く無いっ！……………ここ、かなり重要だからなっ！

いた。いない方がありがたかったかも知れないが、いた。

彼らは熱心に彼らの神に祈っている。彼らがいるのは砦の横、兵士たちの為に作られた鍛錬場の片隅。

それを目にする俺は何だか目の焦点が合わなくなってきた。

多分俺の身体は正直にも自己防衛本能を発揮して、”ソレ”から己が身を守ってくれているに違いない。

凄いな、なんて便利機能っ！

だが、耳は駄目だ。近づいて行くほどにハッキリと彼らの雄叫びが聞こえてくる。

そこは奇妙な雄叫びの発生源。

——「まだまだまだーっ！そんな事で神に祈りが届くと思
うなーっ！」

——「ナニー、わしはまだ行ける、まだ行けるぞおおーっ！
」

——「俺だってまだだーっ、もっともつと捧げるんだーっ！」

——「「「「「我らがダラカーチ神に、真の祈りを見て頂くん
だあああっ！」「」「」」」」

今俺の目の前に隠す事無く惜しげも無くさらされているのは、健康的な薄らと赤い地肌。

それが更に日に焼け、太陽の光を受けてキラキラと光輝いている。

躍動感に満ちあふれ、力強く動くその瑞々^{みずみず}しい肢体っ。

「「「「「ウオーおおおーっ」「」「」」

地を震わさんばかりの雄叫びが辺り一面に響き渡るっ。

——っはいっ！

「「「「「サイドチェストーっ　レフトっ！」「」「」」

身体がしなり掛け声とともに鍛え上げられた上腕二頭筋が、これでもかっというほど盛り上がる。

見せつけるようにグツと身体の前面に押し出された筋肉の塊。

強調された太い大腿二頭筋。

——っはいっ！

「「「「「ダブルバイセーッスっフロントおおおーっ」「」「」」

さらに次々に掛けられる声と共に太い筋肉で覆われた手足が澀みなく数々のポーズを決めていく。

正面を向き見せつけるようにグツと反らされた分厚い筋肉で覆われた胸板。

これでもかっという程くつきりと六つに割れた腹筋。

両腕は肩の高さで水平に折りたたまれ、上腕二頭筋と前腕には力

強く盛り上がる筋肉の塊っ！

——っはいっ！…………

…………うん。もう俺、帰りたい。

彼ら鬼人族の神への祈りとはすなわち、神の為に磨き上げた己の肉体を神に指し示す事。

つまりこの暑苦しくも鬱陶しい、肉体の讃歌こそが彼らの祈り。

「あー、そこのお前ら、ちょっとその暑苦しい祈りをやめてこっち来いっ」

ヤメテヤメテーっ！ 一斉に見るのヤメテーっ！

揃ってボーシングのまま身体向けないでーっ！

揃って歯を”キラリ〜ん”のオブションもいらなからヤメテーっ！

俺を引き摺り込まないでーっ！

「おお、小童こわっばではないかつ。なんじゃ、わしらと共に神に祈りを捧げに来たのか。良い心掛けじゃ、歓迎するぞっ」

黙れファীগス。その口を閉じろ。

「隊長っ、真ん中にどうぞー、遠慮しないでー」

遠慮じゃない。ウェイン、ありがた迷惑という言葉を学べっ！

「神に見てもらうんだから、そんな無粋なもの脱いで脱いで。神の前では隠しだては無用だよー！ 身に纏うものは”コレ”一枚さっ」

俺を下から見上げて服を剥はごうとするのは、顔だけ美少女エリアス。

よせエリアス。お前のその顔にその下のモノは凶悪すぎる。

無駄だから諦める。そんな美少女顔の潤んだ瞳にも俺は騙されな
いっ！

俺をまさぐるそのゴツゴツとした感触は、どう考えたって男の手
っ！

ギヤー、やめろっ、遠慮じゃねーっ、俺はまだ、キョイカラダデ
イタインダーっ！

ヤメテヤメテ ヤ・メ・テーっ！

必死に抗う俺の目の前、一面に広がっているのは見たくもない暑
苦しい筋肉の海。

そんな中で小さいくせにイヤに存在を主張しているのは、鬼人族
たちの大切なところを覆う小さな小さな一枚の赤い布。

その布の名は『ふんどしっ！』

鬼人族の大事な大事な上の角は、強力を発すると真っ赤に染まる。だったら大事な大事な下の角も、真っ赤な布で大切に覆わなくっちゃっ！

ハッキリ云って多民族にとっては、全く一欠けらもわからない理屈で彼らは生きているっ！

彼らと他の種族の間には目に見えない、深い深い溝がある。

なのに何故か彼らは気付かない。溝の存在にすら気付かない。

持ち前の気にしな〜い性格により、彼らは全てをあっさり気楽に乗り越える。

ああ、なんて羨ましい。

「小童どもがー、ふんどしなんぞ晒しおって恥ずかしいと思わんのかっ！ この恥さらしどもがっ！」

おお救いの声がつ！ 横手から怒鳴りこんで来たこの声はファーガス。

ああ、ファーガス。そうだね。恥ずかしいよね。助けてくれるんだよね。

傭兵隊暁が誇る二大巨頭の一人。鬼人族隊員最年長、暁でも最年長。

自慢にしているものは頭に生えた二本の角と額に生えた一本の角。鬼人族の中では一本角と二本角は沢山いるが、三本角は珍しい。

彼はその自慢の角の手入れを毎日毎朝欠かさない。

必ず毎朝キュキュツと磨いて、額から生えた自慢の角に最後の仕上げに結ぶもの。

それは角の赤が綺麗に映える緑のリボンっ！

年齢を超越したこの老人は、普段は全く人の話を聞かない迷惑この上ないクソジジイ二人衆のうちの片割れ。

その存在がこれ程頼もしく感じるなんて、初めてだーっ！

俺が期待をこめた眼で見つめる中、そのファীগスの口から紡がれた言葉は……。

「鬼人族伝統の祈りは、『おぱんっ』でと決まっておるのじゃーっ！
」

ああ、俺、終わった。

またしてもわけのわからん理屈を……………。

叫んでいるファীগスが身につけているのは、おぱんっ一丁ぶらす頭にリボンが一つ。

見せつけるようにぐいつと反らし、その存在を主張する。

おぱんつの色は当然、赤。

んっ？ なにやらグラデーションが付いている気がするんだが…
…。

おー、あれはもしかや絞り染めかっ！ 見えない所でこだわりのお洒落。

やるな。流石ファーガス年の功っ！

はっ、しまった。見たくもないものをマジマジと見ちまった。

違う。違うんだっ！

俺はあんな所をかぶりつきで見るとな連中とは違うんだっ、俺は被害者だーっ！

「えー、ファーガス様。もうパンツは時代遅れですよー。やっぱり今は禪ふんどしですよー」

何を言っているエリアス。そんなものに時代を求めるな。

「そうそう。このヒラヒラするのが、チラリズムって言って」ソッ
ル」らしいしー」

よせウェイン。お前のその認識は絶対にどこかが大きく間違っている。

「…………今はもう、ふんどしの時代ですよーっ！」「…………」

お前達、全員”ソレ”で時代を語るなーっ！

もう、いい。もうやめて。お願い、俺をかえして。

俺を、俺の常識の世界に、とつとと、今すぐ、速攻で、か・え・せえええーっ！

「待て待て待てっ！ ムツキーども、俺は忙しいっ！ まっまた今度話そう。なっ！」

必死で俺は態勢を立て直し剥^むかれかけている服の端を握りこみ、全力で囲みを抜けるべく抗うっ。力でこいつらとやり合っても……負けるっ！

考えろ、考えろ俺っ！

「…………？ むつきー？」

やつらが首を傾げる。しまった、つい本人たちの前で心の声がダダ漏れたっ！

いつもは心の中で呼ぶだけで、今まで声に出したことは無かったのにっ！

「あー、その、ムキムキだから、ムツキー……………」

……………終わった。衝撃に言い訳を考える暇もなかった。

一瞬で諦観が俺を支配する。俺、次の朝日は見れるかな……………。

ムキムキどもが顔を見合わせる。

一瞬の沈黙。一気に、全開で……………、つつっにつぱーっ！

「……………」

何故ちよー笑顔？　そして一斉に

「…………」　ウォーつつっ！！！！　「…………」

吠えないでーっ

「流石は我らが隊長じゃっ！　わかっておるのうっ！」

痛い、痛いから叩かないでっ

「俺たちの筋肉をそんな風に讃えてくれるなんてっ、嬉しいよー」

いや、讃えてないからっ

「やつぱり一緒に祈りましょうっ！　そんなに僕たちを理解してくれてる隊長の祈りなら、きっと我らがダラカーチ神も御喜びになりますよー」

やめて、お願い。服を剥がないでーっ！

……拝啓、父さん、母さん。思えば遠くまで来たものです。でも俺は何とかやっいきててますから心配しないで下さいね。

第17話 ムツキー隊 敬虔なる祈り（後書き）

………違う、違うんや。

わてのせいやない。シリアスのせいやっ

わてが壊れたんはっ、全部全部シリアスが悪いんやーっ！

大変失礼致しました、閑人です。

多分いると思われる（希望的観測）女性読者様へ。

今回色々と登場いたしました表現に関してですが、多分、これが最低ラインかと思われます。

これで耐えられる（？）方は今後もお読み頂いても問題ないかと思われまので、安心して（？）お読み頂ければと思います。

今回の表現を御不快に思われた読者様。申し訳ございませんが、今後も似たようなものが登場する可能性がございます。自信があります。誠に残念ではありますが「申し訳ございません」と言う事で出来れば今後ともお読み頂ければとてもとても嬉しいです。では失礼致します。

第18話 東の市で

太陽も中天をとくに過ぎた時刻、砦のすぐ横には砦によって大きな影が出来ている。

鬼人族達が太陽の光を一身に浴びて祈りを捧げている場所とはほぼ逆の位置。大きな日陰になったそこで暁の隊員たちは集まり、思い思いに過ごしていた。

何故か普段はディーンと常に共にいるはずのジークが、その影の一層深くなる所で毛繕いをしている。

そこへヨタヨタと近づいて行く人影が一つ。

その人影、何故かゲツソリとやつれた面持ちのディーンが集団の中の一人へ向けて声をかけた。

「……グレイグ。ちょっと買い物行くから、荷物持ちに何人か連れて付き合ってくれ」

何やら疲れきった声のディーンに、グレイグがのんびりと首を傾げる。

「構わないけど、ウェイン達はどうしたんだい」

荷物持ちとなると一番に出番があるのは鬼人族集団だろう。素直

にそう考えたグレイグがディーンに問いかける。

ディーンはポロつと出てきたその名前に顔を強張らせて、

「…………聞くな」

目を逸らせて一言。その場には何とも言い難い空気が漂う。

珍しくがっくりと肩を落とし、項垂れているディーン。その様子に遅まきながらも聞いてはいけなかったのか、とやっとなついたグレイグは何かないと話題を探す。

「あー、そう。何人ぐらい連れて行くのかな。何を買うの？」

その声にディーンは顔を上げ現実に戻ってくる。そう、買うのは食材っ！

生気の蘇ったディーンを見て、話題の選択は正しかったようだと言ったグレイグはホッと胸をなでおろす。

「ちょっと、明日からの食糧をな。今回は現地での料理はあんまりしねえから、少し積荷の予定を変更する」

ディーンのその言葉を受け、臨時隊員を除く暁の隊員たちの中にひそかな緊張が走る。

ディーンが料理をするか、しないか。

それは隊員たちの間では仕事の危険度を指し示す、一種のバロメーターとして浸透していた。

しかもこのバロメーター、かなりの高性能だったりもする。

ディーンは隊員たちの間に静かに流れる緊張には気付かず、連れて行く隊員を選び出す。

「ええと、グレイグとマドックとオズワルドでいいか、それにハーディーも連れてくか」

ディーンが選んだのは竜人族が三名と人族が一名。

力自慢というとまずぶつちぎりで鬼人族が挙げられるが、その次に来るのが竜人族。もちろん一位との差は比べるまでも無く、でかい。

その後は人族と獣人族がどっちつかずにいて、かなり下に翼人族がくる。

「だったら、あたいも行くよ。暇だしね」

ディーンの横から声をかけてきたのは、やはり竜人族のラビエンヌ。女性であっても人族の一般男性よりも力がある。

燃える炎の様な巻き毛を持ったこの女性、気風が良くて頼りがいのある姉御肌。性格を表す様なキリッとやや吊り上がった眦が美しい。

三十代半ばながらも竜人族は他の種族よりも寿命が長くゆつくりと歳をとる。成人する年齢も他の種族の十五歳に比べて十八歳とやや遅い。その後の肉体的成長も格段にゆっくりとした物になる。

その例に洩れずラビエンヌの姿も未だ二十代前半にしか見えなかった。

そのサバサバとした性格や美しい容姿も相まって周りの傭兵達の間では、表に裏にかなりの人気を持っていた。しかもどんな男に声を掛けられても靡いた事^{なび}が無いとあっては、我こそはと思う男達の間ではその人気も高まるばかりである。

そのラビエンヌが声を掛けながら、スツとハーディーの横に寄り添った。ハーディーはまだ隊に入ってそれほどたっていない。ラビエンヌは剣も魔術もまだまだのハーディーに剣の稽古を付けている。言わば師匠と弟子の間柄。

暁には本来竜人族が五人いるが残る一人はここにはいない。まあ残る一人、シリルがどこにいるかは予想が付く。彼は蝶。常に花を求めてひらひらと舞っている。

どこかに舞ったまま帰って来なくても、一向に問題は無い。……出来れば戻って来ない方がいい。

ディーン達がそうして固まって話していると、何やら食べ物匂いでも嗅ぎつけたのか、ジャンとアドルフィーネがひょっこりと顔を出す。

「隊長、ずるいっすよ。俺に黙って買い食いに行くなんてっ！」

ジャン、お前の耳はどうなっている。買い食い、じゃなくて糧食の調達。その場で腹に入れてどうする。

ディーンはそう思いながらヌルイ視線をジャンに送り、もうこいつはどうしようもないと一つ頭を振って諦める。

「たいちよー、私も行きたいなー」

駄目だと言われるとは露ほども思っていないだろう、にこにことした顔でフィーもディーンに強請^{ねだ}る。

フィーの羽は白い。おまけにその羽には光沢がある。ダーヴィツトの羽とは大違いだ。

翼人族の中でもかなり美しい部類に入る羽を持つフィーは、町に一人出る事をディーンによって禁止されている。

フィーも一人の傭兵として戦場には何度も出ているが、どちらかと云うと実際に戦闘をするより補佐的な役割が多い。戦い方も弓を使つての遠距離からの攻撃で接近戦闘は苦手だ。

種族的にも非力な事はわかっているで、ディーンによる一見理不尽にも思える言い付けにもちゃんと納得している。

フィーは空の散歩ならば好きなだけ行けるが、地面に足を着けてのそれはあまり行く機会が無い。だから例え荷物持ちでも嬉しいらしい。

もちろんそんな事情は隊員達にも周知のことなので、結構頻繁に隊員たちからも声がかかる。それでもやっぱり見るもの全てが珍しい年頃のこと、町に出るだけでも楽しいのだろう。

ちなみにディーンによる単独外出禁止令はフィーだけでアドルフ

は放置。彼は風の魔術を使えるので、一瞬隙をついて空に逃げるく
らいの事は出来るだろうと判断されている。

なんだかディーンが思っていたよりも人数が増えてしまった。今
回は用意してある分を元に多少入れ替え買い増すだけなので、六十
七人分とはいえ流石にこれほどの人数はいらないだろう。

ディーンはすでに買ってある食糧を頭に思い浮かべつつ、今日買
う食糧の量と連れて行く人数を計算する。

「じゃあ、マドックとオズワルドは今回はいいや。グレイグとハー
ディー、ラビエンヌにジャンにフィー、ついでにアドルフも行つと
くか？」

フィーに遅れて顔を出したアドルフも入れて、全員で七人。それ
だけいれば充分だろう。買った物を入れる為の皮袋を手に手に持つ
てぞろぞろと日差しの中へ歩み出す。

スルリと横に並んだジークをディーンは裏切り者を見るかのような
目で一瞬睨んだが、そもそもジークは常に裸(?)だ。睨まれて
も困るだろう。

このファーサラの町では十日に一度の割合で町の東の広場に市が
たつ。市といっても大きな町とは比べようも無い規模の小さな物だ

が、それでも近隣からは商隊もやって来る。

この時で無いと買えない様な品々や食材が、広場に広げられた露天に所狭しと並んでいた。ただやはりこの夏の日照りの影響か、食材に関しては新鮮な野菜はほとんどなく変わり映えのしない日持ちのする物が並んでいる。

あちこちで品定めをする人の声や、店主との値段交渉をする声が広場を賑わ^{にぎ}していた。

別に人にぶつからなければ歩けないほどの混みようではないが、それでも広場は人の声と活気にあふれている。

ディーン達も例に洩れず、品を確認したり冷やかしたりして食料品を中心に見て歩く。

田舎出のハーディーやフィーたちが楽しげにあちこちをフラフラと彷徨い、それをジャンとラビエンヌが何だかんだと世話を焼いていた。

なかなかの面倒見の良さを発揮したジャンだが、その手には既に肉の焼き串が握られている。

そんな様子を見守りながら、ディーンやグレイグが後ろからのんびりと追いかける。

そんな中で一際賑わっている場所を覗きに行くと、何やら見知った顔がある。以前暁を護衛として雇っていた商隊の面々がせっせと客を捌いていた。

「よう、バルトのおやつさん。奇遇だな。景気はどうだ」

ディーンはその中の一人へ気安く声をかけた。

「ああ、これはこれはディーン殿。いらつしゃいませ。まあ、それなりでございます。どうですか、何かご入り用な物は」

「ああ、今のところは用意していた分です……にかなりそうだ」

「左様でございますか。それはよう御座いました」

如才なく受け答えしているのはこの商隊を取り纏めているバルタザール。

五十歳ほどの獣人族の男性で、お尻では細い尻尾がゆらゆらと揺れている。彼は猫属の男性で今回は十一台もの馬車を束ねていた。

バルタザールの商隊で働いている者も皆獣人族のようで、それぞれ違う形の耳や尻尾が揺れている。こういった商隊や商いをするもの達には比較的獣人族が多く、この広場を見渡しても商人の半数以上が獣人族のようだった。

普段これ程の数の馬車を連ねた商隊がこの町に来る事は滅多に無い。だからか今もこの商隊の周りには市に來たお客で大変に賑わっていた。その賑わいを横目に眺めながら、

「俺たちは後六日ほどここで仕事をしていくが、そっちはすぐに移るのか」

「いえ、それが……。」

何やら言い淀むバルタザール。ディーンは首を傾げて続きを促す。

「どうした。何か問題か？」

「それが問題と言うほどでもないのですが、ミシエルが体調を崩しましたね。しばらくこの町に留まる事になりそうなんですよ。ああ、体調を崩したと言っても大した事はなさそうなので、どんなに延びても精々十日程の事ですょ」

「へー、十日ね。それでも商隊にとっちゃ結構大変なんじゃないか。まあ、お大事にな」

商隊は常に次の商売地を求めて移動する物。商品は寝かせていても金にはならない。こんな小さな町に十日も留まる事は本来であればあり得ないのだ。

「ええ、ありがとうございます。ああ、ディーン殿。もし商隊を動かす時期とそちらが仕事を終えられる時期が重なりましたら、また商隊の護衛をお願いしてもよろしいですか」

「ああ、もちろん大歓迎だ。しばらく仕事で留守をするが多分七日後には一旦町へ戻って来るよ。そっちの宿に覗きに行くから、その時におやつさんがまだこの町にいたらよろしくな」

ディーンとバルタザールの間で、賑やかな周りの人の声に負けじと大声で交わされる言葉。

何もおかしい物など無いそれが人で賑わう市の中、お客を捌く商人やその商人との駆け引きを繰り広げる人々の前で交わされた。

その場を離れるディーンとバルタザールの視線が一瞬だけ鋭く絡み合い、どちらからともなく逸らされた。

そしてそれも人込みの中、気づく者無く紛れていった。

第19話

鍛錬場での訓練

前編

そこはファーサラの町の南端、砦の横に設けられた兵士の為の鍛錬場。

兵士たちが辛い訓練に耐え、日々己が身を鍛える場所。

時には罵声が飛び交い、時に友情が芽生える、そんな場所。そんな兵士たちの日々の営みをこの地はひっそりと見つめ包み込み、兵士たちの血と汗と涙をその身に刻んできた。

そんな鍛錬場に、この夜も一人の男の激しい怒声が響き渡る。

「ちっがーうつ！ 何度言えば分かるんだ。全くなつてないつ、もう一度やってみろつ！」

既に日は地平線の向こうに僅かに残るばかり。ほんの少し目を離せば、すぐにその光も消え去るだろう。

辺りには幾つか作られた焚火がその炎を周囲になげかけ、日の光よりも焚火の炎の方が明るく見える。

怒声の主はディーン。

傭兵隊を率い屈強な男どもを己が意のままに従わせる、隊長。

その彼が昼間の鬱憤^{うつげん}を晴らすかのように、隊員達に向かつて声を張り上げる。

日も既に落ちようとしている刻限にもかかわらず、ディーンの声を受け必死に腕を振る隊員達。

その様子を満足気に眺めながらディーンは一人一人を細かく指導する。

「違う違う、腕の振りがなってない。もっと素早く、大胆に。押しつぶすんじゃない、空気を含ませるんだ。何度も同じ事を言わせるなっ！」

ディーンの容赦ない指導の元、それを振る姿は傍から見れば最早堂にいったもの。彼らはディーンの目指す高い理想を実現すべく、今日もディーンの前で一心にそれを振る。

「そこっ、火力が落ちているぞ。そのぐらいの持久力が無くてどうするっ！ 魔術は数をこなせっ、実際の炎を見ろっ、熱を感じろっ、目に焼き付けろっ、そして再現するんだっ！」

火力は強火で、一気にサツと火を通す。腕をしならせれば中身が上に飛び出して、それは綺麗に弧を描く。もちろん着地も当然それの中。

手首だけで振るな、身体全体で振るんだ。腰だ、腰を入れろっ！ というディーンの指導の意味が身体でわかったのはいつの事だったか。

ディーンの前で熱い指導の元、隊員たちの手により速く作れて腹にも

たまる『チャーハンもどき』が着々と大量に作られていく。

いかなディーンといえども仕事中ぐらいは時間のかかる料理は自粛する。

この『チャーハンもどき』、材料は何かというと主なものは果実だ。

ここにルダシェーンという実をつける木がある。この木は雑草のように遅しく、生息する地もあり選ばない。

生息する土地によって背が異常に高かったり、低かったりと微妙な生態系の変化が見られるから、きつと順能力に優れている種なのだろう。

その木にはルダの実という果実が実るが、なんというかその見た目は人の頭ほどあるザクロの実。色は緑。

その分厚い殻をパカツと割ると、中を埋め尽くすようにびっしりと生えているのは米もどきっ！

精米済みの白米っ！……ならぬ紫米。まあ、色など些細な問題だ。

なんとも食欲をそそる色だが試しに炊いてみるとその味、触感はいかに米そのものっ！

ディーンは初めて自分で炊いたルダ米を食べた時、最早色などと

うでもいいっ！ とそのルダ米を抱きしめてむせび泣いていたとか、いないとか。

ガルディアスには今現在幾多の人族の国が存在するが、ほとんどの国で主食として食べられているのは主に肉とパンの組み合わせ。

今までにディーンが渡った国の中でたまにパン以外の物が好まれている国や地域もあったが、大概の国では概ねこの組み合わせが多かった。

ただごく狭い地域と、なぜか翼人族にはこのルダ米もといルダの実を好んで食べる食習慣があるらしい。

ディーンはその理由をルダの実が木の上の方に張り出した枝に成ることと、あまり翼人族が戦闘能力に秀でた種族ではないことによる需要が、翼人族とルダの実を結びつけたのではないかと考えた。

そう考えたらスッキリしただけで本当のところはわかっていない。

他の地域ではルダの実をただ『炊く』という文化は無いようで、ディーンが他の地域で見かけた物はルダの実をリゾットのように調理したものが主だった。

ディーンは好んでこのルダ米（正式にはルダの実というが、ディーンの中では既に『ルダ米』が正式名称となっている）を使用するが、この実は殻に包んだまま保存すれば一年でも保存でき腹持ちもいい。

ただディーンが惚れ込むこのルダ米にも欠点はあって、殻のまま持ち歩くとかさばる事とその重さだ。

毎日が旅とたいして変わらない傭兵隊にとって、致命的ともいえそうなこの二つ。そのはずだったがディーンはそれを克服すべく、せつせと実験を繰り返し続けた。

その涙ぐましい努力の結果、ルダ米は殻から取り出しても光に当たったり水に濡らしたり高温多湿な地域に踏み込んだりしない限り、暗所で保管すれば一カ月くらいなら十分に持つ事を突き止めた。

その程度の事、とづくにわかっているだろうと言っなけれ。

まずルダ米にはそれほどの需要が無い。

そもそも生息域を選ばない為、商隊での輸送距離もそれぞれの国内での流通に留まる。わざわざ殻を外して持ち歩かなければならないような物でもなければ、別に無くて困るような主食でもないのだ。

ディーンのためめ日々の努力が実を結び、導き出された保存期間。それだけあれば殻を外して中身だけを持ち歩けるから嵩が減る。^{かさ}

重さに関しても、重ければ重いほど喜ぶ変態……ゴホ、ゲホつ、まあ、なんだ、うん。解決することに成功した。

こうして暁の隊員たちはディーンにより着々と、行く先々の国の料理とディーンの知る料理を融合させた『ディーン流食文化』を叩き込まれている。

ディーン流食文化、それはただ単に味だけを追求した物では無い。

ディーンは傭兵として赴いた国々で、その土地に根差した郷土料

理をせつせと学ぶ。

だがディーンにとって料理を学ぶとは、その料理一品だけを知れば良いという付け焼き場な物では無かった。

まずディーンが料理を学ぶ際にとっても大切にしている事柄。

それは土地に根差した郷土料理というものは、その料理を生み出し育んだ土地の気候風土がそれに多いに影響を与えているものだと云う事実。

例えば人が住むには過酷な極寒の地や、砂漠を有するような酷暑の国ではただそこにいると云うだけで体力を消耗する。そのような国々では濃厚な味付けに、香辛料の利いた栄養価の高い料理が好まれる。

それがどんなに美味しい物だとしても、それをそのまま穏やかな気候の国へ持って行ったら、それは栄養過剰となるだけだろう。

その地が内陸部であればどうしても乾物系のものが主流として使われるだろうし、気候が暑ければ香辛料が発達しそれは料理にも多く使われる。

なぜ暑ければ香辛料が多用されるのか。それはそもそも香辛料というものが、食材の臭み消しや発酵保存品として優れているからだ。

ここに交通の要所として栄えている国や都市があるでしょう。そこにはきつとありとあらゆる人や物が集まり、文化の融合がなされることがだろう。そしてそういった環境では文化の入り混じった新し

い料理が生まれやすい。

行く先々で目にするその土地ごとの名物料理とはすなわち、その土地で安価で大量に手に入るものを利用していかに有効に大量に売り捌くかを考えて編み出された物が多い。

その土地で大量に手に入る、旬の食材を利用するからこそその名物料理。それを他の土地で作る事に意味はあるのか。

酒一つとっても比較的温暖な涼しい気候を持つ国ではさっぱりとした酒が好まれ、逆に暑い気候をした国ではそれでは物足りない。暑い国ではトロピカルで濃厚なスムージー的なものが好まれる。

食材一つとって見ても、それには体を温める効果や逆に冷やす効果を持ったものもある。郷土料理の多くはその土地その土地でとれるそれらを上手く利用し、その土地の持つ気候風土に合わせて取り入れて行ったものが多い。

それらは全てその土地ごとの気候風土に人が適応しやすいように長い年月の間に考えられ、培われていった先人の知恵の結晶。

ディーンにとっての料理とはただ美味いだけではなく、その料理の生み出された背景を学び人の身体への影響も考えて当然の物だった。

そんな高い理想を掲げるディーン。

本人にとっては至って当たり前前の事だが、周りから見ればそれはうんざりするほどに高い。

そんなものを頼むから他人にまでは求めてくれるな。そう切に願う暁の隊員たち。

彼らはディーンと違って美味ければそれでいい。腹にたまればそれでいい。もつというなら腹減った、飯を食わせる。その一言で五分以内に飯が自動的に出て来るのが理想的。

こんな言葉はディーンの耳には入れられない。本音と建前、なんて素敵な言葉だろう。

そんな彼らは今、ディーンの監督の元鍋を振る。

ディーンの目の前で鍋を振っているのは暁が誇る精鋭、魔術部隊の隊員たち。彼らは日々、ディーンによる厳しい訓練を課せられていた。

もちろん、魔術訓練では無く当然ながら料理訓練だ。

彼らが不幸にもディーンの目にとまり、栄えある調理担当補佐官の役を拝命することとなったのには理由がある。

魔術師であれば鍋を筆頭としたディーンが愛してやまない調理器具をどうしても持ち歩けない場合でも、それを魔術でどうにかしてしまえるし火も自前で出せる。

素晴らしいっ！

どこまで行っても魔術を便利な調理器具としか認識しないディーン。そんな彼が一番上にどっかりと座りこむこの暁、そんな暁の魔術部隊がまともであるはずがない。

唯一まともと言えそうな者はカイト、ただ一人。

彼は他の隊員たちとは違い、ディーンによる魔術師教育を免れた幸運なただ一人の男。彼は暁に入る前からすでに『魔術師』だった。それが他の暁の魔術師たちとの大きな違い。

今暁にいる魔術師たちはカイトを除けば皆、入隊当時は魔術師では無かった。それを潜在的な魔力量を調べ、一般的な魔力を持っている者を全て魔術師として教育したのがディーン。

育てた理由が魔術師たちを己が欲望の為に使おうと画策していたからだとしても、例えばその欲望の方向性が人には理解出来ないほどにおかしな方向にねじ曲がっていたのだとしても、育てた事は歴然とした事実。

そうしてディーンの手によって育てられた魔術師たち。彼らは魔術師としては大いに立派に育った。ただしその思想においては、育てられる過程においてディーンに毒されていった事は否めない。

……………なんて気の毒な。

第19話 鍛錬場での訓練 前編（後書き）

閑人です

7/15短編置き場を立ち上げました。

短編置き場には、何をどうやったって本編にからまないモノをポコポコ置いて行く予定です。数は少ないです。今の所、ほとんどは本編の第二章に置く予定ですが、ごく一部入れようのない物が……。えっ、なんでそんなわけのわからない短編があるのかって？

趣味ですっ！

第20話 鍛錬場での訓練 後編（前書き）

切る場所が無かったので少し長めです。

第20話 鍛錬場での訓練 後編

そもそも魔術師が胸の内に抱く『特権意識』はかなり強い。

それは様々な要因が絡み合い、長い年月の中で人の意識に刻みつけられたもの。その数ある要因の中でも大きな理由として上げられるものが三つある。

まず第一に挙げられるのは、魔術を使える者が基本的には人族しかないという現実。

この世界の種族の頂点に立つのが人族である以上、その人族のみが魔術を使えるという現実が人に魔術を特別なものであると認識させる。

そして第二に挙げられるのが、魔術によって具現する強大なる力。

この世界は常に魔獣の脅威に怯えている。一年の内に何度も魔獣たちが国の境に押し寄せ、それを払い除ける力が必要とされた。

魔術という技術が開発され、進歩してきた歴史の背景。

そこには度々ある魔獣との攻防が大きな役割を持つ。

いかにして襲い来る魔獣を倒すか。過去の魔術師たちが追求した魔術の形。

自らが持つ魔力を武器として使う為に、どうすればより効率的に魔力が使えるのか。今よりも更に殺傷力を高める為にはどうすればいいのか。

人族の成す魔術とは、魔力を武器としてどのように使うかを追求し開発されてきた力なのだ。

魔術は国にとって強力な剣であり、強靱な盾でもある。

常に魔獣との攻防に明け暮れる国には力の象徴が必要とされ、魔術師はそれに打ってつけの存在だった。

本来魔術師の持つ特権意識はいついかなる時も魔獣の襲撃から自らの国を守って見せるという、使命感の裏返しとしてあるものだった。

そして最後。第三に挙げられるのが、魔術師を名乗る者の持つ環境。

人族は皆魔力を持っている。だがそれだけでは魔術師は名乗れない。人族の中でも『魔術師』を名乗れる者は一部の者だけ。

まず人族が魔力を魔術として使う為には、それを訓練する必要がある。そして魔力をより効率的に扱う為に必要不可欠な物が神言語の習得であるとされていた。

神言語とは人族の持つ魔力を操るのにもっとも最適なものとされ、その発祥は古代遺跡より見つかった石盤に記されたものが元になっていると言われている。

魔術師にとって重要な物。それは身の内に持つ魔力量の多さ。そしてそれと同じくらい神言語を意のままに操る能力が重要とされる。

この神言語の習得こそが魔術師が少数にとどまる最大の理由であり、大きな壁であった。

まず初めにことわっておくが、この世界の識字率はかなり低い。

貴族階級にあるものに限れば、一般的な文字の読み書きはほぼ十割の者が習得している。

ある程度裕福な環境にある者も、読み書きは学ぶ事が出来るだろう。それに親の見識にも依るが算数の基本、足す引くまでは教わる。中でも商人の子供であれば掛け算、割り算まで教えられるだろうか。

だがこのいわば上流階級と中流階級の一部の者を除くと、識字率など把握する事も出来ないぐらいに文字の習得率はガタつと落ちる。

この世界の人口は特権階級を下でを支えている農民階級の人口比率がグツと高くなるが、その階層の者たちが識字率を大きく引き下げていた。

それでも町であれば、書けなくともまだ読むだけならと云うものはそれなりにいる。

例えば傭兵ギルドであればそこで働くものは基本的に皆読み書きが出来るし、安価な値段で依頼の読み上げもやってくれる。

だがそこが村になれば精々一人か二人、読み書きが出来ればいい

方だろう。

文字の読める者の所に近く、の村から読んでくれと手紙が持ち込まれる事も珍しくは無い。その手紙にしても代筆屋がしたためた物である可能性も高い。

領主が御触れを出す際には必ずそれを読み上げるものがつく。この世界ではただの文字でさえ書けない者の方がまだ遥かに多いのだ。そんな中で更にその上の特殊な言語、難解な神言語まで習得するとなるとそれは非情に恵まれた環境にいる者でなければ無理というものだ。

もしくは人並み外れた魔力を有し、幼い頃にそれを見いだされて魔術師の弟子として育てられたものだけだろう。

それが出来る恵まれた環境にいる者だけが魔術師になれる。

魔術師になつたから特権意識が芽生えるのではなく、そもそも初めから上流階級にいるものが更なる特権を求めて魔術師になる。

だから魔術師の大多数は初めから特権意識の塊なのだ。

ではその中でもごく少数の、潜在的な魔力量を見込まれて魔術師として育てられたものはどうなのか。

悲しい事に生れた環境はどうあれ、育てられる過程に置いて師匠の思想は弟子へと引き継がれていくもの。

それに魔術師の交友関係はやはり同じ魔術師が多い。そんな中で

幼少のころから育てられれば自然と『魔術師』の思想へと染め上げられるものだ。

これがこの世界の一般的な魔術師の姿。

魔術師たちは自分の持つ魔力や扱う魔術を、その権威の象徴としてとらえている。一般的な魔術師にとってその権威の象徴ともいうべき魔力を料理ごときに使うなど、はつきり言って正気の沙汰とは思えない。

が、それをやってしまう男がここにいる。

云わずと知れたディーンである。ここでもまず問題となるのはこの世界におけるディーンの異質性だ。そもそもディーンの持つ感覚はこの世界の一般的な感覚とは隔絶している。

それは当然のことだろう。ディーンを形作る意識、それ自体はこの世界のそれでは無いのだから。

知識一つとって見ても現代日本で一般的に学んでいる知識の質は、この今のガルディアス大陸において賢者と呼ばれる程度には高い。まあ、それが全て身についているかは別の話でしょう。

知識に関してはどうしても誤魔化せるだろうが、誤魔化しようの無い物が思想的な物だ。

人の行動には無意識に物事に対する考え方、感じ方が表れてしまう。

どんなに上手く隠そうと、こういった物はどこかしら滲み出てし

まうものだろう。そして隠そうとするならまだしも、ディーンには隠そうとする意思が欠片も無かった。

ディーンの自我は強い。それは傍迷惑なほどに。

彼は世界が変わろうと、姿形が変わろうと、たいして頓着もしなかった。それによって自己のアイデンティティーが揺らぐ事も全くなかった。

そもそも彼は自分の欲求を満たすためとはいえ、常にはつきりと道を定めて日々を送っていた。

流れに身を任せ大多数の意見に迎合し和の中にいることに安心感を抱く国民性を持った国においては、彼はかなり特殊だったと言えるよう。

彼はひたすら料理の道を追求していた。

世界が変わろうと彼が彼としてある限り、彼のアイデンティティーが揺らがない限り、彼は周りなど気にせずただ己が道を突き進むだけ。

周りから見てその道がどんなに珍妙極まりない道だとしても、ディーンが揺らぐ事は無い。

そんなディーンはなにものにも染まりはしない。

彼は染める前から極彩色だ。

彼は料理人。

例えこの世界に置いて魔術を学べる環境に己が身を置き、魔術を己が手足の如く使って見せたとしても。

多くの魔術師たちが権力の象徴として見る魔術は、ディーンにとっては単なる便利な調理器具ではない。

そんなディーンには例えどんな環境に身を置こうとも、魔術師としての思想が根付く様な隙間は全く存在しなかった。

カイトがせつせとディーンに対し、魔術師の崇高なる義務と云う奴を教え込もうとしているがそれが実を結んだ事はない。

多分無理だろう。諦める。

カイトが教え込もうとしている物は、所謂いわゆるノブレス・オブリージユ。高貴なるものの責任。

カイトはディーンを魔術師として認識し、ディーンは自分をただの一料理人としてしか認識していない。カイトとディーンの間にある大きな認識の差。彼らの間には埋めようのない深い深い溝がある。

まあ、ディーンはいい。彼は料理人だ。きつとどこまでも己が道を歩いて行くことだろう。

ここで問題なのがディーンによって魔術師教育を施されてしまった魔術部隊の面々である。

彼らは望む望まないに関わらず、世間一般の魔術師からは思想的に隔絶された存在となってしまうた。本人達を見れば気楽に楽しそ

うにやっているから、かえって良かったのかもしれない。

暁にいる魔術師たちは入隊後に適性を見てディーンにより魔術を叩き込まれた面々だ。出身も云わば庶民。しかも傭兵になるような庶民。生活レベルは推して知るべし。

それでも魔術師になれば魔術師の常識に染まる物。

他の魔術師のように段々と気位が高くなっていくのではと思われがちだが、幸か不幸か彼らにとっての『魔術師』の基準はディーンだった。

最悪だ。

そう。この傍迷惑で、カイトが必死に叩き込もうとしている魔術師とは何かの教えを華麗なるスルースキルでサラリとかわし、我が道をひた走る男。

こんな男を魔術師の基準にしている面々に、一般的魔術師などという姿を求める方がおかしいのだ。

暁ではディーンを筆頭に世間的に見て珍妙なる魔術師たちは大変お気楽に楽しく毎日を過ごしているが、世間的に見て真つ当な魔術師であるカイト一人が常に胃を押さえて呻いている。

そんなカイトの胃痛のタネ、暁の魔術師の基準たるディーン。

そのディーンにとって何よりも重要とされる事柄。それは魔術が料理を作る為の役に立つか、立たないか。

世間一般の魔術師にとっては魔術という物が武器として進化してきた物だとしても、そんな事はディーンには与り知らぬ事。

ディーンにとって料理に使えない魔術に意味は無い。

ディーンにより着々と料理専用の調理器具として改良がほどこされつつある魔術。

改良なのか改悪なのかは判断が難しい。

その魔術には大きく分けると二種類の物がある。

魔術師の持つ魔力量に大きく左右されるが、何の準備もいらず即座に発揮できる創造魔術。

その中でも更に初級中級上級と分かれるが、一般的に魔術と云えばこれに当たる。

そしてもう一つが神紋魔術。

これは下準備や媒介となるものが必要だが、大きな威力を発揮する事が出来る。魔道具もこの神紋魔術によって作られ、神紋魔術は更に紋様魔術と紋章魔術に分けられる。

神紋魔術を扱える者は魔術師の中でも数が少ない。これを使いこなす為には複雑な記号と神言語を自在に操る事と、創造魔術で使う物とはまた別の魔力操作が必要とされる為だ。

創造魔術は魔力量が大きく物を言うが、神紋魔術は魔力量よりもその使い方が重要となる。

最低限、魔術師を名乗る為に必要なのは創造魔術の中の上級魔術を使いこなすこと。それ以下のものは『魔術師』を名乗る事は出来ない¹と定められている。

そしてディーンが暁の隊員に教え込んだものも、この創造魔術の上級までだ。

神言語とは複雑な発音と文字で成り立っている。

この世界の文字は例えるならばアルファベットの様な書きやすさ、簡易さを追求した表音文字。それに対しこの神言語は漢字の様に複雑な形をし、一文字一文字に意味が存在する表意文字。

創造魔術までであれば発音さえ正確に出来れば魔術が発動するが、神紋魔術は言葉の意味を知り自在に書けなければ刻む事が出来ない。

その為魔術師とは云っても、傭兵をしている魔術師は創造魔術までしか出来ない者がほとんどになる。いや、魔術師全体を見渡しても創造魔術までの者が圧倒的に多い。

神紋魔術の中でも上級の紋章魔術は、よほど適性に恵まれなければ扱う事が出来ないと言われていた。

ではディーンが隊員達に教えている創造魔術はどうか。

この魔術は自らの魔力で生み出すのが基本であり、いかに効率的に力を使うかによって更に三段階に分かれている。

簡単な方から順番に、魔造魔術、祈造魔術、略造魔術。だが一般

にはそのまま初級・中級・上級魔術と云われている。

誰もが通る一番最初の魔力の使い方。超初級編。

魔造魔術。

これは脳裏に思い描く物を魔力を使いそのまま具現化する。

人族ならば少し練習すれば使えるようになるこの魔術。自らの持つ魔力の塊を別のものに描きかえる、便利な便利なあらゆるものを生み出す技。

……… 一瞬だけ。

この世界における一番簡単な魔力の使い方、魔造魔術。

一言で言うならまさに、これぞ力技っ！

脳裏に思い描く物を魔力で作り出すとは、材料の何もない所に自らの魔力だけで物を誕生させるという事。そんな物が長く持つはずがない。

平均的な魔力量を持つ訓練をしていない人族が固形物を作り出せば、一瞬しか持たないしそれはすぐに蜃気楼の如く霧散する。供給する魔力が切れれば形を保つ事など出来ないのだから。

なにせ魔力はまやかし。力技で無理やり世界に夢を見せているに過ぎない。

必要とされる魔力量も描く物が気体、液体、固体と変化するほど

に多くなる。

一口に個体と云ってもその形状や使われている物質によっても必要な魔力量は異なってくる。

脳裏に思い描く物があやふやであればあるほど、その分も魔力で無理やり補うため必要な魔力が膨大になる。

炎などの姿かたちの定まらないものの方が自然とその作り出すものにも幅を持たせることが出来るのでその分消費魔力を抑える事が出来る。

克明に思い描ければその分必要な魔力は少なくなるが、物体を具現すればその間はずっとそれに必要な魔力を供給し続けなければならない。

供給する魔力量の操作に関しても、訓練しなければ必要最低量を供給し続ける事など至難の業だ。ムラのある魔力供給では無駄魔力がこぼれた分だけ損をする。

誰でも練習すれば出来るようになるが、誰もが遠慮する。なんとも使い勝手の悪い魔術。それが初級魔術である。

……そう、信じられていた。ディーン以外には。

魔力で作り出したものは存在しない夢幻。ゆめまぼろし供給する魔力が切れれば蜃気楼の如く消え去るもの。それはどんな魔術だろうと不変の法則。

この世界ではそう思われている。

ディーンの様^{……}に消えない水を作り出す事など、ありえないのだ。

……… 本来ならば。

この世の魔術法則に真つ向から喧嘩を売っているようなディーンだが、基本的に料理の際に暁の魔術師たちに使わせているのもこの超初級編の魔術である。

中級・上級魔術の優位性は神言語を用いて、いかに効率的に魔力を使うかにある。

魔力の無駄を出来るだけ省き、効率的に使うにはこちらの方が圧倒的に優れている。そもそも初級魔術の欠点を補う為に改良された魔術なのだからそれは当然のこと。

戦闘目的に改良を重ねてきたものなので、初級魔術のような汎用性には欠けているが料理用の火を扱う事ぐらいなら簡単だ。

それを押して何故ディーンは初級魔術を使わせるのか。

この使い勝手がいいのか悪いのかよくわからない初級魔術。実は細かな魔力操作の訓練には、非常に打ってつけなのである。

まずやる事なす事すべて自家魔力で補うため、気を抜くとあっという間に枯渇する。つまり如何にして必要最小限の魔力を、必要とされる時間注ぎ続けるか。

神言語の補助なしの為、魔力を全て自分で操作しなければなら
ない。

云わば上級魔術とは高速道路。行き先も信号も速度も気にせずただ車をブツ飛ばせばいいような物。

変わって初級魔術は一般道で信号にも子供の飛び出しにも気を使った拳句、カーナビなしで道路地図を見ながら車を走らせている様なものだ。気の使いようが全く違う。

魔術師たちは魔力を使っている間中常に神経を尖らせ、繊細で複雑な魔力操作を要求されるのだ。

非常に地道なこれらの作業を日々こなす事により、魔力操作に長けて来るし上級魔術を使う際にも生きて来る。

そうして日々、ディーンによって魔力で楽しく調理をさせられている魔術部隊の面々達。少なくともディーンは楽しい。

ディーンにとっては実物だろうが魔力で作り出そうが調理器具は調理器具。それ自体に優劣などは無い。

例え魔力が切れた後は霧散するような道具や炎でもその一時保てばそれでいい。どうしても調理器具を持ち歩けない時に使うそれは、いわば一回こっきり使い捨ての代用品。

使い捨てなのは魔力であって魔術師ではない。一応。

こうして魔力でクッキングを実行させられている魔術部隊。その彼らがディーンに申し渡されている言葉。

もし魔力を注いで道具を作った直後、魔力切れの状態の時に襲われたとしてもそれは最早運命。

潔く受け入れようっ！

魔術部隊にとっての最大の不幸。

それはディーンの冷静な指揮官の目が、戦闘時以外では決して開かれる事が無いという悲しい現実。

それはもう恐ろしいほどにピッタリと閉じていて、紐で縫いつけたのかと疑いたくなるほどにほんの僅かの隙間さえ無い。

目の前にいるのは『料理人』ディーン。

一点の曇りも無い悟りきった目で腕を左右に大きく広げ、その姿が表すものは、

『私は全てを受け入れます。だからあなた達も恐がらずに受け入れましょう』

ディーンに共に朽果てようと言われたも同然の魔術部隊の面々は、それ以来絶対に調理器具の所在だけはしっかりと確認するようになったという。

調理器具を自らが持ち歩くのではなく、それ専用の場所に格納し

ているからおさらだ。

魔力で出すのが炎ならばまだしも、確固とした物質である調理器具など作らされては魔力の枯渇は必至である。

一時期不安に駆られた魔術師たちが休憩ごとにその自らの命を左右する調理器具の所在を確かめようとして、鬱陶しがられて格納庫からひどく邪険に蹴散らされていた。

憐れ魔術部隊。魔術師がこんな扱いをされるのは恐らく暁ぐらいのものだろう。

暁では常日頃からディーンによる『魔術で簡単クッキング、調理器具製作実習』なる講座が開かれ、彼らは既に調理器具の現物を見なくてもその細部に至るまでを克明に思い描けるほどの特訓を受けている。

それはどうにか料理が出来るぐらいの時間は、調理器具を物質として存在させられるほどに。

今もディーンの指導の元、一心不乱に鍋を振る魔術部隊の面々。

彼らの手許、鍋の下、赤々と燃える炎は魔力で出した自前の炎。

彼らが鍋を振る向こうには赤々と燃える焚火の炎。実際の炎の上には別の鍋がかけられ、フィーと竜人族のラビエンヌを筆頭に何人ががせつせとスープ作りに勤しんでいる。

当然ながらそのスープには製造販売元『ディーン印』の、ディーンお手製『お手軽スープの元』が使われている。これはディーンの

手により常時三種類ほどが用意され、誰でも手軽に美味しいスープが作れるようになっていた。

現実の炎を背景に、自前の炎で調理をする魔術師たち。

これはディーンによって施される料理特訓の名を借りた魔術訓練。勘違いをしてはいけない。決して魔術訓練の名を借りた料理特訓ではない。

ディーンの情熱の前にはそのような大義名分など、不要っ！

料理の前に借りる名など、ないっ！

だが人生は何が功を奏するかわからないもの。

ディーンによる『魔術で調理実習 初級編』を日々敢行させられた結果、暁の魔術隊員たちはこと『炎』に対してだけは他の追隨を許さないほどの細かな精度と持久力を身につけた。

その結果、暁はいつの間にか巷では炎を变幻自在に操る『炎の魔術集団、暁』の異名をとり高い知名度を得るまでに至った。

知名度は高いがそれが高名か悪名かは、また別の話だ。

巷の人々がこの涙ぐましい隊員たちの努力を知れば、きっと涙することだろうっ！

だがディーンにとってはそんな評判などどこ吹く風。

デインはそろそろ料理ぶた……いや、魔術部隊への調理実習中級編への移行を虎視眈眈と画策し、魔術部隊の面々はそれをどうやって免れるか、日々水面下の攻防が静かに繰り広げられていた。

第20話 鍛錬場での訓練 後編（後書き）

閑人です。

短編置き場を作ったので『アド〜』を引っ抜いて一時的にそちらへ格納しました。

実は前節や後節にいろいろ書いてみて思ったんですが、閑話の場所がどうこう以前に

この閑人の『前節と後節』に『笑いのない長文』が

ドンっ！ と横たわってる現実に、そーぜつな違和感がっ！！

閑人、そっちにどーにも我慢出来ませんでした。というわけです。ついでに全体的に細かな整理をしてちよつとずつ色々弄りましたが、内容は変わっていないので読み直して頂く必要はないと思います。ではでは

追伸

今日は延々地の文で疲れたので、次回はライトに参ります。飴と鞭の使い分けが大切です。

えっ、意味が違う？

第21話 神への祈りとディーンの幸せ（前書き）

ディーン視点 一人称になります。

少々（？）長いですがお付き合いください。ああ、段々一話が長くなって行く！。

第21話 神への祈りとディーンの幸せ

ああ、ついに朝が来てしまった。

俺は溜息を一つつくと夏用の薄い服の上に装備を纏い、その上にフード付きのマントを羽織る。

もう夏も終わりだが外を歩けばまだまだ日差しが強い。上に羽織っているマントは外套の袖の中に引き込みマントのように羽織えるようにしたモノ。

このような外套は荷物を置いておくような拠点を持たない、旅暮らしの傭兵にはかなり需要がある。季節を考えると暑苦しいがこれが結構重宝する。

冬はそのまま毛布代わりになるし、雨が降れば幾つか合わせて簡易テントに早変わり。

水を弾くように加工してあるから雨の中フードを被れば雨具代わりにも使えるし、肩に羽織っていれば嵩張らない。戦闘中の負傷の際には包帯代わりにもなる。

ちょっと勿体ないし衛生面を考えるとやりたくないが、一先ず何でもいいから縛るものになった時には重宝するんだ。包帯があればいいけど、いつも荷物を無くさず持っていられるような保障も無いしな。

そうして背中に背負う荷物は必要最低限のもの。

身の回りを整える物と生活に必要な最小限のもの。それにどうにか数日間ぎりぎり生き抜けるだけの少量の非常食は身体の方、服の隠しに身につける。

まあ言っしまえばガチガチに塩漬けにした肉を、そのまま塩を抜かずに更に魔術で水抜きして薄く削ったものだ。それを湿気が入りこまない様に包んである。

当然ながら俺のお手製。

俺が他の塩漬け肉や干し肉を作る際に、ちょっと塩抜きの工程を省いて作った『永久保存食』。

そもそも肉つてのは塩漬けのままにしとくと更に熟成を続けちゃう。大体三十日もすれば塩漬け肉は絶品の味になるんだが、それ以上放置すると今度は段々味が落ちて来る。

この俺の目の前で、そんな事は断じて許せねえ。

それを止める為の塩抜き。

だがここで塩抜きしちまうと熟成は止まるが肝心の保存性が無くなっちまう。俺たち傭兵には致命的だ。

じゃあどうするか。

塩漬け肉が腐りにくいのは腐る原因の水分がほとんど抜けてるか

らだが、それでも完全に抜けてるわけじゃない。

本当に長期保存を考えるならこれを更に干し肉に加工して、完全に水分を飛ばしてやればいい。つまりは肉に塩漬け、熟成、一番いい具合に熟成した所で塩抜き、乾燥の工程を経験させてやればいいんだ。

初めに肉塊を塩漬けにする事で水分を取り除き腐敗の防止と殺菌を行う。そのまま熟成させればジワリと肉の旨味が引き出される。

塩漬けにしてから十五日もたてば、ちょっと削いでそのまま食える。

ああ、酒持ってこい。酒っ！

はっ、ダメだっ。まだ食べてはいかんっ！

ちなみに俺は塩だっってちゃんと作る肉に合わせて選ぶぞ。塩漬けや干し肉における味の決め手は塩だ。塩の旨味をしっかりと閉じ込めるからには厳選しなければな。

そう思っで内緒で隊の連中を魚の種類が豊富で綺麗だと評判の、海に面した国に引き摺って行った事もあるがちゃんと仕事もしてたしいいよな。

内緒だ内緒。

さて、肉は熟成の頂点を極めた所で塩抜きだ。これで味の崩壊を食い止める。塩が抜けると熟成も緩やかになるからな。

だが塩抜きの人に水に晒すと折角の塩漬け肉に若干の水分が戻り、元から残っている水分もある。この水分を奪う為に普通は風通りのいい日陰に干して、風で乾かしてカチコチの肉の塊にする。

だから干し肉。

普通であればこうだが俺の手には今、最高の料理道具がある。

魔術だっ！

本来なら三十日は干しておきたい所だが、俺たちがそんなに長い期間一定の場所に留まる事は難しい。だから魔術で一気に水分を抜く。

塩漬け自体は三日、余分に見ても精々五日もすれば水が出なくなるからそれ程問題は無い。それにこいつは魔術でやるよりじつくと漬けなきゃ上手くならないしな。

美味しい料理を味わうにはかける一手間を惜しんではいけないのだ。

この水抜きに使う魔術は、元をただせば体内の水分を操る拷問用の物。戦争や政争の為に道具として開発された対人用の魔術だ。

まあ、魔術の元をたどれば大抵その辺に辿り着く。

本来魔術って云うのは、生きている物の体内に対してはあまり繊細な術は施せない。この世界の生物と云うものは、生きているだけで何かしら外部からの魔力の侵入に対して免疫を備えているらしい。

先人達が研究を重ねて長い時間かけ、やっとの事で編み出したこ

の魔術。編み出したはいいがこの魔術、使える魔術師はごく僅か。おまけに本来の目的で使おうとすれば結構大掛かりな準備もいる。

今の所、魔術で出来る攻撃は外部攻撃がほとんどだ。

魔獣相手ならそれで充分なんだがな。

この魔術は”生き物”に使う為にやたらと複雑な記述術式を要求する物なんだが、まあ俺にはその辺の複雑な部分は関係無い。

なにせ目の前にあるのはブロック肉。

すでに死んでいる。

俺は本来なら一番必要とされる複雑な工程は全て引っこ抜き、開発された魔術の一部のみを改造して使用する。

だってこの魔術、生き物の水分を操るだけあって非常に繊細に水抜きが出来るんだっ！

これなら肉を傷めない。

最高だっ！

ありがとう先人達。

開発目的に関しては考えない。

こうして俺が多少の事には目を瞑り、精魂こめて作った干し肉。

干して無いけど干し肉。

こいつは薄く削って使う。包丁で切るんじゃないくて、削る。固いからな。

このまま食べても肉の旨味がギュツと凝縮されてて旨いし、いい出汁にもなる。だが、スープの具にするならジャーキーの方がいいと思うぞ。うん。

こうして作った俺のお手製の干し肉に湿気は大敵だ。ちゃんと持ち運ぶ時も冷暗所を作って入れてある。

大抵の肉はこうするが一部の肉は塩抜き工程を省く。それが今俺の服の隠しに納まっている肉だ。

これは究極の保存食。

恐らく保存にさえ気を配れば十年二十年は軽く持つはずだ。

ちょっと塩が利き過ぎだが仕方がない。

このままで口に入れるには俺の味覚から言つとちょっとアレなんだが……。

まあ結論を言えば本当に『生き延びる』事だけに限定すれば、これが一番軽く嵩張らず肉体を長時間生かすし塩分もとれて長い間腐らないって事だ。

食べる羽目にならなくて済むよう、祈るしかないな。

ああ、『祈り』か嫌な言葉だ。

俺はこれから始まる苦行を思い出し、重い重い溜息を吐く。

溜息ぐらい吐かせてくれよ……………。

折角上手く現実逃避が出来たと思ったのに。

ああ、俺は隊長だ。分かっている。俺がやるしかないんだ。

それにこの隊の中で、俺が一番彼らの存在を必要としている。

依存しているって言うてもいい。

彼ら無くしては俺の幸せはありえない。分かっているんだよ。彼らあってこそ、俺の幸せなんだって事はっ！

ああ、これは隊を纏めるものとして決して避けてはいけない事なんだ。

それがどんなに苦しく忍耐のいる道でも、もう進むしかない。

「さあ、ジーク。今日も一丁頑張るか」

俺は隣に佇み静かに俺を見上げるジークに一声かけると、勢いよく歩み出した。

さあ、気合を入れて行くぞっ！

「よし、ムツキー隊整列！」

昨日も集まった砦の前。

蛇足ながらこの部隊名称（愛称）はたった一日で定着した。

恐ろしきかな、奴らの肉きんこくに対する執着。

早朝まだ薄暗い中、俺は隊の皆が見守る前で鬼人族達だけをその荷物ごと整列させる。今日は昨日と違い野営道具一式とその糧食、多めに見積もって十日分を担いでいる。

半日彷徨って獲物がゼロでは用心深くもなるだろう。

—— じー

彼らを上から下まで、じつくりと舐めるように見る俺。

無言で見返す彼ら。

—— じーじーじー、じーじーじー。

しばらくの間、俺と彼らの無言の攻防が続く。そして……………。

俺は笑った。……………にこっ！
彼らも笑った。……………につぱー！！

その笑顔のまま俺は吠えたっ！

「野郎どもっ！ 奴らの荷物を一斉検挙ーっ！！」

—— ワラワラワラワラっ

俺の声を受け、一斉に鬼人族集団に群がる隊員たち。

彼らは果敢にも力だけなら他の追隨を許さないムツキーどもに群がり、くすぐり、手際良くその荷物を引き摺り落とし剥ぎ取って行く。

そのあまりにも慣れた手際が哀愁を誘う。

ああ、何が悲しくて早朝からムキムキを剥がねばならんのか。

お前たちの勇士を俺は忘れないっ！

「隊長っ、発見しました」

—— ゴロン ゴロン

「隊長っ、こちらですっ」

—— ゴロン ゴロン ゴロン

「隊長っ、こっちにもありますっ！」

——ゴロン　ゴロン　ゴロン　ロン

「「「「「おーっ、すげーっ！」「「「「「

ムツキーどもの背負う小山の様な荷物の中から、次から次に転がり出て来るその物体。

それは人の頭ほどもある大きな………石っ！？

無責任に遠巻きにしている他の隊員たちが、荷袋から次々に転がり出て来るその石を見てどよめく。

毎回のお馴染みの光景に、いい加減俺の忍耐も悲鳴を上げる。

「……お前ら、い・い・か・げ・ん・に・しろーおおおつつつ！
」

今回もまた早朝の薄暗い靄の中を俺の怒鳴り声が響き渡った。

ムツキー隊の抱える荷物は、多い。

はつきり言ってしまうえば彼らの持つ荷物は人のもてる限界に挑戦していると思う。逆にムツキー隊以外の者の背中に背負う荷物はかなり少ない。

必要最低限のもの。

必要最低限というのは何かあって隊からはぐれた時に、一人でも生きのびる事が出来るだけのものって事だ。

今カイト達が果敢に攻めているムツキーどもの荷物には彼ら自身の荷物の他に、俺の幸せを支える山ほどの食材、鍋を筆頭とした俺の愛する調理器具、その他諸々がぎっしりと詰まっている。

何故、そんな不公平なつて？ それはな……………。

「やめろー、やめてくれー。その”石”^{おもり}を捨てるなあー。その”石”^{おもり}は神への祈りを捧げるのに必要なのだあー」

「ああ、ダメだダメだあー。軽くするなあー。それは神への冒瀆だあー」

「まってくれ、まってくれええーっ。それは許してくれえー。こんなに軽い荷物では俺の”祈り”が届かないいーっ」

「わしは行けるっ。わしはまだまだ行けるのだあー。小童ども、その荷物もよこせえええー」

「……俺達の神への”祈り”^{おもり}をとりあげるなああーっ」
「……」

鬼人族達はいつでもどこでも身体を鍛える。

そう、隙あらばどんな時でも。

彼らは忘却の達人だが身体を鍛える事だけは忘れない。

……頼むから忘れてくれよ。

「あつ、隊長っ！ まだありましたー。はっ、こ、これは……。」

俺が出口のない深い深い思考の迷宮を彷徨っている中、遅れて声を上げたのはハーディー。

何やらズシッと重そうな五十センチ程の、ちょうど抱っこするのに良さそうな大きさの物を手に持っている。

「隊長っ、凄いです。バージョンが進化してますっ！」

叫びながらハーディーが重たそうに掲げ上げたそれ。……「冗談だろう？ それは……。」

「おっ、おっ、お人形です。今度はお人形に仕込んできましたっ！」

しっかりと腰を入れて見かけだけはなんとも可愛らしい”鈍器”を持ち上げるハーディー。

うん。ずっしりと重そうだ。あれで殴られたら逝けるな。……中身は何だ？

「……おーっ、すげーっ！ ……」

相変わらず無責任に感嘆の声を上げ手を打ち鳴らす隊員たち。そんな隊員たちの声をかき消す様に、

「ちっちがっ。それはわしの大事な大事な、淋しい独り寝のお友達

じゃーっ！
」

カーツと気合い一発。身体に群がる隊員たちを弾き飛ばし、ファ
ーガスが叫びながらハーディーに飛びかかる。

おい、待てファーガス。ひとり寝のお友達って……、お前今いく
つだよ。

「そのでつかい頭の『角』を見よつ、ちゃんとわしとお揃いの『お
りぼん』がついておるっ！
」

視線をやると”それ”のドでかい頭のとっぺんには、確かに大き
な緑のリボンが揺れている。

いや、見間違いだ。見てない。俺は見えてないぞ。頼むから俺の記
憶を消してくれーっ！

ファーガスは重そうに人形を抱えていたハーディーを一瞬で弾き
飛ばし、その”お友達”を奪取する。

早かった。見えなかった。流石だな、ファーガス。

その身体能力、もつとマシな事に使えよ。

俺の言いつけに従っていただけのハーディーは、ポーンと音が
鳴りそうなほど小気味よく回転しながら吹っ飛んだ。

空中五回転半捻り。……すげーな。捻りまで入ってるぞ。

この世界の人々は総じて身体能力が高かった。

平気で人ぐらいなら飛び越えるが、……今何メートル飛んだかな。

吹っ飛んだその先にいたのはラビエンヌ。

思わずだろつか、飛んできた『物体』をガツシリと受け止めた。
ちょうど上手い具合にその『物体』の顔はラビエンヌの丰满な胸の
谷間にきゅっぽーんっと納まり……。

うん。俺は見なかった。俺は何も見なかったぞ。

そうしている間にもファーガスは”お友達”を掲げて何やら喚い
ている。

「見よ、この愛らしい『角』をつ！ 見よ、赤子にしてこの太さ。
この尖り具合。絶品じゃーっ！」

ファーガスがその存在を知らしめるかのように高く高く掲げ上げ
た”それ”。

ファーガスによって皆の視線にさらされたその人形の頭には、キ
ュルンと巻いてツンッと尖った可愛いとんがり帽子。

確かに誰も文句は唱えない。

俺たちの目も前でデカイ頭をさらす人形の、堂々たるその威風^{いふう}。

最初は貴族の間で流行し、それが最近になって庶民の間で爆発的
に広がりだした。

愛らしい顔をしたお人形。

なぜか、裸体。

なぜ誰もそれを疑問に思わないのか。俺にはそれが不思議でたまらない。

ファーガスの心をぐっさり射とめたその可愛らしいお人形。不憫な不憫なお人形。

そのお人形の名は……、

キューピくんちゃんっ！

ああ、ファーガス。

確かに頭の”それ”はとっても可愛らしいよ。ちゃんとツンツンしてるしな。

俺の目の前、人形の”とんがり”に熱い熱い視線を注ぐファーガス。

なぜか頭頂部の一部だけに、ツンつと生えてる”それ”。

うん。確かに尖ってるよ。角に見えなくもないな。

でも”それ”、……『髪』だからーっ！

虚ろな目でファーガスの掲げるお人形を見る俺たち。

誰も何も突っ込めない。

恍惚とした表情でキューピーんちゃんの『髪』を愛^めでるファーガスに、真実を知らしめられる勇者はいない。

ああ、この秘密は墓場まで。

皆で視線を交わし頷き合う。

俺の墓はすでにガラクタで埋まってる。

そこにまた一つ新たなガラクタが放り込まれた。

ガラ〜ン　ゴロ〜ン

うず高く積まれたそのガラクタたちを掻き分けて、俺はいつかそこへ入るのか。

ああ、そんな場所心の底から、入りたくねえーっ！

おかしな静けさで満たされた俺の前、一面に広がるその光景。

虚ろな視線を虚空に彷徨わせる、挙動不審な男たち。

いそいそとキューピーんちゃんを仕舞い込もうとしているファーガス。

遠くでは上手い事やりやがってーっという良く分からない掛声の元、集団暴行に合っている男。一名。

足元には人の頭ほどの大きさの石が無数に転がり、その横で咽^{むせ}び泣く筋肉の塊。多数。

そして打ちひしがれる筋肉の塊の横でぶおり、ぶおりと筋肉達の祈りの象徴を貪り食っているのは、……馬っ!?

……男爵。馬はちゃんと繋いでおけ。ついでに餌ももっと食わせ
てやれ。

あまりにも馬鹿馬鹿しいその情景。カオス。

仕事の前にすでに精根尽き果てた俺に、いつの間にか顔を出した太陽がその熱を惜しみなく降り注ぐ。

ああ、頭では分かっているんだよ。

ムッキー隊。それは俺にとってなくてはならない存在。

膨大な量の食材を詰めた動く貯蔵庫。

俺の愛する調理器具を担いで運ぶ収納庫。

綺麗に言葉でくるめば輜重部隊。

彼らがいなければ俺の幸せは成り立たないさ。

分かってる。分かってるんだよ。でーもーなー、

「何で俺が毎度、毎度、荷物の点検までやらにやならんのだああ
 ーっ！！！！」

第21話 神への祈りとディーンの幸せ（後書き）

はい。身軽がモットーの傭兵隊が何故、鍋もフライパンも各種取り揃えて持ち運べるのか。

『彼ら』が嬉々として担いでいたんですねー。

こういった傭兵隊は『暁のみ』です。他の傭兵隊は皆さんがお考えの通り、切り詰めて切り詰めて、出来るだけ荷物を少なくしています。大抵の傭兵隊は種族ごとに固まりますしね。

ただ、鬼人族の集まった傭兵隊だけは小山の様な荷物を抱えて移動しています。彼らは基本的に整理整頓という言葉を知りません。むしろ、整理して荷物を減らす事は、悪っ！！

補足説明

塩漬けや日干しの日数に関してですが、ここでは傭兵隊の持ち歩く『糧食』という事情を念頭に、一週間では食べきれないけど三か月以上は持ち歩かない。程度の物を考えています。土地柄、雑菌に考慮し少し念入りにしているかもしれませんが。無くなったらその時にまたディーンがせっせと作ります。

閑人です

次回のお知らせです。

まず次回の更新ですが、本編はお休みして 設定集 の方に？どうして料理『風景』は出るのに料理『描写』は出ないのか？を更新します。

いつもは予告なしでおかしげな題材（？）を上げていますが、今回の題材は以前感想欄にも少し書き込みを頂いた事に関連しています

のでこちらでもご連絡を。

設定集に関しては読む読まないは自己責任でっ！

注意書きもちゃんと読んで下さいね。そちらの苦情は受け付けておりませんのでー。

その後は多分短編集の方へディーン(?)の話を一本上げて、ちょっとお休みを……。

この後の途中経過を大幅に変更したので本編のストックがキレました。

ついでにこの続き書かずに何故かせつせと「第二章」書いてます。

ああ、座布団投げないでーっ！

最近、数本の話を抱えて気の向くままに乗り換えて行く作家さんの気分が分かるようになりました。

第二章。前半はまるっとコメディーで書いててとっても楽しいんだーっ！

> (――) < すいませーん。

続きもがんばって埋めて行きますので……。出来るだけ早く次をお届けします。ではでは。

「報告とお詫びとお礼と」

*

この作品『ガルディアスの料理人』を支持して下さった皆様へ

まず、この作品をお読み下さった皆様、ありがとうございます。とても嬉しいです。ですが作者の不徳の致すところにより、この作品をこのままの形で書き続ける事が出来なくなりました。誠に申し訳ございません。

結論から申しますとこの作品を、ガルディアスの料理人【改訂版】として書き直す事に致しました。

ところでこのタイトル 新・ガルと料理人【改訂版】とどっちがいいと思いますかねー？ もしご意見が御有りの方は新しい方にでもチョロツと書き込み頂けると嬉しいです。えっ、どっちでもいい？ …… 作者もそう思います。

では次に何故こんな中途半端な所で書き直し決行となったのか、と言う事です。

実は書いてて小さな違和感はずっとあったのですが、無視していたら現在の作品の最終投稿分からピタッと書けなくなりました。この旧盤第一章のあらすじははっきり決まっていますし、終着点もすでにチョロツと書きかけていました。後はそれをたどるだけなのに、

何故か全く書けない。書く気はあるんです。でも文字が一文字も浮かんでこない。それでしょうがなく部分的な改稿作業に勤しんでいたのですが、（現在途中で停止中。すいません）やってる途中でやっつと理由が分かりました。

なんとも抽象的な表現で申し訳ないのですが、作者は土を耕さずに種まきをして、なんでこんなに実のつき方が悪いのか？ と首を傾げていたようです。

なので、現在の作品時間は夏の終わりですが、春に遡って新しく書き直そう思います。というか、すでに書いてこの投稿と同時に改訂版を投稿しています。こちらの作品を骨だけ残して余分な贅肉を削ぎ落とし、バラバラに解体して綺麗に洗って新しい方で料理し直しています。なのでこちらをお読みの方はその辺が重複してつまらないかもしれませんが、温かい目で読み飛ばして頂けると嬉しいです。『設定』の部分は変更しませんから、その辺はどうしても持つて行く事になりますしその他諸々も……。申し訳ないです。

いずれ作品中の時間が進めばこの旧作品の時間に辿り着くはずです。……多分。その時にこの話の続きをお届けできると思います。……多分。それまでお待たせしてしまい申し訳ございませんが、今後は改訂版を応援頂けるととても嬉しく思います。

ちょっと主人公の過去編をどこに持つてくるかによって、この話の順番が変わるので第何章になるかは不明です。この話自体も大筋は同じでも話の進め方が変わって来ると思います。でも結末は変わりませんので謎のままと云う事にはしませんから。すみませんが氣長に寛大なお心でお願いします。

では最後に新しく梓を立ち上げた事についてですが、作者は実は当初このページを潰して新しいバージョンをこちらでそのまま書くうと思っていました。こうした中途半端な物を晒して置く事は好きではありません。そうしなかった理由が大きく分けて二つあります。

一つ目は主人公の性格にあります。

まず主人公は生きているので当然お仕事をしていますが、その仕事の『背景』によってやはり表に出て来る性格や行動が微妙（？）に変化します。作者の中では理由が分かっているので新しい作品の主人公に全く、一欠けらも違和感が無いのですが、こちらをお読みの方にはちよつと（？）違和感があるかもしれません。主人公は非常に楽しく生きておりますので。……ええ、とても楽しく。それが一つ。

二つ目はこの作品を支持して下さり応援して下さいる方に、いくら時間を少し前に遡るだけとはいえあちこち組み替えた物を「次はこれを読んで下さい」と押し付けるのはどうかと思うのです。

現在この作品は2011年7月31日時点で

1055人の方にお気に入り登録を頂き

111人の方にご評価して頂き

評価ポイントも904ポイントも頂き

総合で3014ポイントも頂きました。

本当に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

正直ここに置いて行くのは非常にもったいな……いやいや。残念なのですがそれでもこれはあくまでもこの作品に頂いたもので、勝手に書き直しておいて頂いたご支持をそのままに「さあ、そのまま次はこっちでお願いします」というのは作者の傲慢だと思うのです。

出来れば新しい作品をお読み頂き、また改めてご支持やご評価を頂けたらとても幸せです。

他にもいろいろありますが長くなりますのでこの辺で。次は改訂版にいらして頂けると心の底から嬉しいです。

こちらの旧作品は新しい作品の時間がこの作品の時間に追いついた時点で下げさせて頂こうと思っています。何卒ご了承ください。

作者よりこのページに訪れて下さった全ての方へ。

この拙い作品をここまでお読み頂きありがとうございます。次は改訂版でお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820t/>

ガルディアスの料理人（旧）

2011年8月4日19時10分発行